

NO. 37
SPRING
1972

英語展望

ELEC BULLETIN

国際展望

- 福田陸太郎・宮内秀雄・下村誠二・寺澤芳雄・渡部昇一
「天皇・皇后両陛下のご訪欧」
「私の英語歴」・松本 亨
「転期に立つアメリカ文明」

- E L E C 賞授賞 「Oral Approachによる授業の実践」
新英文法講座 「主語と述語」
「オーストラリア・ニュージーランド英語について」
“Teachers for the Timid”
“To Express or Not to Express”

英語展望

NO. 37
SPRING
1972

ELEC BULLETIN

Edited by Fumio Nakajima

The English Language Education Council, Inc., Tokyo



【国際展望】

しぐさが語る風土と文化.....	福田陸太郎	2
日本人の数意識.....	宮内秀雄	4
英語学習の困難について.....	下村誠二	6
英語教育の在り方.....	寺澤芳雄	8
大学英語教員の養成について考える.....	渡部昇一	10
天皇・皇后両陛下のご訪欧.....	島重信	12
私の英語歴.....	松本亨	16
転期に立つアメリカ文明.....	國弘正雄	20
【ELEC賞授賞】 Oral Approach による授業の実践.....	石川喜教	33
【新英文法講座】 主語と述語.....	中島文雄	48
オーストラリア・ニュージーランド英語について.....	九鬼博	54
Teacher's for the Timid	Wilbur G. Isaacs	58
【翻訳】 方丈記.....	草島時介	61
To Express or Not to Express	平野敬一	64
【書評】 『音韻論II』.....	大江三郎	70
『新英文法概論』.....	小西友七	75
展望通信.....		77

しぐさが語る風土と文化

FUKUDA, RIKUTARO

福田陸太郎

近ごろは私の学生時代とはちがって、外国旅行が盛んだから、直接外国の事物を見聞する機会に恵まれる人も多いし、TVなどの発達により、外国の姿に親しく接することが容易になったが、それでもやっぱり、本を読むことによって、こまかい観点から、外国の風土や文化を知ることができることに変わりはない。私はどんなつまらぬものでも外国映画を見るのが好きだが、その理由はそこに外国人間や風景が出てくるので、それを見るだけで、いろんな知識が得られるからである。そういう立場に立てば、どんなくだらぬ外国の小説でも、それなりに、その国のことを行らかの意味で私たちに教えてくれると思う。そういうように、外国語、例えば英語で書かれた読物を扱えば、案外おもしろいことがころがっている場合があるだろう。

話を少し具体的にするために、今手もとにある本の中から、戦後イギリスで評判になった Kingsley Amis の小説 *Lucky Jim* (1954) をちょっと開いてみることにする。この作品の主人公ジムは、イギリスのいわゆる〈赤レンガ大学〉の中世史の講師で、その不安定な地位の故に、気に食わぬ人ともつきあわねばならず、その憂うつをまぎらすため、独りになるといろんな表情をする。気まずくなった女友だちとの厄介な出会いを考えるとき、彼は「舌を下の歯の前へ突き出して、顔ができるだけしかめ、口をあちゃくちゃにバクバク動かした。」また彼は、自分の好きな女性が、その婚約者である画家のことを親しげに語るのを聞くと、「レモンを吸うときの表情を暗がりの中でした」と、学園祭で講演をたのまれ、いよいよ壇上へ上の直前の緊張状態の彼は、手洗所へゆき「いつもするより獰猛なつらがまえを作った。」最後に思いがけない幸運に見舞われて、いい仕事にありついたとき、ジムは「自分の顔が今まで怒りや悲しみの表情ばかりに慣れて来ているのをたいへん残念に思った。今のように別な表情をすべき晴の場面に際会して、それを祝うのに適當なのがないのだった。ほんのしるしまで、彼は古代ローマの性的生活というのをやってみた。」これらの括弧内の文章は、原文からの拙訳による引用であ

る（以下同じ）が、このほかにも、この小説の中には、いろいろな人物の表情が実際にいきいきと描かれる。

一般のイギリス人が、上述のジムの場合のような表情をするとは考えられないし、ジムは特にしかめつづらをする癖があると思われるが、それでも日本人よりはかれらの方が表情はゆたかであるように思われる。そういう点に注意しながら小説を読んでいれば、作中人物個人の癖は癖として、国民全体に通じるしぐさの特色ともいうようなものもつかめるのではなかろうか？文学作品のテーマとかストーリーとかもおもしろいにちがいないが、こういう何気ない動作に注意してみることも、なかなか興味深いのである。最初に述べたとおり、現代のように活発な国際交流の時代になると、日本人でも西洋的な身ぶりをする人が出てきて、例えば“shrug one's shoulders”（肩をすくめる）ようなことを自然にやる人も目につく。同じ人間だから、表情や行動が大部分似通っているのは当然であるが、やはり、お国ぶりというものがあって、それをこまかに観察することもおもしろいのではないかと思う。

次にもう一人のイギリス作家 P. H. Newby を例にろう。彼は中近東を背景とする気の利いた作品をいくつか書いている。その一つに “A Parcel for Alexandria” (1958) というのがある。物語の主人公はエジプトに永く住むイギリス人 Spearing で、彼はカイロの中央郵便局からアレクサンドリア宛の小包を出そうとして、その手続き上のことで局員ともんちゃくを起こし、郵政省へかけ合いにゆく。当の係官の部屋へつくと、「人々はその高官の机のまわりにむらがり、争って彼の注意をひこうとしていたが、その役人の方は、いつ果てるとも知れぬ長電話をつづけていた。」この風景はいかにもエジプトのお役所のふんいきをよく伝えている。ところで Spearing は役人によって外へ追い出されると、「今まで使ったどの言葉よりも烈しいのしり言葉を見つけようとして、精神を集中するために、道路にしゃがみこんだ」と書いてある。これはもちろん一般的のイギリス人にとっても異常な行動であるにちがいないが、とにかく、この

小説は作者自身も登場人物の一人としてその場に立ち合うようになっているだけに、極めて写実的であり、Speaking を実在の人物として印象づける。そして彼をめぐるエジプト人の特異なふるまいも鮮かに描き出される。

以上の例は、たまたま手近にあった書物から急いで引いたものであるから、必ずしも適切な例とも言えないと思うが、一つの微視的な見方から外国の小説を味わってみようとする私の意図はおわかりいただけたと思う。

こうして、ちょっとした人間のしぐさが集まって一つの行動となり、思想となり、共通のものが一つの風習を作れる。だから、作中人物のしぐさの分析から始めて、彼の行動や対人関係を、私たち日本人のもつ基準に照らして考察してゆくと、当該外国の風土や文化や国民性の特色を浮き出させることも可能になるかもしれない。そういうことをする材料としては、なるべく写実的な手法の作品をえらぶ方がやりやすいわけだが、すぐれた作家のものになると、人間観察の目は鋭く、描写もいきいきしているから、それを土台として、比較文化的、比較心理学的な研究へと進むこともできるであろう。Henry James の有名な作品 *Daisy Miller* (1876) は、新世界から旧世界ヨーロッパへ来た純真なアメリカ娘が、そのアメリカ式行動の故にヨーロッパの古い生活様式とかみ合はず、悲劇的結末に終わる話であり、彼女のしぐさや行動は、当時‘アメリカ的’と考えられていたものをよく示す。では次にもう一つ具体例について考えてみよう。

Kennicott went about casually letting people know that he was “going to run down to the Cities and see some shows.”

As the train plodded through the gray prairie, on a windless day with the smoke from the engine clinging to the fields in giant cotton-rolls, in a low and writhing wall which shut off the snowy fields, she did not look out of the window. She closed her eyes and hummed, and did not know that she was humming.

She was the young poet attacking fame and Paris.

In the Minneapolis station the crowd of lumberjacks, farmers, and Swedish families with innumerable children and grandparents and paper parcels, their foggy crowding and their clamor confused her. She felt rustic in this once familiar city, after a year and a half of Gopher Prairie.

これはアメリカのノーベル賞作家 Sinclair Lewis の代表作 *Main Street* の冒頭である。この小説の主人公の一人ケニコット氏が、自分が the Cities ヘショーを見

にゆくことを知人たちに聞こえよがしに話す、というのは、田舎住まいの彼が、大きい都市へ遊びにゆくことに心浮き浮きして、他人を羨ましがらせようとして言っているのである。The Cities というのは、ミネソタ州で Twin Cities と呼ばれている2つの都市——ミシシッピー河をはさむ St. Paul と Minneapolis のことであり、ケニコット夫妻の住む Gopher Prairie という田舎町は現在の Sauk Centre という町をモデルにしたものである。St. Paul に一学期間住んでいた私には、この小説に出てくるこのあたりの描写が、いかにも細かく正確であることに気づく。ケニコット夫人が「名声とパリに挑戦している」若い詩人であるというのも、このへんびな中西部の人々がパリに対してもつあこがれの気持をよく示す。ミネアポリス駅に lumberjacks 「材木切り出し人」と Swedish families が多いというのも、ミネソタ州が“the State of 10,000 lakes” と仇名されるほど湖と森の多い州であり、その辺にスエーデンからの移民がたくさん住みついているからなのである。試みに Webster 辞典で main street の項を引くと次のように書いてある。——influenced in meaning by *Main Street* (1920), novel by Sinclair Lewis, American novelist and playwright that portrays materialistic provincialism as a characteristic of American life in a small town.

こういうふうに main street という単語に特殊のニュアンスを与えるに至ったほど大きな影響力をもつ小説だけに、書き出しの数行に含まれた風土や文化の背景も、心して読めば、興味ぶかいものがある。

数年前、私の親しい友人のイギリス作家が東京を舞台にした小説を書いて、ロンドンで出版したことがあった。その中に、いつもカバンをぶらさげてセカセカした足どりで動きまわる日本人の登場人物があったのをおもしろく読んだが、あとで考えて、これはひょっとして私をモデルにしたのではないか、とふと思つて、ギクリとした覚えがある。私たちがある環境の中に没入しているため自分で意識しないことがらで、外国人の目から見るといかにも“日本の”と思われることがあるにちがいない。私たちの方でも、外国の文学作品を微視的に見て、登場人物の一拳手一投足に注意を払うことにより、かれらの生活のにおいといったものを感得し、ひいては比較文化的な考えに達することもできるだろう。最近は英語の読物の教材として、小説などよりノンフィクションの方がいいという声をよく聞くが、私としては、人間生活を最もいきいきと描くのが小説作品だと思うから、外国のすぐれた作家の書いた小説類をこまかに読むことの利点を、強調したいと思う。

(東京教育大学教授)

日本人の数意識

MIYAUCHI, HIDEO

宮内秀雄

昨年の9月、例のニクソン・ショックから間もないころ、ある大臣が記者会見で日米関係についてこうのべたものである。

——物の交流も大切だが心の交流も重視しなければならぬと思う。

この事自体は私も大賛成である。だが、それに続けて同大臣は妙な英語を使った。

——つまり、グッドのエクスチェンジばかりでなくハートのエクスチェンジを心がけるべきだということだ。

新聞記者からは何の質問もでなかつたが、どうもこの英語は少しおかしい。‘物’ならgoodsであろうし、「心の交流」はheart-to-heart (talk) というべきであろう。もちろん、heartsと-sをつけてa union of heartsということはできる。しかし、このばあいは「恋愛結婚」に当たり、少し意味が強すぎよう。もっとも、その昔、故斎藤秀三郎だったか、日英同盟をAnglo-Japanese marriageと呼んだというから、それでいいといわれればそれまでである。

しかし、an exchange of hearts とすると、何だかお互に「心臓移植」を行なったようにとれる。

ともかく単数でan exchange of heartは意味が明らかでない。

この大臣はカミソリのようによく切れるという評判であるが、やはり日本語的思考の特徴である「数」——文法範疇としての——の意識の稀薄をまぬがれないように思われる。

この特徴は専門家である英米文学者にも時たま見うけられる。ある有名なアメリカ作家の作品をある有名なアメリカ文学者が雑誌に訳載した。その中の

There's bird on your lip.

という表現を「君の唇に鳥がとまっている」と訳した。なるほど、手のり文鳥なら下唇にとまることもあるだろうが、それでもa birdとなる筈だと思って、アメリカ人の教師にきいて見たら、やはり、birdは鳥でないことは確かだがどういう意味か、わからない。どうもcon-

textから考えるとbloodのなまつたもので「君の唇に血がついている」という意味だろうと答えた。

だから学生は冠詞がついていようがいまいが、名詞だろうが何だろうが、おかまいなしに訳しかねない。たとえば

He defended himself against the roughneck by hitting back. (彼はなぐり返すことによってその乱暴者に対して身を護った。)

の hitting backを「せなかをなぐることによって」とやる。(backは副詞) また

When you have solved a hard arithmetic problem or learned to figure skate, you can be proud of yourself. (数学の難問を解いたり、フィギュアスケートをおぼえたら、あなたは自慢してもよい。)

の to figure skateを「スケートに模様をつける」とやる。(skateは動詞) 英和辞典には名詞形figure skatingはあるが動詞形 [to] figure skateはでていない。しかし、もしskateが名詞ならyour skateかthe skateとあるべきである。いわば無冠詞の拡大解釈である。

だからto fight dog(勇敢に戦う)とto fight dogs(犬を闘わせる;闘犬をさせる)の区別がつきにくい。いうまでもなく前者のdogは犬のひとつの本性、即ち、「勇敢」でもってdogを普遍概念化したので、普遍概念、いいかえれば抽象概念であるから無冠詞になっているのである。日本語ではこのばあい、「犬のような勇敢さ」とでも訳すほかはないであろう。

この種の思考、つまり、具体→普遍(または抽象)という思考は日本人に非常に苦手であるようだ。だから

The dog is a faithful animal.

といふばあいのthe dogは「犬というもの」とか「そもそも犬なるもの」と訳せば大体近い表現価値になるが、to put on the dog(エラぶる;尊大ぶる)のthe dogになるともう直訳は不可能となる。このばあいはto put dogと同じでdog showでprizeをもらった犬の高慢さを意味しているので、日本語に移しかえるなら、「犬のように高慢な様子」と長たらしく訳すほかない。

しかし日本語的思考にも具体→抽象というパターンが——稀薄ながら——あることは確かである。それは「犬」という名詞が示している。

現実に存在するのは「この犬」か「あの犬」「その犬」などであって、「犬」一般は虚構（フィクション）であるのに、日本語でも「犬」が多くのばあい用いられているのだから。

しかし、それでも、なおかつ、その虚構の内容構造、いいかえれば抽象化、普遍化の程度が英語よりも相当に低いということもまた確かであると思われる。

それは不定冠詞 a, an に当るものがないことである程度明らかである。英語の dog は世界中の犬から共通の本質的属性を抽出したもので、いわゆる定義で同質化される、いいかえれば連続する。さらにいいかえればほとんど無限大の dog になる。A dog の a はその中から 1 匹分の本質的属性を切り取ったもので、これが現実の dog に対応するのである。

日本語の「犬」は現実の犬から二次的な要素を切り捨てたもので、あとはその犬の copy をいくらでもつくれば足りる。100 匹の犬なら 99 の copies をつくる。

これに対し、英語の dog は無限大の dog、連続体の dog から 100 匹分の本質的属性を切りとる。

同様に、「花」もある程度抽象化されている。現実には桜の花や梅の花は存在するが、「花」一般は存在しない。

しかるに、日本語では「桜の花」をたんに「花」ともいう。これは佐藤喜代治教授によれば「桜の花」の省略された形態で、「秋の月」をたんに「月」といい、仏教用語で「食事のとき」をたんに「とき」というのと同じであるという。

日本語で具体名詞の抽象化、普遍化が完全に発達していないと思う根拠は複数形の意味内容にもある。たとえば「乙女ら」の「ら」は親愛觀を表わし「こいつら」の「ら」は軽べつを表わす。

また「花々」といばあいは種々の花の意に用いることが多い。例、

陶壺に黄菊白菊活けたれば花々寄り添い

黄のそばに白（木下利玄）

その上、「友達」「公達」または「同朋衆」「ご家來衆」「女房衆」などの如く、複数形が单数化することも多い。「花々」もたんに語調を整えるために疊語に用うることが——とくに訳詩に——多い。

さて、いよいよ、日本語的思考ではどうして数意識は十分に発達し得なかったのか、その理由について考える順序になった。

それは日本語的思考では森羅万象を「はたらき」としてとらえるためである。たとえば朝顔の花が一輪咲いたとする。この一輪の朝顔を咲かせる「はたらき」は百千万億輪を咲かせることができる。その意味に於て一輪=百千万億輪、すなわち、「一即多」である。

この「はたらき」を古代日本人は「靈」または「魂」と呼び、その「はたらき」の展開を「産靈(げ)」と考えた。

仏教や儒教が入ってからはこれを「氣」といった。

この「氣」の意味内容は人によって違うが、大ざっぱにいって清濁、陰陽、精粗などに分類され、この相違によって生物の種類が生じ、また同じ人間でも賢愚、貴賤などの差が表われる。とした。

したがって朝顔のばあいにも輪の大小、色彩の種類、絞りの強弱などいろいろのパラメティのるのは当然であろうし、さきにあげた「花々」がとかく「いろいろ違った種類の花」の意味になり勝ちなことも理解できよう。

この「氣」の考え方方が日本語的思考に大きな影響を与えていることは「元氣」「英氣」「氣力」「氣合」「氣迫」「病氣」など多くの表現を思いあわせれば明白であろう。

また、宗教——とくに禪宗——や武道ではこの「氣」のとらえ方は重視されているし、今日でも文学作品に用例を拾うことができる。舟橋聖一「太閤秀吉」の昭和46年 11 月 20 日付読売新聞所載

——所謂風雲を捲き起すていの英気が光り輝き、恰もそれに吸い込まれるように、同心せずにはいられなかつたのではなかろうか。

一方、同じような考え方は西欧にもある。アリストテレスはデュナミスとかエネルギアということを考えた。朝顔に例をとって、この考え方をあてはめると、朝顔の花が咲くのははじめからそういうボテンシャリティをもっている。これをデュナミスという。これが展開するのをエネルギアとなる。そして展開が完了して、結果が残ると、とくにエンテレケイアと名付ける。結果が残るから、それを分析したり、また総合することになる。そして無数の朝顔から共通の本質的属性を抽出することも容易である。

ところが日本語的思考では「はたらき」また「氣」はいつまでも完了しない。だから結果はあるようでないといえる。数意識が確立しないのは当然であろう。

むろん、この数意識とは文法範疇としてのそれである。いくら日本人でも花屋が朝顔や菊を一輪売って百千

(p. 53 へづぐ)

英語学習の困難について

SHIMOMURA, SEIJI

下村誠二

日本人が非英語国民のなかでもとりわけ英語を話すのが下手であるというのは、少なくとも日本人自身の間では定説になっているようだ。この定説が果して客観的に証明できるものかどうかは分らないし、「下手だ」ということの内容にもいろいろな保留を設けなければなるまいが、しかしあれわれ自身の経験からして日本人にとって英語の学習がきわめて困難であることは疑いない事実である。

この困難の原因として通例あげられるのは大ざっぱに言って 2 つの点で、その 1 つは学習の不足もしくは不適、他の 1 つは日英の言語の差異の大きさである。これに第 3 の側面として日本人が外国語を話したがらないという心理的もしくは社会的・文化的な事象が加えられる。

この第 3 の点をあまりに強調すると、日本人は英語が話せないのでなくて話さないのであることになり、英語の教師としては責任が軽くなつて御同慶の至りだが、これで問題が片づくわけではない。水泳はできるが水に入るのがいやだという人ならば、船が沈没する時にはいやでも泳ぐわけだが、泳げるようになるまでは水に入らないという人は溺れ死んでしまう。英語を用いる必要に迫られ、はっきり不便を自覚しながら、なお話さないのは、やはり話せないと言う方が正直であろう。本誌でも何人かの方々の指摘があった通り言語は「話すことによって学ぶ」のが最も自然で有効な学習法であるから、この第 3 の点の帰結はむしろ「話さないから話せないのだ」と言うほうが正確であろう。

第 1 の点、すなわち学習の不足または不適という点は英語教師にとって直接の関心事であるばかりでなく、近年産業界や学界の一部から、いわゆる「役に立つ英語」の要求に基いて、英語教育についての批判や要望が出ていているという意味でも、これらの 3 点のうちで専も注目されている面である。この点についてはあまりに多くのことが語られていて、今さら活字の洪水に一滴を加えてても何ほどの意味もあるまいと思われるが、あえて私がつねづね気になっている 1 点を付け加えたいと思う。

それは従来この問題が論ぜられる場合にとかく学習の不適という面、すなわち大ざっぱに言って教授法の良否にあまりに大きな注意が払われ、学習の不足、すなわち学習量の問題が比較的軽視されているのではないかという危惧である。

例えは従来の英語教育の罪悪（？）の一つとして槍玉にあげられるものに訳読法なる授業形態がある。たしかに訳読のみによる外国語の学習は著しくかたよったもので、言語の運用能力の十全な発達を目的とする限り極めて劣った方法であることは言うまでもない。しかし、それならば現在の高校や大学の英語授業をそのままオーラルドリルや作文や会話を主とするものにかえれば学生の英語力が飛躍的に増大するかと言うと、私はその結果にあまり大きな期待はもてない、というよりも逆に学力の低下を招くこともありうると思う。

その理由は学習量の低下である。現在の大学での条件に即して考えた場合、訳読法で 1 回 90 分の授業で扱われる言語材料が 5 ないし 10 頁とすると、オーラルドリルその他の方法で扱えるのは半頁ないし 1 頁であろう。これに加えて訳読の場合学生の校外での自習が容易であり有効であるという利点がある。オーラルドリルを自宅で自習するということは技術的にも心理的にも困難が大きいし、もう一つの問題として各人が自己の学力に合わせて進度をかえにくいという難点がある。本を読むのであれば学力のある学生は短時間に大量の英語をこなすことができ、その逆に学力の劣った人は少量をていねいに読むことができるが、例えはテープの教材は誰がかけても一定の時間を要するし、分っても分らなくてもその時間で終わる。訳読では辞書や訳本が（使いようによっては）助けとなるが、音声教材では与えられた教材以外のものはほとんど利用できない。

このように見えてくると過去の日本の英語教育が訳読を中心としてきたのも、今日その弊害が叫ばれながらも容易にこの方法から脱却しえないのでそれなりの正当な理由があると考えるべきであろう。純粹に「方法」の問題として見た場合、訳読法に軍配の上がる点はあまり見当

らないにもかかわらず、現実の条件にあてはめて学習量という観点から眺めると一挙に訳読法を捨ててしまうことはとてもできない相談のように私には思われる。

このように書いている目的はなにも訳読法を弁護して現状を墨守しようというのではない。むしろ訳読法を真に克服するためにはもっと英語教育における量の問題が重視されなければならないということを言いたいのである。量の問題はいろいろな形で現われる。例えばオーラルドリルや会話の授業の場合学生1人の学習量は大ざっぱにいってクラスの人数に反比例するが訳読の場合にはそれほどではない。前者を有効にするためには学生をへらすか、クラスの数（従って先生の数）を増やすなければならない。もし社会がいわゆる「役に立つ英語」を本当に必要としているのならば、ただ教え方を変えると言うだけでなく、それが可能になるような物的的な配慮が伴わなければならない。これも量の問題である。

しかし私がこれから論じたいと思うのは英語学習の量とは何かという問題で、これは、この小文の先頭であげた3つの点の第2のもの、すなわち日英語の差違という問題についての私の考え方と深い関係があるので、それから始めたいと思う。

日本人が英語を学習する場合に日本語と英語の違いの大きさが決定的なハンディになることは誰もが認める所である。しかしこれを日英両語の言語構造の差というような表現で片づけてしまうのには問題があるよう私には思われる。日本の英語教育界はメソッドや理論に弱いということがしばしば指摘されるが言語構造というと答え方もすぐれて文法理論のそれである。文法は言語から抽出されたものであって言語そのものではない。ところが言語教育の対象は言語そのものであってその構造ではない。言語の習得を言語構造の習得と同一視するところに文法偏重の言語教育が生まれる。私が言っているのは悪名高い学校文法の弊害ではない、文法授業の可否でもない、バタンプラクティスでもプログラム学习でもおよそ言語の一般的ないし法則的な面を重視しすぎる場合に共通の危険である。私はこれを言語の量的な側面の軽視と呼ぼうと思う。それが正確な呼び名だからではなく、最も包括的で私には一番端的な名称のように思われるからである。

話をもどして、日本語と英語の違いがどこにあるかという問題を考える場合に、この量的な観点をとるか否かで出てくる解答は著しく異ってくる。話をとっとり早くするために、ごく通俗的で粗雑な結論を先に申上げれば、私は両語の最大の違いは語彙にあると思う。これが量的な観点である。多くの言語学者、少なくとも文法学者

にとってこの結論は滑稽なものでしかないであろう。そもそも語彙などというものは文法理論の中で扱ってもらえるかどうかかも怪しいものなのだ。文法の理論は語彙すなわち個々の記号または記号の複合体がすでに存在している所からはじまり、その上に築かれる。ところが外国語の学習者にとってはその記号そのものが存在しないのであり、その獲得がまず直面しなければならない課題なのである。そして外国語学習の全過程を通じて語彙の獲得に要する努力が量的に言ってずば抜けて大きな存在であることは疑いない。なぜなら一つの文法的項目（このようなとらえ方が許されるとして）を習得するのと一つの語彙的な項目を習得するのとどちらが困難かということは簡単に言えないことであって、私自身の感じでは、例えば英語の文が SVO という語順をとるという知識を授けることの方が justice という語の意味と形を教えるよりも困難であるかどうかは疑わしい。しかも文法的項目は有限個の少数であり、語彙的な項目は主観的には無限であるからである。

しかしこのことを承認する人でも、文法的項目の重要さから、限られた学習時間においてそれを重視するのは当然だと考える人は多いと思われる。しかしこの価値判断は再検討の必要がある。第1に文法は語彙をはなれては存在しない。これはいかなる言語についても真実であるが、特に英語の場合、文法的な機能をもった形態素がほとんど失われている関係上、単語そのものの意味や用法が決定的であって、文法から得られる情報は極めて少い。文法家は語順の重要性を説くが、すでに語順と言う以上、語を identify しなければならない。英語の場合、語を identify するには、その語を知っているという以外にほとんど手がかりはないのである。このことの認識はとくに音声言語において重要である。従来語彙が比較的軽視され得たのは、専ら文字のテキストをじっくり読むことに重点がおかれたからである。文字では伝統的な単語の切れ目が既に明示されていて、学習者は辞書をひいてその意味や用法を知ることが容易であった。しかし音声言語では、ほとんど切れ目がない音の連続の中から意味と結びついた音の形態を即座に identify して行かなければならない。その時に分らなければ後で調べる方法は最初からないのである。語彙の力は前提条件である。この事情は表現の場合にはさらに決定的である。

第2に、もっと根本的に、伝達の手段として言語のもつ最も一次的な働きは個々の記号による意味の表示であって、文法はその refinement に必要なものであるにすぎない。もし日本語を知らない英国人に日本語の単語を

(p.19 へつづく)

英語教育の在り方

TERASAWA, YOSHIO
寺澤芳雄

始めからそう目新しくもない私事にわたって恐縮だが、1965年秋に中世英語・英文学研究の名目でYale大学に赴いたとき、私は家族を引き連れていくことになった。当時、上の女の子は小学校2年の1学期を、下の男の子は1年の1学期を終えたところで——静かな大学町New Havenに着いてまだ数日たらず、居も定まるか定まらぬかというころに、ちょうど新学年を開始したその町の小学校に入ることになった。渡米前に英語の手解きはまったくといってよいほどしていなかったから、突然アメリカ人ばかりの教室にほうり込まれる子供たちは、さぞ途方にくれたであろうし、担任の先生方——ご他聞にもれず年輩の御婦人だったが——もずいぶん当惑されたに違いないと思う。事実まもなく家内は担任の先生に呼び出され、「家ではできるだけ英語を使ってほしい」と強く要望されたそうである。しかし、そもそも英語など喋るのは大の苦手であった私や、私と似たりよったりの家内が、掛け合い漫才よろしく廻らぬ舌で英語で応待などする気にはなれなかったから、子供たちにとって言語的環境は一層みじめだったに相違ない。けれども、最初は‘お手洗’が家ではbathroomだが学校ではlavatoryということを知らず、all at seaであった子供たちも、2ヵ月位たつとnervousな精神状態を家に持ち帰ることもなくなり、3ヵ月もしたころには、それまでは学校で自らはけっして話そうとしなかったのが、急に堰を切ったように進んで話し始めるようになったらしい。もっとも理解する方はかなり早くから馴れたようで、まだ2、3週間ほどのころ、家に帰るなり、「明日は学校で写真をとるから、一番よい服を着てくるようにいわれた」という——よくそんなことが分ったと思い、どんなふうに言われたのかと問い合わせたが、さすがに言葉としては覚えていなかった。そして半年目を迎えるころには、もう先生や友達との応待にほとんど不自由しなくなったようである。そのころのことだったと思うが、男の子の担任の先生から呼び出しがかかり、これはまた「親よ英語を使え」の催促かと恐る恐る行ってみると、「お宅のおさんは授業中に隣の生徒とお喋りが多くて困る」という

お叱言、これには二重に閉口したことであった。やがて1年半余りの滞米生活を終えて羽田に着いたときには、「どこからこの飛行機にのってきたのか」と聞いた祖父母たちに、「ハワイから」と答えたのだが、Hawaiiをアメリカのアクセントで発音したためになかなか通じず「これは大変なことになった」と年寄たちを慌てさせたことであった。

そういうば、私たちと同じ期間、Yaleで研究生活を送った友人のI君も、何かの折に子供が書いた手紙の中に、It reminds me of...というような言葉が使ってあるのを見て、どうしてこんな表現が自然に覚えられるのか驚いたと、後になってよく言われたことも思い合われる。私も時折、子供の友達からの電話を取り次がされてまごつくことがあったが、「はずかしいからパパは電話に出ないで」と子供に冷かされたものであった。2ヵ国語習得は5、6歳～8、9歳が最適であるとか、外国语の習得はnative speakersの中に入れば極めて容易だとかいうことは、常識として心得ていたが——それだからこそ、渡米前に何の準備も与えなかったのだけれども——これ程の効果を身近に経験させられると、学校で12年も英語を学び、それを遙かに上回る年月英語の教師を務めている者として、そういう英語教育の実際的効果に大きな疑問をもたざるをえなかった。

ところでよく注意してみると、2人の子供の英語習得の程度にはある相異が認められた。

すでに、日本の小学校で2年の1学期を終えた女の子は、平がなや片かなや多少の漢字は身についていたし、それに本を読むのがひどく好きで（濫読というべきか）、滞米中も日本から送ってもらう本とアメリカの本を区別なく貪り読んでいたせいか、帰国後英語を忘れる度合が弟の方よりずっと遅かったようである。つまりChomskyなども言っていた‘視覚的支え’の効果であろうか。それに比べると、まだ平がなも完全に身につかない中に異なる言語環境に投げ込まれ、またどうやら無精のせいか、本は人に読みでもらうものと決めているらしい弟の方は、今度は漢字を1つ覚えると英語の単語2つを忘れるとい

う具合であった。発音の点でも、姉の方は——一つにはピアノのレッスンなどで聴覚が訓練されていたせいもあるかもしれないが——まず完全に native accent であった。弟の方は、イントネーションは natural だが、よく聞いてみると細かいところはごまかした感じがあった。ともかく姉の方は時折けっこう難しい本でも——あるときは Stevenson の *Treasure Island* を読んでいるので一寸生意気だと問い合わせると、何とか大意は掴んでいるようであった。結局途中で挫折したようだし、勿論知らない単語や構文はやたらにあった筈だが、ともかく蛇にも怖じないところは、native の環境で生活した者の強味であろう。知らない単語でも何とか英語らしい発音、たとえ間違えてもアメリカ人の子供のやりそうな間違いをする。これは帰国してからのことだが、同級生に頼まれて書いたカナ書き発音つきの単語のリストを見たら、グロース (girls), カール (car), リトー (little)…といったふうであり、また上野を Woeno と書いたりして、私たちを興がらせた。

一向めずらしくもなさそうなことを長々しく書いてしまったが、こういう経験を目のあたりして、私は私なりに英語教育に対する反省をいやでも迫られたからである。

いわゆる‘役に立つ英語’というのは、曖昧な意味ながら、確かに時代の要請であろう。そして、役に立つ英語の習得に、英国や米国での生活経験がいかに効果的であるかは、上のささやかな1例でも明らかであるし、またヨーロッパにおいては、屢々外国語教育の一環、あるいはその仕上げとして、学生に数ヶ月から1年にわたる当該国での生活経験を義務づけていることはよく知られている。しかし、現在の日本における英語教育では、現地生活の経験はやはり例外とすべきであろう。(ただし、英語教師を志望する学生には、ある段階でたとえ短期間でも現地生活を義務づけ、あるいは資格づけるべきだと思う。) そこでこれを補う方法であるが、いろいろ考えられようが、教室中心に考えれば、LL の充実と活用、(会話、作文などで) native と組んでの授業などのほかに、background study がもっと取り入れられるべきではないだろうか。それは単なる風物詩的知識の切り売りではなく、英語という言語の背後に存在する——民族的、社会的、政治的、文化的等々の制約を受けた一つの新しい世界を覗かせるようなものである。ある場合には言語と思考の関係をめぐるような問題もそこから発展してきてよい筈である。そのような形での言語学の導入も考慮されてよいであろう。

私の関係している大学でも、大学改革の論議の中で

‘大学における外国語教育の目的、あるいは在り方’が再び問われるようになった。従来、大学教養課程における外国語教育の目標として、単に実質的な語学力のほかに専門教育への準備、外国文化の理解、国際交流の手段としての語学力養成というような方向づけが行なわれてきたと指摘されている。これらの要請はいずれも十分な根拠をもつ、尊重されるべき正しい目標であろう。かつて、大学における英語教育の目的は‘教養’か‘実用’かという問題が論議されたとき、私は「このヤーメス的性格はさけられないものであり、双方を同等にというわけではないが、いずれか一方を切り捨てることは、大学英語教育の正しい在り方ではないと思う」と述べたことがある。一般教養課程の英語に関する限り、私のこの考えは変わっていない。人間の言語のもつ多面性は、必然的に言語教育における多目的性を生み出す筈だと思うからである。

最後に、外国語教育において最近は流行らない考え方らしいが、古典語習得にみられるようなテクストの緻密な解説、一種の close reading ともいべき‘深い読み’の訓練の重要性を強調しておきたい。ちょうど欧米人が近代語と構造を著しく異なる古典語を学習する際に、一字一句を忽せにしない厳格な discipline によって、正確な言語使用と明晰な思考の力を養い、それによって広い視野、偏らぬ判断力、洗練された識別眼を身につけようとしたように、我々は日本語と言語構造を著しく異なる英語を始めとする現代ヨーロッパ語のテクストを、いささかの安易な妥協を許さぬ厳密な態度で読解する訓練のもつ意味を忘れるべきではあるまい。その意味で私は、我々の大学でいえば Intensive Course のようなクラスで、例えば Walter Pater とか Henry James のような難解といわれる作家の文章をじっくり時間をかけて読むことが、決して時代錯誤などではないと信じている。James がかつて W. D. Howells に向って「自分の作品の読者が少ないのは、今日一般的の英米人が集中力 (the faculty of attention) を全く失って行ったからだ」と歎いたそうだが、私はそこに現代人の病弊の一面を見るような気がする。母国語と著しく構造を異なる言語で書かれた、安易ならざる文章と取り組んで、苦闘しながらその意味を一つ一つ解き明かしていくことは、今日のテレビを頂点とするマスマディアによって毒された世代に、集中力と強靱な思考力を恢復させる有力な方法の一つではないだろうか。これは、ただ native の環境を与えただけでは解決できない問題である。

(東京大学助教授)

大学英語教員の養成について考える

WATANABE, SHOICHI

渡部昇一

本誌の先号 (No. 36 Winter 1972) を読んでいて面白い暗合に気が付いた。外山滋比古氏の「アイランド・フォーム」の中にも、カーチス・國弘・金山3氏の「鼎談」の中にも、日本人の特徴として「腹芸」があげられているのである。外山氏は言う、「腹芸が通る。野暮はきらわれ、以心伝心が尊重される。気心の知れてる人間だけとつき会えばよい…したがって、内弁慶が多い。座談はおもしろいが、スピーチをやらせると、退屈きわまりなしといった名士が多くなる。人見知りするのである。初対面の人にも腹芸が通用するように思っていて、それがうまくいかぬと見ると、ふたを開いた貝みたいになってしまふ。」まことに的確な観察である。

こういう国民性だから、「あこがれの外国旅行から帰ってくる人たちが申し合わせたように愛国者になってしまっている」ということも生ずる。こういう安手のナショナリズムがひろがると、当然それに便乗する政治家や物書きが出るわけで、外国崇拜から一転して尊皇攘夷ムードになりかねない。この振幅が大きいのは甚だ危険なことと考えるべきである。ドイツ人のバリーに対する感情的反応についてはカントも晩年述べている。彼の『人間学』が講じられたのは18世紀の末であるが、それから150年間に独仏間に何度戦争があったかを考えて見れば、憧憬と排撃の間にはブランコ的関係があることがわかる。我々も欧米礼讃と排撃の間を振幅激しくゆれているうちには、もう一度戦争状態突入ということにもなりかねない。ニクソン・ショック以後、多くの日本人が感じた孤立感は明かに危険なものではらんでいる。

このような日本の内弁慶的腹芸癖を克服する具体策として、外山氏は「新しい語学の理念」にもとづいて外国语教育を再編成することを、鼎談者たちは「逆フルブライト構想」を提案しておられる。いずれも結構なことと思うが、私はここでもう一つの案をつけ加えさせていただくことにしよう。

我々は中学や高校の英語教育について、またそこで教える人たちの養成法については從来も論ずることが少な

くなかった。戦前は大学の英語教育が問題にされることはほとんどなかったように思うが、近頃では大学英語教育を研究する学会まで出来ているようである。

ところがこういう問題一切の根源に横たわる大学の英語教員の養成法についてはほとんど聞いたことがない。有名大学の大学院を出て有力な教授のコネを通じてポストをえる、というのが大体の実情であるようだ。公募するところもあるようだが、数は少ないし、その場合も実質上はそれほど今までとは違っていないような印象を受ける。そこには外山氏の言う「縁故、派閥、学閥、門閥と言った閉鎖的小グループがよく発達している」ようである。つまり大学という最高教育機関が、島国型腹芸人間を作るのに最もよい形をとりながら自己のスタッフを作っているのだ。

この危険に気付いたのは数年前に、知り合いの大学院生が留学辞退をしたのを知った時である。ヨーロッパの大学から某大学の某学部の大学院に奨学生の招待が来た。ところが男子学生は皆んな辞退して一人も行く者がいない。結局女子が行った、と言うのである。よく聞くとそれがはじめてのことではなく、前にもあったことだそうだ。

学生の言い分にも一応筋が立っている。留学してしまうと助手の口があいたり、他の大学に専任講師の口ができるとき、留学しないでいる人が行くことになり、留学して帰ってきても口がないから再び大学院に学生として戻らなければならない。留学するなら必ず専任の学校が見付かってからの方がよい、と言うのである。事実がこのようであるならば留学は出征も同様であり、その分だけカリア上の損失ということになろう。

なるほど戦争直後ほど留学の必要はなくなってきたかも知れない。しかし外国文学や外国语学をやる者にとって留学の効果は絶大である。その機会を知識欲が旺盛であって、しかもその国の語学や文学を専攻している大学院生が忌避するようでは一大事ではないか。根本的なところで本末顛倒しているのではないか。それは言葉の最も深い意味での「堕落」であり「腐敗」ではなかろうか。

「あなたの大学で学士あるいは修士を取った男がアメリカに留学し、数年経ってから Ph. D. を英米文学、あるいは英語学で修得して帰ったとしたらどうされますか」と言う問い合わせに明確に答えてくれる大学がいくつあるだろうか。自然科学の分野ならアメリカの Ph. D. と日本の理博や工博を等価、あるいは後者をより高く評価してもよいだろう。しかし外国文学や語学の場合には話は全く別問題である。それは実験したことなく自然科学の論文を書く学者と、実験したことのある科学者との差にも似ている。もちろん実験しないでも相当の科学論文が書ける人もある。しかし実験をするのが建て前であり、実験できた方がよいし、学生の実験の指導もできようと言うものである。

これはアメリカなどでも同じことで、日本文学や日本史の研究者が、日本の学位を持っていれば、アメリカの日本学の Ph. D. と同等以上の認知を受けるのがあたり前になっているし、我々もそう思う。ところが我々は自分の国のことになるとこの常識をあまり通用させないので、修士を出て数年間日本を留守にすることは、日本の大学で身を立てようとする若人にはかなり危険なことらしいのだ。危険と言って悪ければ、少しも得にならず、定年のことまで考慮するならば、相当の損失になることは明白である。外国に出て外国のことを研究するのがマイナスになるような人間関係の下に外国文学の大学教授は作られてゆく。そうしてできた教授が高中小の教員を作っているのだ。内弁慶の腹芸国家にならざるをえないではないか。

今どき外国の Ph. D. の肯定的評価をやることは広く士林の譏りと嘲笑を受けるおそれがあるが、やはり誰かが言っておいた方がよいと思うので、敢えて貧乏くじをひく。

1) 外国文学・語学の研究者が、その国に行ってそこの最高教育を受けたいという願望はすなおなものであり、これをゆがめるような状態があるのは好ましくない。

2) Ph. D. をとるために論文そのものはともあれ、龐大な背景知識が要求される。そのような人間は高等教育の教員として望ましい。

3) 実用語学も信頼できる研究者ができる。これも教員として望ましい。

4) 数年間、外人の指導教授の信頼を失わぬということは、外人とコミュニケーションが深い面においても成り立ったことを証明するものである。こういう人間が日本の大学にいなければ、そうできる学生を養成しにくいのではないか。

5) 外国の学位を取ることは、その国に愛情を持たせる。ということは単なる旅行者であることをやめるのであって、帰ってきてから安手のナショナリストなどにはならない、同時に長期に渡って外国で苦労することによって、愛国心が根深く育つ。

6) こちらの大学ではわからなかったボテンシャリティーが拡大されて外国で表面に出る。日本の大学では甲乙つけ難い実力伯仲した2人の学生も、国外の大学に入ると顕著な差が出るのが常である。それは実用語学力の差がはっきり出ることもあるが、それ以上に欧米観が本物であったか、ひとりよがりのものにすぎなかつたか、異質の地理的・知的環境に対する適応能力がどうであったか、などすべて日本においては表面に出ないもろもろの因子が表面に出てくるのだ。

思いつくまま列挙してみたが、若い外国研究者が外国の Ph. D. をとることが「本質上」望ましいことは誰にもおわかりいただけると思う。このことは Ph. D. を取らなければ学者になれないという意味では全くない。それは高等文官試験をとらなければ政治家になれない、ということはないと同じことである。しかし官吏には国家公務員の上級にパスするだけの知識を持った人間の方が、そうでない人より適格であろう、とは言えるのではないか。

日本は昔、違う学制を持っていたから、学位と学力はそれほど密接な関係がない、という面もあったようだ。しかし私はここで、これから我が国の大学の英語の教員になる人をどうして作るべきか、ということを真剣に考えたいのである。20代のうちに数年、外国の大学で腹芸的関係ぬきの実力競争に身を曝らすことは、自己を島国的発想から抜けさせる貴重な体験である筈だ。40もすぎ、社会的地位も安定してから観察的な気持ちで出かけるのとはまるで違ったことなのである。

われわれが後継者を考える時に、外国留学ということを後輩にもっと強くすすめるべきなのではなかろうか。そして大学や政府なども、外国文学・語学の大学教員養成については Ph. D. 修得を条件とするプランを持つべきであろう。「外国で勉強するのはあとで損だ」という印象を若い研究者に抱かせているのは我々の罪である。これから円の強さを考えると外国に行っただけでは問題にするに足りないが、外国での勉強を Ph. D. でしめくくるのは別問題であろう。これだけ英文学・英語学専攻者がいながら、若い世代で外国における修学を Ph. D. でしめくくりたがる人がかくも少いことこそ一つの日本病ではあるまい。

(上智大学教授)

天皇・皇后両陛下のご訪欧*

SHIMA, SHIGENOBU

島 重 信

天皇陛下のご外遊についての法律的な問題は 7 年前に片づいておりました。憲法に、天皇は法律の定めるところにより、国事行為を委任することができるという規定があって、そのための法律制定を憲法は予想しているわけです。

国事行為の委任の法律がないと、天皇陛下がお留守のときに憲法にきめてある天皇の国事行為をだれがどう行なうかについてよりどころがないわけです。そこで昭和 39 年、すなわちいまから 7 年前に、国事行為代行に関する法律ができまして、この問題は解消したわけです。だからその観点から言えば昭和 39 年以後はいつでもお出かけになれたわけです。

ただ、実際問題として外国ご旅行ということになればいろいろな問題を考えなければなりません。そして、ご旅行を実現するためにはどれだけの問題を考えて、それをどういうふうに処理していくか、そこから始まったわけです。それは、一昨年の秋から暮れにかけてのことです。そして、かなり具体的に考えられ、実現性の問題、ご健康の点、それから政治的に何か困難があるかどうか、あるとすればその困難をどうやって解決したらいいかというようなことをそろそろ考えたわけです。それが昨年の春ごろです。

なにぶん初めてのことであるだけに、おいでになるとすれば、一体そのご旅行の性格はどういうものであるべきかということが問題です。それからご健康との関連、それから国内でのいろいろな行事予定の関係でどれくらいの期間おいでになれるか、それだけの期間であるとすれば、どの地域でどこどこにおいでになるかという問題ですね。それから国を選ぶ基準をどうするか。それから、今までなかったことですから、一度お出しになられてそれだけで済むか済まないか、おそらく済まないだろう。そうすると今後も海外ご旅行ということを考えなければならなくなる。それがそう考えていいかどうか。事

前に考えたことは大体そんなことだと思います。

あとは具体的に入っていくわけですが、まずご旅行をどういう性格のご旅行にするかというのが最初の問題だと思います。いまの国事代行に関する法律のできる原因になったと思われる日本国民の大多数の素朴な気持というのはこうかと思います。すなわち、陛下はご即位後最早から満州事変から始まって、支那事変、大東亜戦争と非常にご苦労になった。そして戦後困窮していた日本が経済的に復興できた。ただ単に復興しただけでなく、世界の経済大国に数えられるようなところまできたわけだから、この際、まことにご苦労さまでしたから、ひとつご慰労の意味で両陛下ともに外国でのんびりしてきていただきたいという気持だろうと思うのです。ただ、実際問題として外国旅行になるとすれば、経費もかかるでしょうし、昔と違って、いわゆるお手元金で外国旅行の経費をまかなうということはとてもできませんから、当然国の予算ということになるんですね。国の予算を使ってのご旅行ということになると、單なる漫然たる漫遊休暇旅行というわけにはまいりません。それから外国との関係においても、外国元首の正式訪日に対するご答礼で残っているところが幾つかあるわけです。結局ご旅行の性格については答礼訪問の残っているところを答礼されるということを第一義的に考えて、その観点からみて、ご訪問国なり地域なり、それから期間なりをどういうふうに考えるかということになったわけです。

ですからご旅行の性格としては、まず儀礼的見地からいって、相手方の正式訪問に対する答礼がすんでいないものをすませようということを中心にして考えたわけです。

戦後方々の国から元首が見えておりますけれども、大部分皇太子殿下が、天皇陛下のご名代として返されている。残っている国で、一番古いのが昭和 38 年のドイツ大統領、当時のリュブケ大統領の訪日、それから続いて翌年の昭和 39 年の 2 月にベルギーの皇帝・皇后両陛下、これも答礼がすんでいない。ですからまずヨーロッパの 2 国がすぐあがってくるわけです。その意味から、最初の外国ご旅行の場所はヨーロッパ地域で、ドイツ、ベル

* この記事は、ELEC の求めに応じて、島式部官長が昨年 12 月 10 日宮内庁で本誌のために行なった談話を編集したもので、特に両陛下ご訪欧の準備に焦点をしぼって掲載しました。

ギーに対する答礼訪問ということになり、答礼訪問ですから当然正式訪問になるわけです。そして正式訪問というものを軸にして計画を進めることになったわけです。

ではヨーロッパでドイツ、ベルギーは少なくとも正式な訪問になるとすれば、一体どのくらいの期間のご旅行が考えられるか。まず第1にご健康でした。第2には国内での行事予定、時期も問題になる。昨年の春から考えて、少なくとも1年はおかないといけない。考え得る一番早い時期というのはおそらくことしの秋、すなわち46年の秋ということになるのです。秋だとすると、ヨーロッパでは9月の半ばぐらいまで夏休みです。だからヨーロッパへおいでになるとすれば9月の半ばごろになるわけです。それから昭和46年には、秋の国体が和歌山で行なわれて、開会式は10月24日ときまっておりますから、それにお出ましになるとすると、お帰国になつてすぐおいでになるわけです。それには、おそらくとも10月20日までにはご帰国にならなければならぬということで、9月の半ばから10月20日までという期間が一応浮かんできたわけです。その間で一体どれくらいの期間をご旅行に当てるか、ご健康との関係、ご健康といっても別にどこがお悪いというわけではないでけれども、飛行機で北回りで行かれるとして16~7時間お乗り続ける。時差というものがある。皇后陛下は外国旅行そのものが全然お初めてです。そういう両陛下にとってどれくらいの間外国旅行を考え得るか。これは何と言ってもお医者さんの意見を聞かなければならぬから、侍医団にそういう前提で聞いたわけです。侍医さんなかなか慎重で返事をくれないので、1年先のご健康の状態なんて言わなくても見当がつかない、何とも言えないというのです。何とも言えないじゃいつまでたってもらちがあかないで、何とかめどをつけてくれと頼んだ結果、最初に侍医さんからあった回答では10日ぐらいだろうというのだったので。これは根拠はよく存じませんけれども、国内のご旅行は春の植樹祭とか、秋の国体など大体1週間内外の期間ですが、まあ1週間じゃとても外国は無理だから10日ぐらいならというんじゃないかなと思うのですがね。国内ご旅行の場合は毎日午後3時半から4時ごろにはその日のご予定が終り、宿舎にお入りになって、それからあとは何もないわけです。ですから日程から言ったら非常に楽なんです。ところが外国にご旅行になった場合に、特に正式訪問ともなれば夜の行事が一番大事な歓迎の行事になるわけです。まず正式訪問国ご滞在中は毎晩何かあると思わなければならない。外国の夜の行事というのは早くても11時ぐらい、へたすると12時過ぎるわけですから、そういう夜が幾晩か続いて、そ

れでどれくらいの期間計画が立てられるかということになるわけです。

ところがそのころ、またさきほどの話に戻りますけれども、どこの国を訪問するかという問題で、ヨーロッパへおいでになってドイツとベルギーを正式ご訪問と仮定すると、イギリスをほっとくわけにいかない。明治以来日本の皇室と一番親しいつき合いの間柄の国であり皇室であるわけですから。もっともイギリスの場合は答礼にはならないわけです。というのは向こうからは元首は一べんも見えてないですから。ただ、たまたま昭和42年の初めに、ちょうど私が大使としてロンドンにいたときですが、イギリスのいまの女王様に対して、訪日の招請の最初の打診が行なわれているのです。エジンバラ公とご一緒に日本においていただきたいと申し入れがしてあります。その返事が来てない状態だったのです。それの受諾の回答をもらえば交換訪問になりますから、答礼と同じ意味で正式訪問になる、ただ順序がこちらが先か、向こうが先かという問題だけで、当然正式訪問になるわけですから、イギリスはそれで片づけたい。それがうまく実現すればイギリス、ドイツ、ベルギーの3か国正式訪問、その間にそれ以外の国々もお立ち寄りということで、一応旅程ができるのではないかと思っていたのですが、それがいまの侍医さんの回答で10日間と言われた。3つの国を正式訪問されるとそれだけで10日になってしまいますから、全部で10日ではとても足りないわけで、もう少し何とかならないか、10日というのは実働10日間、実働というのは要するに公式行事の詰まった日が合わせて10日、その間に休養を主にした日が要るので、全体として2週間前後というのが侍医団の最後的回答だったわけです。2週間あれば何とか旅程をつくれるだろうというので、およそのめどをつけて3カ国は正式訪問、そのほかはお立寄りということになったのです。皇后陛下は初めてヨーロッパへおいでになってパリへ全然お寄りにならなかつたというのでは話になりませんから、フランスへは当然おいでになる。フランスの場合は公式訪問というわけにいきませんし、14日間のご旅行として、1週の半ばに日本をお立ちになるとすれば、間に週末が2回ありますから、そのうちの1回をパリでお過ごしになるということでパリお立ち寄りが考えられる。それからついでに、もう一つ週末をどこでおすごしになるか。ヨーロッパとしてはだれもが行くし、一番無難なのはスイスだ。スイスなら政治的にも儀礼的にも問題なしですみますから、週末休養のためにおいでになるということで十分理由がつくわけです。このようにして2つの週末をパリとスイスでお過ごしになることが決ま

った。

それ以外にどこどこお寄りになるかという点ですが、イギリスとベルギーと王国は2つおいでになる。残っている王国としてはオランダとスカンジナビア3国があるわけです。ところで、これを全部お回りになることは無理です。オランダはベルギーの隣ですし、ベルギーまでおいでになって全然お寄りにならないというのもどうか。また、お立寄りになるとして、隣のベルギーは正式訪問で、オランダの方は正式でないという場合の反応も気遣われるので、むしろちゃんと事情を説明して、お隣のベルギーは正式訪問で、おたくのほうは非公式の立ち寄りにしかならないけれども、それでもいいだろうかというようなことで打診してみたらどうだろうということになった。また、スカンジナビア3国の王室とのおつき合いもお親しいのです。特に戦後は向こうからは王様は見えておりませんけれども、皇太子が全部見えている。それ以外の皇族もよく見える。ですからおつき合いとしてかなり親しいほうですし、3国に差別をつけるのは非常にむずかしいのです。日本から北回りでヨーロッパへ行く場合、まず立ち寄るのはコペンハーゲンです。そこでデンマークにお立ち寄りになることでスカンジナビアの地にも足跡を印されたということになるのではないかということで、スカンジナビアの中ではデンマークといいうので、大体おいでになる可能性のある国というのがずらっと並んできたわけです。正式訪問される国、それから非公式ご訪問国としてお立ち寄りはオランダとデンマーク、週末のご休養はパリとスイス、それなら大体2週間くらいの日程がつくれる。それで日程のめどもついたし、ご訪問になる国のかた、それぞれご訪問の性格についてめどがついたわけです。

それから最後の、じゃあほかの国をどうするかということと、今後第2回目以降のことをどう取扱うかという問題ですね。ヨーロッパと並んで考えられるのはアジア、アメリカです。アジアはいまの日本の国際的地位から言えば当然考えなければならない。ヨーロッパだけおいでになって、これ1回きりであとおやめになるというわけにもいかない。機会があれば当然アジアの国にもおいでになるという考え方。それからアメリカ合衆国については、戦後の日米関係から言って、天皇陛下がご旅行なさるというなんだったらおいでになつてちつともおかしくないだけじゃなくて、むしろ当然だという国です。ですから今度、ヨーロッパへおいでになるとすると、アジア、アメリカというのは将来機会があったら当然考えなければならない。実際にできるかどうかは事情がありましまからわかりませんけれども、考え方としては今度

1回だけだというわけにはいかないということまでははっきり言えるでしょう。

それから、今後とも外国から元首がたくさん見える。今度はベルギーとドイツとご自分で答礼訪問されますが、今後の外国元首の正式訪日に対しては天皇陛下が全部ご自身で答礼されるかどうか。これはこっちの受けるほうはどうしたって数が多いですから、全部天皇陛下がご自分で答礼されるということは物理的にもできないでしょう。したがって答礼訪問に関する限り、今度はベルギー、ドイツは天皇陛下がなさる。将来は場合によっては天皇陛下、場合によっては皇太子殿下がご名代として答礼されるというやり方にならざるを得ないだろうということになるわけですね。

いままで申しあげた幾つかの点を一応まとめまして、両陛下の外国ご旅行に対する考え方を書きものにしたのは昨年8月の下旬です。それまでに万博がありまして、万博のときについぶん外国から元首、皇族の賓客がたくさん見えました。宮中で両陛下が直接食事でおもてなしになったのは20回、それから元首、皇族以外に、いわゆる総理級の来日者で、ご引見になって30分程度お会いになったのはやはり20回、ですから40回ほど万博関係のご接待があったわけです。万博の期間は6ヵ月ぐらいですけれども、実際には特に初めのころ、3月下旬から4月、5月にかけては、多いときは1週間に4回もお食事がありました。外国へおいでになったときは、こっちのほうがお客様ですけれども、要するに正式の、どちらかといえば肩の張るお食事を外国人と一緒になされるという機会が毎日続くというのはいままでは例がない。ですから、万博は一つの舞台げいこといえます。そう言っては失礼ですけれども、連日そういう行事をおつとめになったことはいいテストになったわけです。初めは、4回も続けて外国からの賓客のご接待をなさってだいじょうぶかなという気もしていたわけです。これは私だけじゃなくて、各関係の人たちもあまり自信はなかったのです。よほどお疲れになるのではないかと心配していたのですけれども、実際には1週間に4回というのが1回、それから1週間に3回というのは2、3回ありました。別にそのためのお疲れというのは見えませんでしたしね。

ですから外国旅行のことを考えてみると、この調子なら大抵だいじょうぶだなという感じを持ったのです。ただ、夜の連続というものがなかったのです。多少その点不安があったのです。そういう懸念も出たのですが、8月の下旬にいろいろな問題についての大体の考え方をまとめまして、ずっとそこへくるまでにもちろん内閣と

も連絡をとりながら考えを進めてきたわけです。それで一応関係方面的了解を得まして、それから両陛下9月の初めに那須からお帰りになる直前に那須でご説明いたしました、両陛下のお許しを得まして、そこでいよいよ手をつけたことになったわけです。ですからほんとうに手をつけたのは9月の初めから、12月の初めぐらいの3ヶ月ちょっと。その間にこちらの考え方とかご訪問国、お立ち寄り先である各国の都合を聞いて、この結果ご旅程の骨組ができた。ご旅行は今年9月27日から10月14日までというのが去年の12月中にはきまっておりました。それで旅程の順序も、北回りの飛行機でアンカレッジで給油のためのお立ち寄り、ヨーロッパではデンマークが最初で、それからベルギーの正式訪問、それから最初の週末をパリ、第2週の初めを英国、英国は初め4日のつもりだったのですが、その週の月曜からおいでになれば週末までの間に1~2日あきますから、オランダへお回りいただいて、2度目の週末をスイスでお過ごしになる。そして第3週目をドイツ、それで7カ国ご訪問という旅程の骨組ができたわけです。

あとはことしに入ってからその肉付けと、それから発表の打合わせをまず最初にやったわけです。こっちは閣議決定しなければならない。閣議決定すればその日に発表しなければならない。発表するときはおまかなの日程は同時に発表するのが今まで皇太子殿下の外国ご旅行の場合の例となっておりました。ところがそれを7カ国全部と打合わせしなければならないのです。これがなかなかたいへんなんです。1国ごとにわたりをつけて、こっちはこういった内容で何日に発表したいが、それでいいかということをまとめなければならないから、発表の打合わせというものが約2カ月ほどかかりました。初めは3月6日が皇后陛下のお誕生日で、3月5日の金曜日に閣議決定して、翌日の皇后陛下のお誕生にお祝いにあがるものが外国旅行のことを申し上げることができればちょうどいいんじゃないかというので3月5日ということで内閣とも打合わせをして、大体そのつもりだったのです。ところが1月の半ばごろにドイツの週刊誌に漏れまして、ことしの秋、日本の天皇がボンに来られるというが出た。それは、去年万博のときにドイツのハイネマン大統領が来たのに対する答礼として天皇陛下が来られるというものだった。ドイツの大統領府でそれを否定したわけですが、その否定するときに、ハイネマン大統領訪日の答礼というところをつかまえて、そういう書き方をしたのは根拠がないという否定のしかたをしたわけです。完全に否定をするわけにいかないものですから、週刊誌の間違ったことをつかまえて、こういうこと

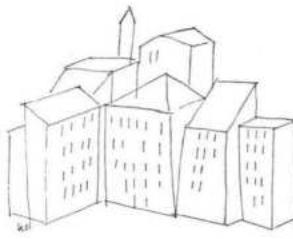
は根拠がないという形で否定しています。ところが日本の新聞社がそれを見て、ことに宮内庁詰めの記者クラブは寝耳に水だったものですから、ワッと騒ぎ出した。ところがいままで予想もしていなかったものですから、記者連中も予備知識もないし、勉強していないものですから聞かれててもこっちはうまくはずすにそう大した苦労なくはずして、結局発表まではほとんど漏れなかった。ところが、1月の半ばに漏れたものですから、3月5日まではとてももうそうもないというわけで、あわてて、じゃあどれだけ早くできるか、できるだけ早く発表したほうがいいからというので、早い時期に発表することにしたわけです。

ところが先ほど申し上げたように、変えるにしても7カ国と相談しなければならないものですから、どう考えても2月の下旬より早くはできない。それで2月23日という日を選びまして、2月23日にまた各國と改めて相談して、それで閣議決定で発表になったのが2月23日です。

ですから最初ほんやり考え出してから発表までの間に1年ちょっとかかっております。発表になってから9月27日までに7カ月。その間に今度は骨組だけ大体きまっているご旅程の肉付けをやらなくちゃいかん。1日の行事の種類、行事の内容、これをだんだん各國とかためていきました。各國ともほかからもお客様がありますし、それから自分のところの元首が外へ行かれる予定もあるわけですから、春から両陛下のおいでになることだけにかかりきるわけにいかないものですから、なかなか具体的には詰めるところまでいかなかつた。こっちは半年あれば日程づくりは何とかなるだろうということなんですけれども、実際には、まあ各國ともよくやってくれたと思うのですが、8月に入つてからほんとうに両方も真剣になってかかりました。ですから最後の仕上げが1カ月ちょっとで、この間はほんとうに忙しかつた。私自身また外務省に戻つて、連日7カ国にある日本の大統領からくる電報に対する返事を考えなければならない。8月の半ばごろからほとんど外務省に日参しまして、毎日5時から6時半ごろまで外務省で暮らしていました。それで9月初めまでには大体行事内容まで打合わせすることができました。

実際ご旅行になって、ご旅行期間中一番幸いだったのは、両陛下が非常に元気で、かなりたてこんでいる日程を完全にこなしていただいたことです。それもお疲れになっているのを無理しておつとめになったという気配は全然ございませんでした。むしろ両陛下ともご自分か

(p.53 へつづく)



私 の 英 語 歴

MATSUMOTO, TORU

松 本 亨

私が英語を習い始めたのは、群馬県の高崎の中学で、当時の King's English を教科書にした英語を日本人の先生から習ったんで、別に変わったことはないんです。ただ、その先生は発音に忠実な方で発音をやかましく教えて下すったことはいまでもありがたかったと思ってます。しかし、その先生はよかったです、いまから考えればよくなかった先生もいたわけです。発音とか読み方などは全く日本人には関係ないことだ、ただ英語というのは日本語に訳せばいい、日本語の意味がわからなければいいんだからという建前で、訳すことだけを主眼にして教えてくれた先生もいたし、文法だけに凝った先生もいたし、いろいろです。

ですから中学時代、いなかの中学で私の教わった英語というのは、いまとあまり違っていないんじゃないですか。ただ、だいぶ時間的なずれがありますから、いまほど音とか何とかということに敏感ではなかったけれども、根本的な考えは全然違ってないんじゃないですか。

そして、中学3年のとき東京の明治学院に転校してきました。そこにアメリカ人の先生が1人いて英語会話というのがありましたけれども、1週間に一ペんの英語会話だし、人数のたくさんいる教室で英語会話といつても、あまり大した授業にはならないし、その英語会話も3年のときに終わってしまった。だから中学のときに英語会話をやったというわけにはいきません。

本格的に英語らしい英語を教えてもらったのは明治学院の高等学部の英文科に入ってからです。高等学部の英文科には、アメリカ人の先生が3人もいたし、専門が英語ですからずいぶん力も入ったし、そこで私の英語の基礎ができたと思います。

この明治学院の英文科にいたときにどんな英語の勉強をしたかというと、学校の授業で外人の先生は確かに英語で教えてくれたけれども、日本人の先生の授業はいまの普通の英文科の授業とちっとも変わりないわけです。英語の原文を日本語に訳すのが英語の授業だった。私自身は、もちろんそれもやったけれども、それでは外国人との話には役に立たない。それで私は、いまどこの学校

にもあるような学生の ESS というものにも入っていたし、英語というのはやはり話すことが大事だ、話すためにあるのだということを非常に感じていたので、一生懸命話す練習をしました。けれども、どうも ESS で話す英語とか、私たちに外人が話しかけてくれる英語というのは外人同士が話している英語とちょっと違うんです。で、私はある日私の1人の先生が校庭のすみで自分の奥さんと立ち話しているのを遠くで見た。あの英語がわからなければ自分はほんとうの英語がわかったんではないと思ってその先生のところへ飛んでって聞いてみたけれども、実際何を言っているかわからない。これがわからなくてはほんとうの英語はわからないということに気がついたので、いろいろそこで考えたわけです。まずどうしてだろうか。どうしてこの人たちのしゃべることがわからないのだろうかということを自分なりに考えてみた。すると、学校の教室での英語会話というのはみんな型にはまっている。いわゆるいまのことばでいえば pattern practice ばかりで、What's today? といえば、This is Tuesday. というような型にはまっているものか、あるいは英語でいわれたことは、その意味を日本語で考え、そして答えを日本語で考えて、その考えたものを英語で言い直すのが授業で、こういう一つの作業をいつでも繰り返しているわけです。これが一番の支障になったのだ。だから自然に英語が口から出てくるようにしなければいけない。そう自分で思ったわけです。

そこで、自分のやったことはまず基本的な英語を全部頭の中に入れてしまう。その基本的な英語はどこに書いてあるかといったら、それは中学の教科書に書いてある。だから1年間かかるて中学の教科書をずっと暗記していくのです。通学の時間を利用して初めからずっと暗記していく。Lesson 1 を暗記したら lesson 2 を暗記するわけだけれども、lesson 2 を暗記するときには lesson 1 と lesson 2 を暗記する。Lesson 3 を暗記するときには lesson 1 と 2 と 3 を暗記する。4 を暗記するときには 1, 2, 3, 4 と最初の方を忘れないように 1, 2, 3, 4 と積み重ねていくわけです。そうしないと 4 を

暗記しても1を忘れてしまう。だから必ず1から全部やり直してみるようなやり方でReaderの1とReaderの2を大体1年かかって、どこからでも言えるように暗記しました。

それがすんだ時点での度は自分と会話をすることをやった。日常自分でやっていること、考えていること、すべて自分を相手に会話するわけです。朝がくると“What time is it?” “It's seven o'clock.” というところから始めるわけです。“Let's sit down.” “Let's eat.” ということから、全部自分のすることを、あたかもだれかそばにいるような感じで英語で言っていくわけです。これはそこにだれがいようとかまわない。妹がいようと、母親がいようと、そんなことはかまわない。英語で自分でやっていくわけです。それから道を歩きながらも、人を見てその人の話をする。だれかが何か言ったら、それを自分に通訳して聞かせる。これは、非常に大事なことです。あらゆる情報 (information) と知識 (knowledge) というものが日本語で頭に入ってしまうと、いざというときにその情報は、日本語で復元されるわけです。それを英語に直さなくてはならない、翻訳しなくてはならない。その手間を省くために全ての情報、全ての知識は自分の頭に入るときに英語に直しておく。だから人の話を聞くときには自分が自分に通訳して聞く。学校の講義でも何でも全部英語でノートをとるわけです。英文科でも一般教養の科目があるので、生物学、漢文、歴史、国語、心理学、哲学、全部ある。これを全部英語でノートをとり、英語で理解していくわけです。日曜日教会へ行けば説教がある。説教も英語でノートをとる。

こういうふうにして頭の中に入ってくるあらゆる知識を自分で英語に直しておく。そうするといざ英語で自問自答するときに、あるいはESSで話をするとき、友だちと英語で話をするとき、先生と英語で話をするときに話題がどんなものであっても英語に直ってるからすぐ使えるというわけです。

それから私は英語でしゃべる友だちをつくりました。それは学校内にも1人いて、その友だちと会えば必ず英語でしゃべる。学外にも1人女の子で英語をしゃべる友だちをつくって、デートするときにはいつもその子と英語でデートしている。そうするとバスや電車の中で人が変な顔をする。お巡りさんには怪しまれる。いろんなことがあったけれども一向かまわない。必ず英語でしゃべった。だからその子と日本語でしゃべったことがない。とにかく英語だけずっとその人とはデートしたわけです。男の英語の友だちともずっと英語でしゃべっていた。そんなふうにして英語でしゃべることばかり考えて



いた。

それからアメリカやイギリスの映画をよく見に行った。これは字幕に日本語が出るので、2回から3回同じ映画を見るわけです。初めはしょうがないから字幕を見るけれども、2回目、3回目くらいは目をつぶって声だけ聞いています。だから一度の料金で3度くらい見ちゃうわけです。そういうふうにして音によるstoryを楽しむわけです。そんなふうにして音に非常に興味を持つようになった。英語というものは音に意味がある。同じ単語でも言い方によって意味が変わってくる。相手の気持ちは音に現われてくるということがわかるようになってきた。

それから私は非常に英語演説をよくやった。毎日英語演説の練習をしました。校庭の大きなプラット・ホームに立って放課後演説をしたり、チャペルのこうだいに立って演説したり、とにかく1日に30分～1時間にわたって英語で演説した。それからうちが代々木練兵場の近くだったので代々木練兵場に行っては、木がたくさんはえてたから、木に向かって大きな声で演説をした。英語演説ということはもちろん非常にしゃべる練習になる。しゃべるということは度胸をつけることになる。日本人が外国語をしゃべる場合に非常に度胸を要する。この度胸を養う上に非常に必要だと私は思います。

これだけの準備をしてアメリカへ行きました。22のときニューヨークへ行ってユニオン神学校に入ったのですが、これだけの準備では向こうの大学の勉強にはとても追いついていかないのです。何が一番まずかったかというと、まだ読書力が足りない。ちょっと言い忘れましたけれども、日本にいるときに大体1日に1冊本を読

む規則にしてましたが、やさしい本を読み過ぎたような気がする。やさしい小説とか少年向けのものをずいぶん読みました。けれども、向こうの大学あるいは大学以上の学校になると、そんななまやさしいものを1日1冊読んでたんじゃ間に合わない。それから読むだけではだめ。内容をすっかりそしゃくして、それに関する2ページか3ページくらいのリポートをタイプして提出する能力が、なくてはだめ。しかもそれは1科目について、1週間に500ページくらいあって、それが5科目から6科目あるわけですから、1週間に2,500ページから3,000ページの非常に程度の高いものを読みこなさなくてはならない。そういうものを日本の高等専門学校程度の英語の力で最高のレベルをいっても、まだ5年ぐらいのギャップがあったでしょう。一番悪いことは、日本人は英語の意味を日本語に直さなければわかったと思わない。私もごたぶんに漏れず、むずかしいことばが出てくると、研究社の大英和辞典を持っていったものだから、一々ひっくり返して調べていた。そうすると、1時間に早く5ページか6ページしか読めない。計算してみればすぐわかるのですが、600ページということは100時間、徹夜したって読めません。それで私はノイローゼになりかかった。それでいろいろ友だちに相談したり、自分で考えたりして、英語というものは日本語に直して理解すべきものじゃない。英語を英語のままで理解すればいい。それができるんだ。今までの自分の英語の勉強というのは、ただ英語を使っていただけで、英語で考えてなかった。英語を使っていることは使っていたが、いろいろ考える、創作力がなかった。これからは何でも英語は英語で理解し、英語で考えていく力をつけなければ日本人はとても国際的な水準には到達できない。そう思って、本を読むんでも何でも英和辞典は使わないことにした。多少わからなくてもどんどん飛ばして読んでいってしまって、内容だけをつかんで、そして初めから英語で考えながらリポートを書く。英語で考えながらディスカッションをする。スピーチもする。こういうトレーニングをしました。それでようやくいまのようなことができるようになりました。そこまでやらないとだめでしょうね。

それから発音の問題ですが、[r]と[ɪ]ですね。これはアメリカへ着いてから5年ぐらいは直されました。この音を日本の学校で正しく教えられる先生はほとんどいないんじゃないですか。ローマ字のra ri ru re roが混同して、日本人は[r]も[ɪ]も両方言えるけれども、区別して使っていない。ですから、私自身正しいと思って発音しても相手には通じなかった。いまでも、[r]の

ときと[ɪ]のときは多少意識して、改めて正しい発音をしようとしています。全く無意識に区別して発音していない。日本人にとってむずかしい音の区別はこの外に母音でも子音でもたくさんあるわけですが、私にとっては[r]と[ɪ]の区別が一番大きな苦労でした。

いま勉強している若い人たちにひとこと申し上げたいことは、現在はいろんなテープが、テレビが、そして、いろんな学校ができる、環境がよすぎるんですよ。環境に恵まれすぎて、英語の勉強が安易になった。そういうものを利用すれば自然にうまくなるだろうという気持ちがある。頼りすぎている。自分の努力が足りない。努力なしに語学は絶対進歩するものではない。これが一つ。

もう一つは、英語と日本語はもう本質的に2つの違ったことばなんだから、関係づけようと思っても無理だ。英語を日本語で理解しようというような考え方は早く捨てなくてはならない。発音においてもそう。英語の中には日本語の発音と同じものはない。だから英語は英語として覚えなくてはいけない。英語をやっているときは日本語を考えちゃだめだ。初めは苦しいだろうけれども、どうしても日本人は英語でものを考える訓練をしなくちゃいざというときには役に立ちません。これは楽ではないがやらなきゃだめです。

たとえば、私は英語が好きだ。I like English. これは一つの文章になっている。ところが必ずしも I という主語でなくたっていいわけです。English is my favorite language. でもいいわけだ。どんなことばから始まっても同じことは言えるわけだ。しかしそういう練習はどこでもしていない。Paraphrasing はやっているけれども、どんなことばからでも言いたいことが言えるように英語で考えなくてはいけない。それをやらなくちゃいけない。「きょう雨が降っている」といえば、だれでも、"It's raining today."と言いますね。ところが "what" で言ってごらんというと、"what?" "what..." もうつかえちゃいます。"What a nasty day it is."と言えないでしょう。私はもうどんなことばがふっと浮かんでも同じことが言えますけれども、それが what に次ぐことばが何かということは英語で考えればできるわけです。けれども、きょうは雨が降っているということを日本人は It's raining today. と覚えちゃうから融通がきかない。It's raining today. ということを英語会話の学校ではみんな教えるわけだ。が、雨が降っている。必ずしも raining じゃない。drizzle のこともあるし、いろんな降り方がある。それはそのときによってことばが違うわけです。それは英語で始終考えていいなければそれはできないことです。

私はよく大学生に、「君たち英語で考えろ」と言うんです。すると沖縄問題だとか通貨問題だとか考え出します。The Nixon shock is very shocking. なんて言いますけれども、そんなことを考えろと言ってるんじゃない。朝起きたときから夜寝るまでのことを言ってごらん。やさしいことばから積み上げなくちゃだめだ。いきなりこんな高度のことを英語で考えろといっても、なかなか考えられるものじゃない。もっと下の方から積み上げて、歩く、走る、寝る、食う、飲む、横になる、たばこを吸う、そういう動詞を何百と覚えなさい。それを自分で体験して覚えなさい。そうすることによって自然と自分のやっていることを全部英語で感じられるようになさい。そうすればいやでも応でも英語で考えなきゃ考えられなくなる。君は英語をやるんなら そうしなさい。日本人の頭で英語で考えるなんて物理的とか生理的に不可能だと思うかもしれないが、そんなことはない。日本人だって洋食食うじやないか。洋服着てるじやないか。全然生理的な関係はない。二世や三世だってみんな英語で考えてる。国民性ということはない。

私の場合はどうかというと、テキストなど書いているときに、私は初めのことばを一つ考えれば、あとが続いてきます。ほかの人がやるように、まず意味を考えて、これは英語でどう言うかというふうに書かないのです。Henry Adams said that he was having lunch when George Brown came and said "Hello" to him, こういうふうに書く。あと何が出てくるかわからないんです。考えてない場合がある。順々に考えていく。つまりひとつのことばがつぎのことばを呼び、それがまたつぎのことばを呼び、次から次のことばを呼んでくるわけです。

ぼくはこれが英語のプロだと思う。英語をやるんならそれくらいの責任があると思うんです。いつまでも英語を日本語に訳し、日本語を英語に訳してるとんなら、それは translator です。英語を使っているんじゃない。

NHK のラジオ講座も 21 年になりますが、この間同じことは言っていないと思います。それから私の会話のテキストはほとんど全部自分の経験に基づいたことを書いた。だから実際のことを取り扱っているから役に立つはずだということはいえるでしょう。ついぶん世界中取材旅行もしてきましたけれども、これはみんな自費でやってきたんで、聴取者にはついぶんサービスしたつもりです。

それから、アメリカ英語とかイギリス英語とかという区別をいう人がいますが、私は一向気にしていません。イギリスに行って私の英語はほめられたし、アメリカで

ももちろん何も問題ありませんでした。要するに、アメリカ人とイギリス人の間で教養があれば、英語が近くなってくると思います。教養がなければ離れてくる。だからそう皆さん気になさるほど気にしなくてもいい。自分の一番信頼する先生の英語に従えばいいので、どっちでもいいんじゃないですか。（速記：林 節子）

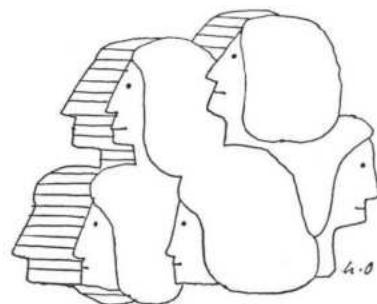
（松本亨高等英語専門学校学長）

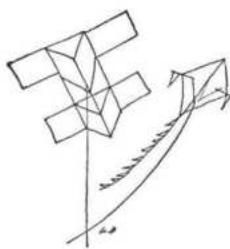
(p.7 よりつづき)

英文法に従って書いた文（？）と英語の単語を日本文法に従って書いた文を見せた場合、前者からは何の意味もひきだせないので後者からは、多少の誤解は免れないにしても、かなりの意味を読みとるであろう。

日本語と英語の語彙の違いは莫大であってこれが英語学習の最大の障害であると私は信じる。イギリス人がフランス語を学ぶ場合などと異って、発音、文法と会話のレッスン程度で、あとはどんどん進歩するというような具合に行かないのは、日本人が日常のあいさつから、専門的な論文まで、すべての人間活動の分野についてのすべての語彙を一つ一つ学んで行かなければならないということに最大の原因があるのでなかろうか。そしてこの困難の大きさが充分に認識されるならば日本の英語教育の進むべき方向について一つの示唆が得られるのではないか。

（東京大学助教授）





転期に立つアメリカ文明

KUNIHIRO, MASAO
國 弘 正 雄

トインピー博士が『危機に立つ文明』といつていへん有名な書物を書いておられます。私はこれをもじって危機に立つアメリカということをまず最初に申し上げたいわけです。結論から申し上げれば、アメリカは建国以来大体 200 年経過したわけですが、その 200 年足らずの歴史の中でアメリカが今日ほど国歩艱難のときを迎えたことはいまだかつてなかつたであろうということです。唯一の例外として考えられるのは南北戦争が勃発する以前、ないしは南北戦争が非常に長く戦かわれまして、そのあとでアメリカ国内が非常に荒廃した時代がありますが、その南北戦争前後の荒廃したアメリカを除いては、今日ほどアメリカがその歴史の中で大きな困難を迎えた時代はいまだかつてなかつたということをまず結論として申し上げたいわけです。

経済的な困難

アメリカのかかえている困難をいう際に、まず、これは順序は必ずしも重要性の度合に基づいて申し上げているわけではありませんが、一番計量化できるという意味で経済的な問題からお話を進めたいと思います。経済といつてもいろいろな側面がありますからそのすべてについてお話し申し上げることはできません。せいぜい 2 つなり 3 つにとどまります。

まず最初に、たとえば失業率 (the rate of unemployment) を考えてみます。今日のアメリカの失業率は 6.2% 強です。6.2% の失業率というのは非常に高い失業率でして、日本のように何だかんだいっても完全雇用 (full employment) に近い状態をどうやら維持してきた国と比べるとたいへんなことです。6.2% という失業率自体は全国平均であります。その意味においてはきわめて misleading な数字であります。申しますのは地域によって、あるいはある人口の部分 (segment) には 6.2% という全国平均をはるかに上回る高い失業をかかえている地域ないしは集団もあるからです。たとえば 16 歳から 24, 5 歳までの黒人の間の失業率は 40% に近いといつていへん高い状況にあります。このようなことが単に経

済的な困窮をもたらすだけではなくて、人間的な荒廃であるとか、人間的な苦難であるとか、ひいてはそれが非常に大きな社会問題として登場してくることは容易にご想像いただけると思います。

しかも現在のアメリカは、一方において非常に失業率が高いにもかかわらず、他方においては非常に高度の物価の騰貴 (inflation) が進行しております。インフレ率、これは消費者物価の上昇率といいまして、英語では consumer price の上昇率、ないしは cost of living index などと申しますが、これが年間 6%。これまた非常に高い数字であります。片方において失業が非常に大きい、つまり不景気である、景気が後退しているかたわら、他方においては物価はどんどん騰貴しているというきわめて珍しい条件が今日のアメリカをおそっている。普通、物価が上がりればインフレですから好景気である。あるいは失業率が高ければ景気後退ですから物価はあまり高くならないというのが古典的な経済のあり方でしょうが、今日はどうしたことか不景気の中のインフレという状況がアメリカをおそっている。これを新しいことばでは stagflation といっております。この stag というのは stagnant (停滞した)、つまり景気が停滞をしている。それから flation というのは inflation。この stagnant の中における inflation という意味で stagflation という新しいことばがつくられておりますが、その stagflation をいまのアメリカはかかえているわけです。したがって、失業というものがある。それから物価の騰貴というものがある。これだけでアメリカの経済がいかにたいへんであるかということが容易におわかりいただけると思いますし、またもう少し詳しいことを申しますと、アメリカの国際収支 (international balance of payments) が非常に大きな赤字になっている。

社会的な困難

こういう経済的な指標 (economic indices) がはっきりとあらわすようなアメリカの困難、これ以外に経済的な困難が原因ではありますが、はっきりと数字にあらわ

すことのできにくいような、たいへんな困難をアメリカはかかえているわけです。つまり経済的な困難に対して社会的な困難。あるいは社会的な混乱というふうにいってもよからうかと思います。この社会的な困難を説明するための幾つかの例を申し上げようと思います。

たとえば犯罪、これは数字でかなりはっきりあらわすことができますが、アメリカの今日の犯罪の上昇ぶりはまさにそらおそろしいほどです。最近私、変わりつつあるアメリカを見ようと思いまして3週間ほど旅行して約4週間前に帰ってきたところですが、とにかく大都会においては、少なくとも夜8時以降は物騒であり夜歩きはできない。少なくとも1人で変なところをウロチョロ歩いていると、次の日にはおそらく私の遺体がどっかの川に浮かんでいるということになりかねないという状況です。

それだけではちょっと納得がいかないでしょから具体的な例を幾つか申しますと、私はワシントンに昔かなり長年住んでおりまして、いってみれば勝手知ったる他人の家みたいなものです。ですから少しそぞろ歩きをやってみたかったのです。ところがアメリカの国務省の役人が出てまいりまして、「夜8時以降は外出しないで下さい、少なくとも1人で歩くことはしないで下さい。」開口一番そういうことをいうわけです。いやらしい質問ですけれども「なぜだ」と聞きますと、「物騒だからだ」といいます。「それでは自分で車を運転して歩き回る、それならいいだろ。」「それはけっこうだ。ただ1つ条件がある。それは必ずドアをロックしておくこと、それから窓ガラスは上げておいてくれ、そういうことであればよろしい。」「なぜだ」とまた聞きました。そうすると、窓を開けている、あるいはドアをロックしないで自動車を運転している、交差点にさしかかる、信号でストップしたとします。そうすると、わき合いからだれかがピストルを持って車の中に乗り込んで金品を奪うとか、何か事件が起きるからだということをいわれた。

私は長くアメリカに住んでいまして、アメリカの社会が多人種多民族の社会である、あるいは多言語の社会であるということから、単一言語の、単一民族の日本よりもはるかに社会的な緊張が大きい、日本のほうが何だかんだいっても社会的な緊張は低い。考えてみれば不思議だと思うのです。たとえばアメリカは日本の人口の2倍です。ところが面積は25倍ある。そうすると日本のほうがアメリカよりも人口の密度が12.5倍も高いわけです。しかも日本は山国でありまして、大体アメリカの25分の1の面積のそのまた20%ぐらいのところに1億人がいるわけです。したがって人口の稠密度ということか

らすると、アメリカなんかから比べるとるかに高いわけですから、社会的な緊張が大きてもおかしくないのですけれども、幸いなことに何といつてもわれわれは monolingual な、monoracial な、つまり単一民族の單一人種の単一言語の非常にまとまりのいい、数学のことばでいうと素数だ。因数分解のできない素数族ということをいうわけですけれども、そういう、まとまりのよさ、向こう三軒両隣、どこへいっても同じような顔して、同じようなものを食い、同じような生活の感情を持ち、意識を持った、そういう人間が1億まとまって住んでいるということから何といつても社会的な緊張は低い。

アメリカでは人口2億強ありますが、その2億の人口が非常に多種多様な、つまり diversity というか、多様性を持った複合民族、複合人種、複合言語国家です。アメリカは決して英語1つだけの monolingual の国ではありません。英語を話していない地域もアメリカにはあります。そういうアメリカですから、たとえばワシントンにおいても社会的な緊張が高いのだということは知っていたのですが、それにしても外国から来たお客様に対して、その国を代表する国務省の役人、日本でいうと外務省ですね、その役人がまず最初にいうことが、夜8時以降になったら物騒だから歩かないで下さいという。私がもしその立場ならずいぶん悲しいと思うだろうなと思ったことです。

それだけでははっきりしませんから、私ワシントンの役所へ参りまして統計をもらいました。ワシントン特別区というのですが、その人口は80万です。その80万の人口のワシントンで1週間にどのくらいの割合で凶悪犯罪が起こるか。たとえば殺人、強盗、婦女暴行。1週間平均12件弱の割合で起きている。これは東京都と人口で比較すると、東京都の人口は1,200万です。1,200万の東京都がワシントンと同じ犯罪率を誇ろうと思えば（笑い）大体週平均160～170件の凶悪犯罪が毎週毎週起きなければならない。かりに東京都が160～170件もの凶悪犯罪が1週間平均続いて起こることになったらこれはまさに社会不安なんていうものじゃない。これはわれわれにとってはとても信ずることのできない、神も仏もあるものかというような感じになるような事態です。それがワシントンに現に起きております。いうまでもなくワシントンはただ単にアメリカ政府の所在地であるのみならず、大統領ニクソンのおひざ元であるのみならず、世界政治のまさに一大中心地、そこがまさにこの数字。その他に似たようなことがたくさんあります。

たとえば、ニューヨークに行きました、タクシーに乗

ります。昔はそんなことはなかったのですけれども、タクシーの運転手さんとお客様との間に完全にしきりがしてある。話に聞くと防弾ガラスだという。それもびっくりするのですが、もう一つさらにびっくりするのは、料金を渡す際に、運転者と客との間で直接金銭の授受が行なわれないようになっている。具体的にどういうことかというと、運転者と客の間にシートグラスがある、その下のところにお皿がついていて、それを向うに押して金を払い、つり銭があるときはその皿に入れて、運転者がこっち側に押す。まあこういうわけなのです。これは明らかに犯罪予防のためです。なぜこんなことになったかというと、タクシーの運転手をおそってどうこうするというような凶悪事件が頻発した、それが一つの原因になった。

そういうような状況が少なくとも今日のアメリカの大都会にはある。地方にまいりますとそれほど険悪だとは思いませんがサンフランシスコであれ、ニューヨークであれ、ワシントンであれ、シカゴは若干状況がいいのですが、とにかく大都会と呼ばれるところはこういう状況であります。

今度はもう少し人間的なお話をしますと、離婚ということがあります。私は、お断りしておきますけれども修身の先生ではありません。修身科の復活には大反対です。あまりにも意図が露骨にみえすぎていると思うからです。私は道学者でもありません。きわめて人間的な人間のつもりです。したがって、私は離婚が道義的にみていいとか悪いとかということを申し上げるつもりはさらにはない。しかし、これまた統計数字になりますけれども、アメリカの離婚率はいまや大変なものです。教会へ行くと、牧師さんが、「死が2人を引き離すまで」なんていうことをいって2人をくっつけるわけですけれども、死が2人を引き離すより以前に他のいろいろな要因が2人を引き離してしまう。(笑い) 経済的な要因、性格の不一致などの結果、離婚に終わってしまうのが3分の1弱、つまり、3つの結婚の中の1つまでが、借老同穴に至らずに引き離されるという社会は、どっか間違っている。何かが正常さを欠いているといいい方をしてもいい過ぎではない。ただし、この数字もきわめて misleadingな数字であります。なんとなれば、この数字はさっき申し上げた6.2%という失業率が全国平均であったと同様に、これまた全国的な平均だからであります。

カリフォルニア州を例にとります。大体日本の面積と同じ、アメリカで最も豊かな、最も教育の進んだ州だというイメージがありますが、日本でいうと長野県ですね。そういうカリフォルニア州という最も社会的に進

んで、そして教育にも熱心で、所得のレベルも高い、そういう州における、しかも一般の人たちでなくて、いわゆる専門職、英語では the professions と申します。Lawyers, doctors, managers, teachers, engineers, business executives, いわゆる専門職ですね。つまり普通よりは高度の教育を受け自分の専門的な知識なり技能を生かして生活をしている人たち、所得レベルも一般よりは高い、ただし先生の場合は必ずしも所得レベルは高くない。年間のアメリカの先生方の平均所得は8,500ドルくらいです。ところが plumber(鉛管工)とか electrician(電気工)などは熟練工になると年間1万7,800ドルになる。これは組合が非常に強力であるということもあって、彼らの所得は、大体先生方の2倍を上回っている。まれまた何かが間違っていると私は思はざるを得ないのですが、しかし There is no money in teaching. と申しますからそれは別として、とにかく専門職です。そのカリフォルニア州の専門職の中における離婚率が、いまや全国平均の3分の1を上回って3分の2である。つまり3件の結婚のうちの2件までが破綻の憂き目を見る。時間はいろいろあります。1年で別れるやつもいるし、10年ももつものもありましょうが、とにかくそういうような数字、これはわれわれの想像を絶する高さであるといって間違いない。こういうことを考えますと、離婚率の高さというようなものは、ひとまずある社会が少なくとも安定をしているか不安定なものであるかということをはかる一つの尺度にはなると思います。だからどうだと私はこのことだけですぐ結論を出したくありませんけれども、何かを指し示すものであろうといつても決して過言ではありません。

それからもう一つ、もっと人間的なお話をさせていただきます。日本でも最近たいへん大きな問題になっております例のボルノです。北欧諸国なんかで、いわゆる pornography の解放というか、性の解放というものです。かつて売春禁止法が日本で問題になったときに菅原通済という人が学識経験者という名で委員の1人に任命されて彼みずから苦笑しておったのですが、私はしろうと、つまり非学識経験者として申し上げるわけですが、北欧あたりのいわゆる性の解放をみておりますと、性は生なりといいますか、つまり sex というものは生命そのものなんだ、生命の根源なんだという、何か生命への礼賛といいますか、生命の根源としての sex に対して頭を下げるといいますか、sex を暗がりから太陽がさんさんと照るところに出てこようではないかというような意味での性の解放、そういうものがあるような気がするわけです。イギリス文学で、たとえば例のチャタレイ夫人を書

いたローレンスあたりの性の取り扱い方というのも、何か生命の宗教とでも申しますか、何かそういうものとして性を定着させようとしているような気がします。私はそれに非常に大きな人間解放の一つの意味をみるわけです。くさいものにはふたというような陰湿なものを私はあまり支持しません。

ところが今度アメリカに参りました気がつきましたことは、とにかくボルノのはんらんであります。大統領が住まっているホワイトハウスから歩いて 2, 3 分のところにかなりの数のおとな向けの本屋がある。英語では adult books. これからボルノといわないで adult books と申します(笑い)。この adult books という看板を掲げた本屋がずっとあるわけです。その中に私社会見学のために入った。実はワシントンにおいてのみならず、ニューヨークにおいても、シカゴにおいても、ホノルルにおいても、サンフランシスコにおいても同様の見学をしてきましたが、ありとあらゆる種類の books and films and magazines and pictures and peep shows がある。しかし、そこには何らの芸術性はなく、何らの生命への雄たけびもなかった。あるものはきわめて稚拙で、稚拙でも日本の民芸品なんかにはある種の芸術性を感じさせてくれるようなものもありますが、きわめて vulgar で、そして objectionable とでも、あるいは obnoxious とでもいわざるを得ないような感じのものがところ狭しと置いてある。しかも minor お断りなどと一応札はかかっているわけですけれども、けっこうまだ 18 歳になるやならずと思われる若い人たちがそこへ出入りをしているという状況です。さっきも申しましたように、私はそういうものが決して悪いとかいいとかいう道義的な意味で申し上げているわけではありませんけれども、しかしああいうものがあそこまで open に、しかもあそこまで稚拙かつわい雑な形で公開をされている社会というの、やはりどっかおかしいのではないか。何か私はそこに非常に病的なものを感じたのであります。

何か漫談めいて申しわけないですけれども、とにかく最初に申し上げたかったことは、そういう幾つかの現象面からおそらく想像頼えるようなアメリカ社会の非常な困難というものであります。

困難を引き起した要因

では一体、そういう困難がなぜもたらされたかという問題になるわけですが、これにはもちろんいろいろな原因があります。遠因もあります。近因もあります。そしてアメリカ自体の問題もありますし、世界情勢がアメリ

カに押しつけたという問題もあります。遠因としてはアメリカ社会自体が建国以来持ってきたいろいろな要素、たとえば多民族の多人種社会ということからくる社会的な緊張の高さをあげることができます。そして、近因としては、アメリカの今日の荒廃、退廃をもたらしたものは何といってもベトナム戦争であったと結論せざるを得ないです。

私はベトナム戦争というものをみておりまして、たまたまおととしの 10 月までは外務省に 2 年間つとめておりましたから、一応そういういきさつを first-hand に観察する機会もあったわけですが、とにかくベトナム戦争というものは immoral ないくさであったということはだれが何といってもいいわざるを得ない。まさに没義道ないくさであった。それのみならず、アメリカ人自身の立場から申しますと、一体何のためにいくさをしているのかわからない、理由不明のいくさであったということ。アメリカ人というのは、客観的にみてたとえどれほど immoral ないくさであっても、少なくとも彼らが主觀的になぜこのいくさを戦っているのだということさえ納得できれば、大体において戦争協力をいとわない国民であります。たとえば第一次大戦のとき、ウィルソンはアメリカを参戦させないという公約で大統領になったわけです。元プリンストン大学の学長です。ところが、いろいろな理由があって、これはドイツの外務大臣のメキシコへの働きかけがばれて、アメリカの市民感情を刺激したとか、ドイツの潜水艦が破壊活動をやったとか、いろいろなことがあって、アメリカ人はほぼ全面的に参戦を肯じたわけです。そのときウィルソンが掲げた有名なセリフは “To make the world safe for democracy” といいうい方であります。つまり、民主主義にとって世界を安全な場所たらしむるためにアメリカは参戦をするのだという大義名分を信じて、それを受け入れ参戦し、第一次大戦を戦ったわけです。

第二次大戦も、ヒットラーのドイツ、ムッソリーニのイタリア、そして軍閥のもとにあった日本の台頭を何とか防がなくちゃならぬ、そして民主主義にとって世界を再び安全なところたらしむる、そしてその戦いのためのアメリカはいわば弾薬庫になるのだ arsenal for democracy ということばが当時使われました。Arsenal というのは弾薬庫という意味です。これはルーズベルト大統領が使ったことばですが、そういう名分のもとに大体のアメリカ人は欣然と第二次大戦に協力しました。

朝鮮戦争、これまたほぼ似たような状況であります。つまりアメリカ人というのはさっき申しましたように、われわれからみて、あるいは世界史からみて客観的にア

メリカ人の考えていることが正しいかどうか別として、正しいと彼らが少なくとも主観的に信じ、一つの政治的な目的を達成するための手段なんだというふうに信じ込むことができた戦争には協力する。

ところが今度のベトナム戦争ばかりは何らそういう justification を主観的であれアメリカ人に与えることができなかった。つまり、最初から完全に無目的な、いかなる政治目的を解決するための手立てであるのかわからないままにアメリカ人はあのベトナム戦争、あるいは一連のインドシナ作戦に引きずり込まれた。したがってアメリカ人のこの戦争に対する意識は、もちろん例外はありますけれども、一般的にいえば、非常に低かったわけです。厭戦、反戦の高まりは今までの戦争にみられなかつたほどの高まりを主として若い人たちを中心にみせたということです。いわばこのアメリカ人のベトナム戦争に対する厭戦あるいは反戦の気持が、実は数年前になりますけれども、ときのジョンソン大統領をして、もう北爆を停止し再び大統領選挙に指名されてもその指名は受けない、おりるのだといって大統領職から身をひかざるを得なかった理由でありますし、また、このたびのニクソンのとった一連の措置にしてもあの不人気なベトナム戦争を何とか、やめざるを得ないという彼自身の、いってみればせっぱ詰まつたことからあの拳に出たというふうに考えるべきだと思います。

困難に対する政策

とにかくアメリカはベトナム戦争という military adventures において何ら政治的な問題を国際政治の中で解決することができなかつたのみならず、著しく国際的な地位、あるいは status、あるいは prestige を弱め、たとえば中国とアメリカとの関係というのを考えてみましても、いまや “from a position of strength” から交渉できるのは中国であって、 “from a position of weakness” から交渉せざるを得ないところに追い込まれているのが米国であるということは、はっきりしています。これは、高名なアメリカの中国専門家オーエン・ラティモア博士のことばです。

一連の今までの動き、たとえばニクソンが中国へ行かざるを得ないとか、近くは国連の問題などはまさにそのことをわれわれに実に明確に歴史的に告げてくれる一連の出来事であったと思いますけれども、国際的な社会において問題解決ができなかつた、のみならずアメリカの威信を落とした。

では国内はどうかというと振り上げた刀、段平を振り

上げたわけですが、その振り上げた段平、つまり返す刀で自分が切られた。これは国内の荒廃、人心の著しい荒廃、犯罪率の増加というようなものであらわれている。まさにベトナム戦争というのはアメリカにとってはほんとうに悪夢のようなものです。アメリカ自身の非常に selfish な立場から考えてみても悪夢のようなものであった。それによくやくアメリカの市民、特に若い人たちを中心に行きが出てまいりまして、それをもはや無視することのできないまでにアメリカの反戦の声が高まってきた。私がもっとも尊敬する方で、ノーベル賞をとったえらい生化学者のセント・ジェルジ博士の近著『狂ったサル』は、この点を実に鋭くついています。のみならず、いま申し上げたようないろいろな経済の問題、社会の問題、その他が出てきた。そこで政策決定者としてもかなり思い切った措置を講ぜざるを得なくなつたということあります。

ただここでもう一つ加えておきますならば、これは私の個人的な見解ですけれども、ニクソンの訪中ということが伝えられているわけですが、これは私はある意味においてはニクソンが中国の影響力、特にハノイに対する影響力を過大に評価し過ぎているという意味においてはきわめて unrealistic だと思います。つまり、中国と話をつけさえすればベトナム問題が片づくのだというふうにもし安易にニクソンが考えているとすれば、これはとんでもないことだと思います。ちょうど、かつて国際関係論の中でドミノ理論というのがありました。もし、たとえばベトナムが倒れて共産主義になつたらあの地域の国はみんなバタバタと中国の影響下に入って共産化されてしまうんだという考え方があったわけです。それがいわゆるドミノ理論です。そのドミノ理論を正しいと信じておればこそアメリカはああいう愚かしい、そして immoral な military adventure に出ていったわけです。ところが私はあのドミノ理論というのは、こと中国についてはおかしな理論だと思っておりました。というのは、私は中国というの、いわゆる軍事的な意味における拡張政策の国だというふうにはどうしても考えられないからであります。文化的にはたしかに拡張政策という意味はわかるような気がするのです。武力をひとつも用いなくてもあれだけの巨大な、偉大な文明があればそのまわりの国は当然その影響受けるわけでして、それをもし拡張政策というならそれは拡張政策かもしれません。しかし中国が軍事的な意味での拡張政策を戦後とついたとは全然思えない。中印紛争はどうだ、とよくいわれるんですが、これはインドのほうがよほど悪い。チベットはどうだった。チベットは昔から中国の版図の一部だ

ったので、何も新たに中国が兵をおこして、いままでは全く自分の国とは関係のなかったものを併呑したというのではないわけです。それはともかくとして、そういうふうに必ず中国が拡張政策で出てくると思ったからドミノ理論でアメリカは出兵をしたわけです。つまり中国を拡張政策であるとみる考え方、中国というのが外部に対して非常に大きな影響力をかなり自主的に行使するのだという考え方、これがドミノ理論であったわけですが、今度も私は全く同じことがいえると思います。私は中国がハノイに対して決定的に大きな影響力を行使できるとは思わないし、また、おそらくは行使しないであろうと思う。それではまさに悪しき大国主義です。ところがドミノ理論を信じていたアメリカ人の頭からいいますと、中国さえ何とか話をうまくつければベトナムは片づくと、こういうふうに思うわけです。つまり、ある種の逆ドミノ的な発想でニクソンは訪中を考え、そしてその訪中によってベトナム戦争を何とか中国の影響力のもとに片づけようとしているのではないか。であるとすれば、私はこれはボス交のようなものであり、北ベトナムを無視した非現実的な考え方で成功する可能性は少ないと思うのです、それはとにかく、何とかしなければ国内がどうにもならぬところに追い詰められているのがアメリカの現状です。

Expensive but Shoddy

現状について話をしたわけですが、あとちょっと話をつけ加えさせていただくと、今度、私アメリカに行って気がついたことの一つは、たとえば、アメリカの品物を買う。そうすると実に品質が悪いのです。アメリカ製品の品質の低下。昔、日本の製品は安からう、悪からうといわれた。cheap but shoddyといわれたのですけれども、いまのアメリカの製品の少なくとも一部は expensive but shoddy、高からう、悪からうといつても言い過ぎではないぐらいです。特に落ちるのは衣料品と車ですね。それに労働者、これはサービス業の労働者は特にそうですけれども、働かなくなったり、サービス業のサービスの質が実際に落ちた。私、シカゴの有名なホテルに泊まっていたのですが、ニューヨークの友人とかワシントンの友人から電話がかかってくる。國弘というやつがいるはずだ、つないでくれというと、そんなのはいないというわけです。あとで友人から手紙で、おまえどこへ隠れていたんだということをいわれてわかったのですが、國弘なんていない、いるはずだ、いない、それで話が終わっちゃう。私いまだにふに落ちないのであるが、おそらく

名字と名前とをとっ違えたのだと思います。これは善意に解釈をして、國弘という私の family name でレジスターしているのではなくて、私の first name で Mr. Masao としてやってたのだろう、だから國弘といつてもいるわけがないのです。片方は M で片方は K ですからいるはずがないですね。たとえばそういうことにみられるようなサービスの質の低下は驚くべきである。

これは私はやはりアメリカの一つの大きな問題だと思います。つまり、何かものを達成するといいますか、英語ではこれを achievement orientation といいます。あるいは、たとえば pride in workmanship、つまり自分で手づくりのものを大事につくってそれに非常な誇りをいだく、大量生産時代以前の職人さんなんかのかたぎですね。そういうようなもの、あるいは勤勉努力いそしみ、無駄を省き、ぜいたくをしないで資本を蓄積していくというような発想、これを英語では work ethic (勤労倫理) といいますが、そういう勤労倫理がくずれ去りつつあるのではないかというような気が強くしたわけです。それで、アメリカとか、西ヨーロッパもそうですが、いわゆる工業国家として、あるいは資本主義国家として今日のように大成した背後には、例の新教倫理という名前で呼ばれる倫理観があるわけですね。つまり、おいしいものを食べようとか、きれいなものを着ようとか、ぜいたくしようということでなくて、一生懸命働いて、ストイックに身をつめ、つつましくして勤労の喜びみたいなものに身をゆだねていくという、これが新教倫理と呼ばれるものです。これについてはマックス・ウェーバーが「西欧プロテスタンティズムと資本主義の発達」という論文を出しています。岩波から翻訳が出ていますが、勤勉努力いそしまんという禁欲的な精神、特にカルヴィニズム、あるいはバプテストなんかもそうですが、そういう勤勉努力型のストイックな精神が実は西欧の資本主義に必要な精神的な風土を提供したのだという考え方をマックス・ウェーバーや、イギリスのトーネーが述べています。

これはアメリカにも適用できるわけでありまして、アメリカという社会を最初につくったのはだれか、いわゆる清教徒ですね。これがアメリカにやってきてアメリカのニューイングランド地域に植民した。清教徒はクロムウェルなどの流れをくむわけですけれども、この Puritanism といわれるものはカルヴァニストなんです。つまりこういう西ヨーロッパの新教倫理の、いわばアメリカ版が清教徒です。そのアメリカ版の puritan の倫理観がアメリカの経済大国としての今日を可能にした一つの大きな要素であったということがいえると思います。

ところがそういう基本的な倫理観にどっかすき間風が吹いてきた。何かそれが変質をしてきた。ストイックであるよりはむしろ快楽主義的であり、快美主義的である。そういう文明論的なといつてもいいような変質をアメリカはみせつつあるのではないかということを私は非常に強く感じました。その幾つかの証拠みたいなものがあるわけでして、たとえばアメリカの労働者の間に absenteeism、つまり職場を休む。電話か何かして、ちょっときょうは調子悪いから休むというふうなことで休む、そういうものが目に見えて増加した。これはアメリカの経営者にとっても、労働組合運動(organized labor)の指導者にとってもゆるしい問題になっている。あまりにも absenteeism が高い。なぜか。もちろん現象面からいえばそういう勤勉努力精神が失なわれつつあるということになるでしょうけれども、一体何が原因なのかということになると、これはかなり広範囲な、いってみれば社会学的な考察を必要とすると思います。

幾つかの例として考えられるのは、たとえば高度の mechanization (機械化)あるいは automatization (オートメ化) というようなものが進行して仕事そのものが非常に単純化して、くそおもしろくもないような仕事を生活のためとはいえやらなければならぬということですね。いわゆる仕事の非人間化といってもいいような現象、それに対してある種の抵抗、つまり人間疎外の問題、human alienation と申しますが、それがこういう形で一つの抵抗の姿勢としてあらわれてきているということが多いえると思います。

あるいはさっきアメリカは失業率が 6.2% というふうに申しましたけれども、なんといっても社会保障制度 (social security) つまり老齢年金のようなもの、ないしは、災害のときの労災保険 (workman's compensation) とか失業保険を含めて社会保障制度がかなり発達している。北欧なんかと比べると問題でありませんけれども、日本と比べるとはるかに発達している。それに一般的にはやはりアメリカの富のレベルが高いということですね。困った、困ったといつても高いですからね。たとえば GNP で申しますと、日本は GNP が約 2,000 億ドルですね。アメリカは約 1 兆ドル。ずいぶん高いですね。日本の場合は 1 億人で 2,000 億でしょう。アメリカは 2 億人で 1 兆ですからね。1 人当たり (per capita) では 5 対 2 ぐらいの割合ですね。だからそういうふうな一般的な富のレベルが高いこともあってこういう余裕がまだまだあるのだという説明はできると思います。

文化革命

若干ジャーナリストといつても恐縮ですが、アメリカにいま起きつつある文化大革命、文化大革命といふと中国を思い出しがちですが、私はいま最後のほうで申しましたように、アメリカの文明の質的な変化がいま生まれつつあるような気がしてならないのです、特に主として若い人たちのグループと接触をしましたし、またたとえばラルフ・ネイダーなんかを中心とする。いわゆる consumer movement、つまり消費者運動に従事をしている人たち、それから環境破壊、つまり公害ですが、environmental group などとアメリカではいっておりますが、ecological な、つまり環境上のいろいろな問題、環境破壊をどうやって防止をするかという目的で活発に運動をしている人たち、それから黒人解放運動、それから婦人解放運動、そういうような人たちと主として会い、またそういう運動を観察している社会学者や評論家と会って話をしてきたわけです。その私の見聞からしてほぼ間違いないえるのではないかということは、アメリカにある種の文化革命が起きているということです。もちろんその先導に立っているのはやはり、いま申し上げたようなグループ、特に若い人たちであるということです。

いまアメリカでベスト・セラーになっている書物の一つに、これはフランス人が書いたものを英語に翻訳したのですが、『Without Marx or Christ』という本があります。『マルクスもキリストもなしに』というのがその本のタイトルですが、その著者のフランス人、これは元来マルクス主義から出た人なんですけれども、そのラベルというフランス人の評論家の説を最初に簡単にご紹介しておきますと、やはりいまアメリカでは非常に大きな革命ないしは変革が進行しつつある。その変革の大きさは、たとえばフランス革命、ロシア革命ないしはキューバ革命、さらにはあの巨大な中国革命よりももっと大きなものであり、より大きな影響を与えるであろうというふうにいっているのです。何となれば、フランス革命にしても、中国革命にしても、これはちょっと私疑問があるわけですが、とにかく彼の説によれば、いずれにしても、ああいう今までの革命はよせんは一つの regime が次の regime、つまり ancien regime、古い政治体制、あるいは政権といつてもいいと思いますが、古い政権が新しい政権にとってかわられたという意味のいわば政権交代である。ところがいまアメリカで起きつつある変革は、いわば文明の質そのものが大きく変革を受けつつあるのだという意味で、その意味においては今までのい

それも偉大な革命がありますけれども、ロシア革命や中国革命やフランス革命よりもより大きな影響力というか、impact を残すであろうというのです。彼にいわせるとその革命、文明論的な変革というのはやはりアメリカに起きるであろう。アメリカにおいてまっ先に起きるし、アメリカでなければ起きないであろうというわけです。ではなぜアメリカにおいてしか起きないかというと、アメリカが最も先端的な問題をかかえているからだ。アメリカは、さっき申し上げたように建国以来なかったような巨大な問題をいまかかえているわけですが、その巨大な問題はアメリカに固有な、アメリカに独特な問題もありますけれども、いってみれば人類社会が非常に大きな文明の転換期にあって、ときの早い、おそいはありますしが、いずれはかかえるであろう、あるいはかかえなくちゃならないような問題を最も鋭角的に、先端的な形でアメリカがかかえているからだというわけです。私は彼の説にかなり納得できる点があるのです。彼の書物を読む前にアメリカを見ておりまして、何か急激に変わりつつあるという感じを強く持っていたせいもあるのですが、とにかく彼の説に納得させられるところが非常に大きいのです。

アメリカがかかえている問題はいろいろあるわけです。たとえば科学技術がやみくもに発達をし過ぎちゃって、それが生命を尊重するというか、生命をいつくしみ育てるために使われずに、むしろ生命を破壊したり、物理的、暴力的にねじ曲げたりする形で使われているということなどはその一つであります。あるいは、たとえば private な私の財 (goods) をつくることが何よりも大切な社会の目標になってしまって、どうして private な goods をより多くつくるか、より多く流通させるか、より多く使わせるかということに社会全体の価値観が向いてしまって、大きいことはいいことだ、より多く消費することはよいことだ、というようなことで世の中の機構も、社会の組織も、価値観も、意識も、全部そっちのほうに向いてしまっているというような状態、これは日本にももちろんみられる現象ですけれども、物質的に何といっても豊かなアメリカにおいて最も先端的にみられるし、そのもたらすいろいろなマイナスもアメリカにおいて最も典型的、先端的に拡大された形でみられるということをいえると思います。Goods というのは財ですね。この財の生産、特に private な goods のより多くの生産、より多くの流通、より多くの消費というものが美德であるというアメリカは社会であるわけですが、このより多くの private goods を生産し、それを流通させ、消費させるということが果たして美德であるか、果たして

それがほんとうの意味における人間の生の肯定に、生の充足にそしてしあわせということばをあえて使うならば、しあわせに結びつくものであるかどうか、より多く消費し、より多くの物質に恵まれるということはかえって人間の不幸につながる側面というものがいろいろと出てきたのではないかというような反省があるわけです。

しかもこの private な goods をやみくもに民間の企業がどんどんこしらえるということになるとそれに伴って goods というものが出てきます。この goods というものは字引を引いてもおそらく先生方発見なさらないことばだと思いますが、最近の経済学者が盛んに用いることばです。Goods に対して goods というわけです。つまり財に対して、財に伴って出てくるもろもろの悪しきもの、これを goods というわけです。たとえば環境破壊は、物をつくることに伴っても出てきているわけですし、非常に深刻な問題になってきているのですが、そういうようなものを一つの goods というふうに考えるわけです。

こういう今までのアメリカの社会がよってもって立っていた原則のようなもの、価値のようなもの、あるいはそれを中心にアメリカ社会が動いてきた機構、組織に対する深刻な反省、これが特に若い人を中心にしてきました。一口で申しますならば一つは物質主義の否定です。Materialism の否定、anti-materialism といつてもいいようなものが出てきている。あるいはまたそういう今までのアメリカのよってもって立ってきた原理・原則を支えてきた一つの machinery (機構) としての private industry というか、private enterprise (民間私企業)、いわゆる business に対するきびしい批判が、特に若者を中心出てきております。ほかにも革命の側面としてはいろいろな側面があるわけですけれども、いま申し上げた2つないし3つの側面に限ってきょうはお話し申し上げることをお許し願いたいと思います。

非 物 質 主 義

まず anti-materialism というか、非物質主義、あるいは反物質主義というようなもの、あるいはそれと関連して anti-business というようなもの、これはアメリカの社会というのは、いままで引きわめて物質中心の社会であった。そして business 中心の社会がありました。かつて、アメリカのある大統領は、“The business of America is business.” という有名なことばをはいた。アメリカの仕事というのは商売だということです。要するにアメリカの社会というのは経済活動、あるいは量的に表現できる、量的にはっきり identify できる、そ

いうものの増大、拡大、生産の増大、富の拡大であり、個人にとっても一番望ましい人生の goal であり、社会にとっても望ましい目標なんだという考え方が非常に強かったわけです。それが “The business of America is business.” ということばに象徴されてあったわけです。現にアメリカの社会というのは優秀な人間は大体 business にいったものです。世間的な意味で能力のある人間は大体 business の世界に入っていた。企業の世界に入って経済活動をやる。もっと端的にいえば金もうけをやる。それが個人の人生の設計の理想としても、社会全体としても望ましい価値であり、目標であったわけです。ところがそういういわば基本的な個人の goal あるいは社会全体の目標としての orientation に何か変革が生じてきたということをいま申し上げているわけです。

たとえば、1960 年ぐらいから アメリカの優秀な大学の卒業生の中で、さっきの The business of America is business. ということばに対比させますと、Business is for the birds. この for the birds というのはアメリカの俗語でつまらないということです。Business なんかくだらない、これが 1960 年ぐらいからアメリカの優秀な大学の卒業生から出てきた一つのスローガン的なものであるといってよろしい。具体的に、こういうスローガンがどういう形であらわれてきたか、そしてなぜあらわれてきたかということをちょっとご説明します。

たとえば、各会社が求人係 (recruiter) を各大学に送ります。うちの会社はこれこれしてあげるからいらっしゃいといつて新卒者を誘うわけです。ところが recruiter の連中が笛吹けども優秀な学生がなかなか踊ってくれない。つまり企業に来ようとしなくなつたというのです。そういう傾向が 60 年ごろからかなり顕著に出てきた。つまりビジネス忌避であります。金もうけなんぞに自分の一生をかけるのはいやだ、われわれの一生をかけるに値する作業ではないのだ、そういうビジネス忌避の精神みたいなものが具体的な形であらわれてきた。たとえば、1964 年、アメリカにおける最も有名な大学の一つであるハーバードの新卒は 1,064 人いた。その連中の内で、企業への就職を肯んじたのはわずか 40 人しかなかつた。ではほかの連中はどこへ行ったか。Private enterprise へ行くよりはむしろ彼らが目ざした方向は public service, たとえば、教職、あるいは scientific research, あるいは法学校へ行って弁護士になる。あるいはいろいろな形における government, しかもアメリカ英語における government というのはさっき申し上げたように、いわゆる中央政府だけではなくて、州政府、地方自治体政府、しかも行政だけでなく司法・立法の三権を全部含

みます。それからいろいろな意味での政治も含めて考えていい。たとえば邦へ帰って、自分の生まれ故郷の教育委員会に立候補して教育委員になるというようなことも含めて非常に広い意味です。こういういわゆる広い意味の public service に入っていくものが圧倒的です。そして平和部隊 (Peace Corps). いまはだんだん計画自体小さくなっていますけれども、64 年当時はまだ大きかったのですが、平和部隊に入って外国の、特におくれた地域、開発途上国へ行ってどろまみれになって、それはアメリカ帝国主義の一つの手先だという批判もありますけれども、とにかく若者たちとしてはきわめて理想主義の立場からやったというふうにみてやりたいのですが、その数が 32 人。とにかく 40 人しか企業に入らない。そして 32 人も平和部隊に進んだ。そして残りの 1,000 人ぐらいは何らかの形で public service へ入った。ハーバード大学というのはアメリカの top-knotch university ですから、ハーバードを出たということは、日本ほどアメリカは学歴の問題はひどくありませんけれども、しかしとにかくエリートであるに違いない。そのエリートたちが選んだコース というの広い意味での public service だった。

では一体、なぜ彼らが business というものをかくも忌避したかということです。これは幾つか例を申し上げればおそらく、アメリカの若い人たちに芽ばえつつある何か違った意識をかいま見ることができます。

たとえば産軍複合体 (military industrial complex) のいまわしさに対する嫌悪感、つまり、産業界・経済界と、それから軍部とがいわゆる defence contract (防衛契約) という名のもとに軍艦つくりたり、大砲つくりたり、要するに人殺しの材料をつくるということに伴って産業界・経済界と軍部が癒着をしている。それを産軍複合体 (military industrial complex) というのです。このことばをつくったのはみずからも陸軍軍人であったアイゼンハワーです。彼が 1960 年に大統領として最後の演説をテレビを通じて全米に対して行ないまして、「アメリカはいまや産軍複合体というとてつもない大きなものの危機にさらされている。この military industrial complex があまりにも巨大であるがゆえに、もしアメリカ市民がそれに対して十分な警戒をはらい、civilian control でチェックしなければ、やがてはアメリカの民主主義的諸制度をのみ込んでしまうであろう。国民諸君よ、若い次期大統領を助けて、産軍複合体がアメリカの民主的諸制度をだめにしてしまわないように十分の警戒をしてほしい」という告別演説をやった。そこから出たことばです。これはもう日本でもおなじみのこととして

ね。われわれもまた警戒を怠るべきではないと思いますし、5兆8,000億などという4次防の愚かしさを、私はたとえば教育投資の低さと比べた際に思はざるを得ないです。これはあとでアメリカ人の対日イメージに触れる際にとり上げたいと思います。

計画的陳腐化・管理価格

いま一つの例として planned obsolescence, 計画的陳腐化というふうに訳します。これはどういうことかといふと、要するにものをつくる際に、あらかじめできの悪いものをつくっておくことです。たとえば2年動かせばガタがいくような自動車をあらかじめこしらえる。計画的に老朽化をはかる。なぜそういうことをするか。いまの科学や技術のレベルからすれば10年ぐらい使ってもこわれない自動車をつくれるはずです。ところがそういうものはつくらない。なぜつくらないか。2年でこわれてくれなければ次のモデル・チェンジの自動車を売るわけにいかないわけです。そういうことは何でもいいから消費させようとかかってくるわけですから2年たったらぶっこわれて買いかえる、また買いかえなくちゃならんようなことにもっていくためにはやはり計画的老朽化が役に立つ。これはアメリカの経済界が開発したことでありまして、日本には1953年ぐらいに導入した。電球なんかは昔からやっておりましたね、日本でも、2,000時間もつものをわざと1,000時間でだめになるようなものをこしらえて2倍売ろうというわけです。とにかく売ることがいいことで、より多く消費することがいいことだという考え方の一つの典型的なものです。

あるいは、administered price (管理価格) というものです。これはどういうことかといふと、たとえば鉄鋼業界なんか、大手のメーカーが4つなら4つしかない場合、ある一つのメーカーが高いところで鉄鋼の値段をきめるわけです。そうすると他のメーカーはそれにさっと右へならえしていく。価格を統一しちゃうわけです。そうすると競争という原理が働くなくなる。競争というものがいいのは、同じものを3軒でつくっていると、AもBもCも少しでもいいものを安く売ろうとして、そこで競争原理が働きば消費者としては安くてよいものを選択して買うことができるわけです。これが競争原理のよいところで、かつてエマソンが「人より良い mousetrap (ねずみとり) を作れば、千客万来だ」といったのはそういう意味です。ところが4つなら4つのメーカーがお互いに価格をきめて、そしてこれでいこうと談合する。ほんとうは談合はいけないので、独禁法でひっかかる

はずなんだけれども、ゴルフなんか一緒にやりながら、これでいこうやなんていうことを話したら談合の証拠にならない。だから談合は実際行なわれている。日本でも行なわれている。もっとも日本の独禁法というのは完全にザル法ですからね。アメリカの独禁法のほうははるかに厳しい。にもかかわらずやはり管理価格制度というものがある。値段を人為的に高くつり上げる。消費者はそれだけ高いものを買わされる。まして寡占体制、3つか4つかメーカーがなければ、その間で談合をして値段をつり上げたらほかから買うわけにいかない。高いものをつかまされるということがアメリカで実際に行なわれる。そんなことはいくらも例をあげることはできます。

たとえば、広告なんていうのは、これは日本の広告もアメリカの広告もそうですけれども、一部にはひどいのがある。だれがあんなことを文字どおりに信用しますか。たとえば何かシャツを買うとあなたは一生しあわせで暮らせるみたいなことをいう。(笑い) じょうだんいっちゃいけないということですね。あの広告のうたい文句というか、内容というか、それは vulgar であるだけでなく、人の知性を無視したような、いいかげんな売らんかな式の広告というのがある。イギリスのトインビー教授がかつてこれを一冊の本で爆撃したことがあります。何でも売ればいい、売ることはいいことだ、消費の増大は即人々のしあわせに通ずるのだというような発想がずっと流れている。

こういうものによって象徴されてきたのがアメリカの経済社会であります。そういうものによって象徴されてきた経済社会が実はアメリカという国において最も主導的な地位を占めていた。

しかしこういうことの陰にどれほどの欺瞞があるか。そしてこういうことの陰に、たとえばこれは一つの例ですけれども、environmental disruption, environmental degradation, あるいは environmental pollution, いろいろないい方がありますけれども、環境破壊がどれほどひどく起きているか、それが放置されてきたということです。あるいは安全、たとえば自動車についていえば欠陥車がどんどん出て、一英語では defective car といいますが一乗っている人の安全が無視される。あるいは交通事故がふえる。人命がそれによってそこなわれる。あるいはまた有毒なガスを出して、それが大気汚染 (air pollution) につながる。一連のそういうものに対して彼らは非常な嫌悪感と anti の姿勢をいま急激に示しつつある。私はその点は、やはり日本のほうがおくれていると思います。日本はまだまだ基本的に貧しいということもあります。日本の GNP は2,000億ドル、それに対し人

口2倍のアメリカは1兆ドルという5倍の国民総生産を持ち、1人当たりにしてもわれわれよりもはるかに豊かありますし、日本の場合はまだまだわれわれ一人一人がもっともっと物質的に富むということの必要があるわけですけれども、しかしながらアメリカのように物質的に豊かになった社会で、しかもいままでのそういう経済社会が大きな矛盾と問題と欺瞞とをはらんできたということに対する若い人たちを中心とする怒りといいますか、あるいは不満が非常に強く表に出てきつつあるということはいえると思います。

新しい生活様式

そこで現象として、たとえばこういうような現象がいまだに残っている。そして、もう物はいいというような新しい若者の life style が生まれてきた。その一つの symbolical なものとして、ヒッピーとかイッピーとかいう、あの若者のグループをお考えいただいていいと思います。私がいま申し上げているのはヒッピーとかイッピーだけをいっているのではない。ヒッピーとかイッピーというのはそういう若者たちの中でも少数勢力でしかありませんけれども、最も鋭角的にいま起こりつつあるアメリカの若者たちの意識を symbolize しているグループであるといつても決して間違いではないと思います。その意味においては、やはりヒッピーやイッピーをそういうワクの中で考えたいのですけれども、とにかくそういう若者に独特な life style が生まれつつある。

非常に末梢のことから申しますと、たとえばひげを伸ばすとか、髪は女の子みたいに伸ばすことだとか、あるいは、若干問題があるのですけれども、たとえば麻薬とか、いわれるところのフリー・セックスとか、そういう若干極端な場合にも出てまいりますけれども、彼らのとにかく独特の life style が生まれつつある。私はその life style というのは多くの場合非常に高く評価している。その理由は、たとえば何といっても生命尊重がはっきりしている。非暴力もはっきりしている。いろいろな問題はあります。それを全面的に礼賛するわけにはいきませんけれども、たとえば何か一つの特徴をあげてみるといわれれば、一つは生命尊重という life orientation である。Life oriented culture ということは、私は自信をもっていふことができると思います。

それから non-violence である。非暴力ということは life orientation に関連ありますけれども、そういう形でのアメリカの若い人たちの動きを一つ特徴づけることができると思います。なおこれらの点については NHK の

角間博さんというプロデューサーが中公新書から『燃えるアメリカ』という好著を出しています。ぜひ一読をお奨めします。

もう少し具体的な例をあげますと、若い人たちが business を忌避して public service に入ってくるということなんですが、たとえば最近アメリカでは business school に入る入学志願者の数がガタッと落ちている。アメリカの business school というのは大学院レベルの学校です。postgraduate school ですね。アメリカ英語では professional school といってますが、大学4年を了えてから2年～3年間 business school に入って、そこで business executive としての訓練を受ける。Business school というのはアメリカの企業内で出世するための登龍門といつてもいい。ハーバードの business school とかペンシルヴァニア大学のウォートン・スクールとか一流の business school に入れば、business の世界においては出世がほとんど間違いない。それが減っている。それに対して同じ professional school であり、大学院レベルの学校である law school、これは入学志願者はことしは去年の3倍にふえています。これは一体何を意味するか。一つの例として申し上げます。もちろんこれはアメリカ経済が stagflation で停滞しておりますから、その意味で business school の志願者が減ったんだという説明は表面的にはつくのですけれども、私はそれだけだとは思わない。むしろ law school への志願者がふえていることは、いわば法律を社会改革のための具体的な手立てとして使おうという意識のようなものが目ざめてきたのだと私はみるのです。つまり法律というは何といったって体制のものです。体制がつくったものですし、マルクス的にいえば superstructure、上部構造でしかない。したがってその限界はもちろんあるかもしれませんけれども、少なくとも一つの system の中で、その system を改革していくう、社会改革といつていいでしょう、melioristic な social reform をしていくと志す場合に、法律というものは敵に使われたらいいへんなひどい目に合いますが、こっちがうまく使えば有力な武器になることは間違いない。つまり social reform のための一つの lever、あるいは leverage になるということははっきりしている。体制内改革派といつてもいいかもしれませんけれども、法律を lever として、leverage として使っていこうじゃないかという若者が非常にふえている。

私も今度法学校を少し歩きまして、若い法律学生とか、学校出たばかりの、3年間の法学校を終えて弁護士になってやっている弁護士がどういう意識を持っている

かというのを若干みてきた。シカゴの最もひどい黒人街の中で黒人を助けて無料の法律サービスをやっている若い弁護士数人とも会ってまいりました。そういう人たちと会って、あるいはそういう人たちを観察している研究者と話をします間違いないえるのではないかと思われることは、その若い法学生とか法律専門家の全部とはもちろんいいませんけれども、かなり多くの部分が最近アメリカのはやりのことばでは public interest law に目を向けつつある。つまり、個々の企業、private な corporation の、enterprise の利益を守るために、たとえば会社の顧問弁護士、あるいは個人の利益を守るというか、非常に狭い意味での、排他的な意味における個人の利益を守るというような意味での法律家であるよりは、むしろ広い意味での public interest law と呼ばれる法律専門家を目指したり、それに非常に強い関心を持ち、そういう意味での仕事をしている弁護士、法律家が非常に多い。これは驚きました。私はたのもしいと思いました。つまり、彼らがやみくもに大学出で顧問弁護士か何かになって大体年俸 2 万ドル、新しいレートで申します 700 万円。ところがこの連中がたとえば public interest law をやって、貧しい黒人のためにいろいろしてあげるとか、消費者運動関係の消費者保護のために法律を使う、あるいは環境破壊防止のための弁護士として機能するというようなことをやると年俸大体 4,500 ドルです。大体 140 万～150 万円です。2 万ドルかせげる人間が 4,500 ドルでがまんする。4,500 ドルもらってりやないじやないか、おれたちよりよけいもらっているじやないかとおっしゃるかもしれませんけれども(笑い)、やはり生活水準の高さとか物価の高さということがありますからね。しかも 2 万ドルのうち 4,500 ドルでがまんするというのは相当な献身がなければできないと思います。それをあえてやろうという若者がふえている。私はそこに大きな期待を持つものです。一つの体制とか system を外から外圧によってぶちこわしていくという改革のしかたもあり得ると思いますけれども、体制内改革といって笑われるかもしれませんけれども、一つの体制の中で、徐々にではあっても reform をしていくという形もあっていいと思います。アメリカのような社会においては私はそれしかないと思います。なぜかというと、外からいわば力をもってあれしようと思ったら、必ず体制がより多くの力をもってそれをのみつくしてしまうということになるですから、私は日本でもある程度そういうことはいえると思いますが、それは別として、アメリカの場合においては少なくともある種の pragmatism に基づいた、とにかく中から変えていくという reform

運動みたいなものがとにかく若い人たちの間でかなり定着しているということを私自身は非常に評価をしております。これを一つの例として申し上げました。

もう一つ例をあげれば、消費者運動と環境問題に取り組んでいるラルフ・ネイダーという弁護士がありますが、彼は 36 歳で、日本にもことしの 2 月にやって参りました。私はたまたま一緒に歩きましたし、今度もアメリカでしばらく彼と話をしたのですけれども、個人としてみると実に禁欲的な生活を送っておりますし、すばらしい人間だと思うのです。そのラルフ・ネイダーのところにネイダーズ・レイダーズ(ネイダー突撃隊)というのがありまして、ネイダー突撃隊というのはいろいろな分野の弁護士とか生物学を勉強した人とか、経済学者とか、いろいろな連中が集まるわけです。大体年俸 4,500 ドルで働いています。1 週間少なくとも 60 時間は仕事をします。アメリカの週労働時間はいま 40 時間です。60 時間は少なくとも働く、そして 4,500 ドル。連中だってほかの企業に行けば 1 万 5,000 ドルや 2 万ドルぐらいもらえる連中です。ところがネイダーズ・レイダーズに入ろうと思うとそう簡単に入れない。イエール大学の法学校に入るよりもむずかしい。イエール大学の法学校というのはアメリカの法学校の中で最もむずかしい法学校です。そこへ入るよりもむずかしい。つまりそれだけたくさんの中の優秀な若い人材がそういうものにワッと押し寄せるわけです。それも一つの例として考えられます。

そういうような、特に若者たちを中心とする動き、もう 1 人例をあげますと、Denis Hayes, 26 歳、去年の 4 月 22 日に 1,000 万人の人を動員することができた。何をやるか。地球の日(Earth Day)、そのことばが象徴するように彼らの出した運動というのは環境破壊防止運動なんですけれども、とにかくいまや人類 36 億が生存している共通の住み家である地球というものがメタメタによごされている。大気汚染している。海がよごれている。海のよごれというのは酸素の欠乏を意味しますからね。地球上の酸素の 7 割は海の中の植物性プランクトンが光合成作用によってつくったのですからね。海がよごると酸素がふえなくなるということははっきりしているわけです。海がよごれて海水浴に行けなくて困るという話だけではない(笑い)。それも困るけれども、そんな問題じゃない。私の友人で木原透君という光合成の専門家がありますけれども、彼は深刻にそれをいう。これ以上海をよごしたら人類は生存できなくなるとははっきりいります。何となれば、酸素の供給がとまるじゃないか。地球の上の酸素の 7 割は海の中の植物がつくった。珪藻類、植物性プランクトンですね。あとは地上の植物がつ

くった。地上の植物はどんどん切られたりして、銀座の柳になっちまった。海はどんどんよごれて光合成作用を抑止をしている。そうなってくると酸素という地球人類にとっての、人類はおろか生物の生存にとって必要不可欠な要素であるものがなくなりつつあるということを盛んにいいます。酸素のバランスがくずれている。そこに実は公害問題というものの地球レベルにおける悪しき大きな問題があると思いますが、それはさておくとして、ヘイズ君が地球の日ということをいった。これは単に一つの地域とか地区あるいは国家の環境破壊を防止するだけではなくて、われわれがまさにいま防衛しなくてはならないものは地球であるという発想です。つまり、地球こそがわれわれの防衛に値する、そして防衛しなくてはならない何よりの存在だ。地球の上の 36 億の人間、そしてこの地球の上に住んでいる 36 億の人間が他の植物とか動物というものの間で一つのエコロジカル・システム、生態系をつくっているのだ。とにかくこのエコ・システム (eco-system) から自由ではあり得ないのだ。このシステム全体を防衛していくことは、つまり地球全体を防衛していくということの中にしか人類の存続はあり得ないのであるという考え方で、「地球の日」という運動をやった。これは昨年の 4 月 22 日でした。そのとき彼は 24 歳でした。いまやっと 26 歳になったからならないか。これが日本にやってきたのです。私は自分のテレビに出そうと思ってだいぶがんばったのですけれども、日程的にだめでした。髪を伸ばしてブーツをはいているのです。大きな幅の色のついたネクタイをして、色シャツを着ている。これはやはり本物だと思った(笑い)。あれがもしも背広なんかを一着に及んであらわれた日には全く幻滅しただろうと思いますけれども、いわゆる若者たちの新しい life style そのままでやってきて、共感を感じいろいろと話をした。彼の考え方の脱アメリカ的なのに打たれ、安心をした。アメリカの若い優秀な連中というのはいまややはりこういう term でものを考えることができるようにになってきた。アメリカの栄光とか American way of life とか、アメリカ至上主義とかいうようなものから相当程度まで解き放たれた若い人間像が生まれつつあると思います。そこに私は大きな救いを見たいのです。

グローバルな世界観

何だかんだといっても、アメリカが好むと好まざるとかかわらず大きな力を持っていることは否むことのできない事実です。アメリカが何かやればとたんにひどい

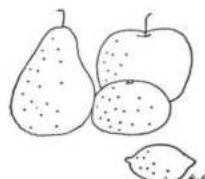
目にわれわれも現に会ったりしているわけですし、その大きな力を持ったアメリカが、やはり單にアメリカの栄光とか、アメリカ一国の何とかというものを追うのでなくて、やはり地球人類 36 億の中のアメリカなんだというような脱アメリカ的な発想で行動し、機能するかどうかということは、やはり地球全体、人類全体の運命に非常に大きなかかわりをもつといわなくてはならない。

ところがアメリカのいまのおとなはだめですね。今度のニクソンの一連の動きをみてつくづく思うのです。日本がお粗末であることはいうまでもないけれども、それ以外にアメリカのおとなをみてつくづく思うのは、アメリカという国のおとなは the world's greatest power として行動することは知っているけれども、one of the great powers として、他との協調において行動するという意識ないしは様式を十分には身につけていない。やはり私はそこでアメリカの現代のトップ指導者に対しては非常に落胆を感じるものですが。ただ、全部とはいしませんけれども若い連中の中にもっと脱アメリカ的な、一国一民族をこえて、このどんどん距離が小さくなり、科学技術が猛烈な勢いで発達し、核戦争の可能性がまだ決して消えていないという今日の地球的な、あるいは人類史的な現状にふさわしい意識を、何だかんだいってもまだまだ余力を持っているアメリカの若い人たちが身につけ始めているということは私はたいへんに力づけられることだとみているのです。

地球を守っていこうではないかという発想、地球防衛的な発想というもの、これはたとえば最近日本で一時かまびすしくいわれていたいわゆる自主防衛、あるいは 5 兆 8,000 億の 4 次防によって象徴される考え方とは全くうらはらな考え方であります。私はやはり global な考え方をとりたい。地球というものが置かれている状況というのはまさにそこにきているわけですからね。この global な考え方を推し進めていかなければ一国一民族の生存も繁栄もないわけですからね。一蓮托生ですからね、今度ばかりは、そこらを私はアメリカの若者たちに期待をしたいし、そういう意識なり発想なりをどうして日本の若い諸君にもってもらうかということにわれわれの今後の、特に英語教育という場を通じての責任があるような気がする。まさに今日の世代に、あるいは今後生まれるであろう世代に向かって窓を開けてやるという仕事は、われわれ英語教育に関係のある人間が最もしやすい作業ではないか。英語で申しますならば open a small window on sanity とでもいいましょうか。(1971年10月27日 ELEC 稔学研修コースにおける講演の速記)

(NHK 中級英語会話講師)

Oral Approach による授業の実践



—Oversize class に於ける指導—

浅野中・高等学校

ISHIKAWA, YOSHINORI

石川 喜教

はじめに

戦後 Oral Approach の理論が入ってきて以来約 18 年を経過し、既に多くの実践研究が発表され、現在ではその一つの特徴である、Pattern practice の technique は英語教育の一つの有効な手段として、現場に根を下している。しかし反面まだ Oral Approach と Oral Method が混同されたり、Pattern-practice の持つ意味や限界を考えずに、その欠点だけをとり上げ、表面的現象だけで Oral Approach を理解し、誤解の傾向さえ見受けられるのは残念である。常に変化の速い今日の世界では、何事も昔と同じであるはずではなく、Oral Approach もその初期のものと、現在ではかなり変わったものとなってきている。従来は、確かに理想の型を追求するあまり、やや型にはまり込んでいた氣味があったと思う。また物語りのような教材に対しての指導はどうするのかとか、中学校初級学年は良いが上級学年では、特に高校段階ではどうするのか、oversize class での個人の指導はどうするのか、といった諸点については、未解決の部分があった。私は昭和 41 年 4 月から、中学・高校を通して 6 年間 Oral Approach によって授業を実践してきたので、その data と共に私なりに実践を通して判断したこと等を述べてみたい。

家庭の子弟が多い。現在学級数は、中学と高校を併せて 31 学級、生徒数は、中学校 820 名、高校 840 名、教職員約 70 名である。1 学年 5 学級編成（高 1 のみ 6 学級）とし、各クラスは等質である。

2. わが国の英語教育をとりまく状況は、あまりよい条件下にはない。本校もその例にもれず、中学校の 1 学級定員 60 名（現在は 55 名）は、英語の教師にとっては、誠に unfavorable であった。このようなクラスで授業時間中、出来るだけ多くの生徒を授業に参加させ、授業の効率を高めることは、大変重要な問題であるが、本校では、特にこれという対策もないまま、各教師の持つ経験と持味を生かして、この問題に対処してきた。私はかねてからこの問題について興味を抱いていたが、昭和 41 年度の中 1 の担任となったのを機会に、それまでに何度か ELEC の研修に参加して知り得た Oral Approach の理論にもとづいて、実践研究をしてみることにした。

教科書は、学研書籍発行の *New Approach to English* (注：この教科書は残念ながら、今後は発行されないらしい。) を使い、実際の授業は、教科書に附隨して発行された、*Teachers' Guide* に従って行なった。

3. 昭和 41 年 10 月から、山家保先生指導のもとに、ELEC 研究協力校となり、中学・高校を通して 6 年間実践研究を続けた。これは、その記録である。

第一部 中学校の実践

I. 授業形態とその特徴

Oral Approach の 1 時間の授業の流れは、整然としており、少しの無駄もなく構成されており、4 skills を考慮に入れ、all-round な英語力をつけようとする密度の濃いものである。授業の手順は後で述べるようなものであるが、ある生徒には、長く感じられる 50 分の授業は次々と speedy に流れ行く学習作業に、むしろ時間の

本校の概要と実践研究の動機

1. 本校は、大正 9 年創立、校歴 50 年になる男子のみの私立校である。中・高一貫教育を目標にしており、生徒の大多数は大学進学を希望している。学校は京浜工業地帯を一望出来る高台にあり、その周囲の環境は必ずしも良好とはいえないが、樹木も多く、このような場所にはめずらしく県の鳥獣保護区域に指定されている。生徒は横浜市を中心に、周辺の市街地から通学している中流

短さを感じさせる程である。Oversize class では、全ての生徒に集中させるように指導する事は、容易な事ではないが、この点からいえば、Oral Approach の授業は全くうってつけの方法だと考える。Oversize class では、先ず型から規制して行く事が必要である。Twaddell のいう言語学習の 5 段階に基づいて、thorough learning を目標とした 1 時間の Procedure は次のようなものである。

A. Review (15—20 min.)

1. Choral reading
2. Pattern-practice
 - a) Variation
 - b) Selection
3. Written test

B. Presentation of the new material (10—15 min.)

1. Oral introduction
 2. mim-mem
 3. Check of understanding
- C. Reading & check of understanding
1. Reading of the day's text
 - a) Intensive choral reading of each sentence
 - b) Choral reading of the whole text
 - c) Reading with questions to help reading comprehension
 - d) Individual reading
- D. Consolidation (3—5 min.)

これは基本的な 50 分授業の場合であるが、その場に応じて、臨機応変に授業を行なって行くことが、それぞれの学習作業が能率的、効果的であるために必要である。

次にこの授業の特徴としてあげられるものを記してみたい。

(1) 中 1 から中 3 まで同じような手順に従って同質同量の oral work を与えて行く。

Oral work は低学年の時はそれほどでなくとも、学年が進むにつれて困難となってくるのが、一般的な見方であるが、教科が複雑化するにも拘らず、英語による発表力は衰えを見せないどころか、oral work の speed が増していくことが実践を通してわかった。

(2) Chorus で読ませたり、chorus で答えさせたりする choral work が多い。

Choral work というものは、ただ単に「皆さん読んでみましょう」といったものではなく、クラス全員が、そろって、大きな声ではなく正確にいえるまでもって行く学習作業である。これはクラス全員を授業に参加させる事の出来る有効な technique であり、併せて個人をも指導出来る technique である。

(3) 毎時の教材を全部暗唱し、書けるようになってくる事が宿題として課せられている。

英語の学習において、暗誦は大切なものであるが、毎時の教材を全部暗誦することについては、問題点があるという考え方もある。これは全ての教科書が Oral Approach の考えを基に作られているわけではないから、比較的運用度の高いものを暗誦させることがよいというのが、一般的な考え方である。しかし中学校で扱う教材は、暗誦に適するものであるべきだと思われるし、中学校の教材を暗誦しておくことは、高校での学習に好い影響を与えるものと思う。ところで生徒の

〈資料 No. 1〉 生徒の英語に対する興味・関心の調査 (%)

中学校 (調査実施期日 各学年共 2 月末)

調査項目	中1年	中2年	中3年	
英語の授業について	好きである 嫌いである	89.8 10.2	84.5 15.5	84.5 15.5
英語の復習に負担を感じているか	感じている 感じていない	8.7 91.3	19.8 80.2	22.3 77.7
英語の復習をしているか	いつもしている ときどきしない 全然しない	76.7 23.3 0	74.8 25.2 0	68.5 31.5 0
英語の復習にどの位時間がかかるか	15分以内 30分以内 45分以内 1時間以内 1時間以上	4.4 59.3 32.7 3.6 0	0.7 19.8 55.5 21.5 2.5	12.5 52.0 27.5 5.5 2.5

高等学校 (調査実施期日 2 月末日)

調査項目	高 1		高 2		
	リーダー	英文法	リーダー	英文法	
英語の復習をしているか	いつもやる 時々しない 全然しない	66.6 31.4 2.0	37.5 58.0 4.5	56.7 42.5 0.8	17.5 78.8 3.7
復習にどのくらい時間がかかるか	15分以内 30分以内 45分以内 1時間以内 1時間以上	3.3 27.5 27.5 28.5 11.2	21.2 51.5 15.1 7.1 0.6	5.0 30.0 30.0 22.1 12.1	28.3 42.5 13.8 8.8 2.9
英語の予習をしているか	いつもする 時々しない 全然しない	81.0 19.0 0	28.8 64.1 7.1	65.9 33.3 0.8	16.3 75.4 8.3
予習にどの位時間がかかるか	30分以内 45分以内 1時間以内 1時間30分以内 2時間以内	21.8 30.3 32.2 13.1 2.6	65.0 21.6 6.3 0 0	14.6 32.5 30.4 17.5 4.2	62.1 19.2 9.6 0.4 0.4

暗誦に対する負担は、教師が思う程大変なものではなく(興味関心調査<資料 No. 1>参照されたい。)家庭で英語を聞き話す等という事は、普通の生徒にはあまりない事でもあり、教材を全部暗誦するところまで指導する事は必要であろう。

(4) Written test を 1 年の初めから筆記体で指導する。

文字指導は、スタートが肝心であるが、本校では、従来から、時間的ロスという観点からも、1 年の初めから筆記体で書かせており、それに伴う問題点もない。また written test を毎時行なう事は、oral drill だけでは生徒の学習は不確実なものであり、最初から writing を指導することにより、自ら体得させようというわけである。そして毎日の学習がどのように積み重ねられているかを見るのである。

(5) Oral introduction では、new words, new structures を重点的に導入する。

New words や new structures は、全て英語の文脈を通して導入する。既習の構文・語彙を使い、生徒なら誰でも知っている場面を考えに入れた‘defining sentences’を使って、新項目を導入するわけであるが、これは、aural comprehension の力を養成することも同時にねらっている。

(6) 復習中心であること。

予習は特に要求しないが、生徒が積極的に予習をしてくることを妨げるものではなく、英語学習の基本的な事として、復習が要求されている。この点辞書指導とも、関連して、やや誤解されている傾向がある。

II. 指導の実際

A. Reading の指導について

1. Reading の前の指導

Reading にはいくつかの種類と段階があり、Friesによれば、第1段階の reading は、口頭練習を支え、これを補強するものであるという。第2段階は、第1段階の reading を master したものが行ない、そして最終段階として黙読する事が許される。(『英語教授の基礎』より)いまここで問題になるのは、第1段階、つまり、我が国では、中学校の場合に当るわけであるが、reading の指導を効果的に、能率的に行なう前提条件として、reading の教材の中に出でてくる new words や new structures は oral drill を通して音声面を master しておくことが必要であるということである。従って中1から中3まで、hearing も speaking も同等に調和のとれたもので行なわれるべきであり、第1段階の reading は、英

語学習の最大ポイントである。暗誦強化のためのものなのである。つまり 1 時間の授業の流れの中では、1) new materials の導入から始まる事になる。即ち、new words や new structures は、defining sentences を 2, 3 度聞かせて、文全体の意味を確かめ、(場合によっては日本語の意味をいわせることも必要である) 板書を通して目からも確認させたところで、導入項目の mim-mem をさせる。2) mim-mem は、暗誦強化のための technique として有効なものであり、次のようにして行なう。a) Full-choral single repetitions—教師がモデルをいって、1 回だけ chorus でいわせる。教師のモデル、生徒の発音、全て normal speed で行なう。b) Full-choral double repetitions—教師のモデルに従って 2 回発音させる。この段階では、語句についてはかなりいえるようになってきているが、文についてはまだまだである。c) Half-choral double repetitions—クラスを左右に分け、double repetitions を 2, 3 回くり返しわせる。d) 最後に全体で通してもう一度いわせる。このように繰り返し練習すると、1 人 15 回位は発音した事になる。ここで注意することは、教師は絶えず生徒の発音、口の動きに注意をはらい、誤りを訂正してやらなければならない。教師は sharp な耳を持ち、あたかもオーケストラの指揮者のように生徒を指導しなければならない。そして全体がそろっていえるように指導することであり、全体の力でうまくいえない生徒もひっぱって行くようにするわけである。全体の指導を通じて、個人の指導もするという考え方、つまり、choral work を通して個人をも指導するという考え方である。

学年が進むにつれ、導入内容も複雑化してくるが、特に structural items については、理解に必要とあれば日本語や、文法用語等を使い正確な意味を解らせた上で mim-mem に入った方がよい。ただ注意することは、あまりにも説明過剰になったのでは、返って蛇足取らずになる恐れがあるので、適確に説明用語は与えなければならない。

3) Mim-mem が終わったら、意味がわかっているかどうか check of understanding を行なう。英問英答により行なうが、ただ単に yes, no の答えを要求するだけでは、意味確認の check としては弱いので、時折、special question や alternative question、実物、絵を用いたり、日本語による check も行なう必要がある。

2. Reading 指導の実際

新項目の導入が終わり意味の理解が出来て mim-mem 練習がすんだら、初めて教科書を開いて、本時の教材全体の reading に入る。Reading には choral reading と

individual reading とがあるが、oversize class にあっては、クラス全体の練習量を増し、個人個人の reading level を高めるためには、choral reading を採用せざるを得ないのである。 (The common practice of having each student read aloud a sentence or two to the class seems inefficient. Choral reading allows everyone to practice every sentence—Lado, *Language Teaching* p. 137).

Choral reading は、2, 3 度読んで止めるのではなく、one sentence ずつ mim-mem の full-choral single repetition の要領で読む。 Intonation, stress に注意を払いながら、はっきりと大きな声で、早く読める程度まで練習する。最初はゆっくり、長文の場合は文尾から sense-group 毎に区切って、徐々に build-up させて行き、normal speed で読むように指導する。大体、一文につき 4 回から 10 回程度読めばよい。入門期から中 2 の中頃までは、読む回数も多いが、上級学年になるに従って、全ての文について読まなくともすむようになってくる。一般に 4, 5 回くらい読んだ頃からなめらかに読めるようになってくる。ただ chorus reading では、空よみの危険があり、意味を考えながら読むという事を、つまり直読直解の感じを擱ませることが必要である。

このような練習を読み重ねてくると、長文が出てきても、全体がそろわない等という事はなく、chorus がきれいに揃った時は、harmony を形成し、他の教室に迷惑となるようなことはない。生徒がそろって読めていれば、個人としてもかなり読めるようになってきているわけだが、この指導法を通してわかったことは、既に述べたように choral work を通して個人の指導も出来るという事であった。人によっては、生徒の読む speed がかなり早いのではないかという意見もある。しかし、あまり speed が遅いのでは、練習量は増えないし、また効果もない。Speed があれば、自然と声は高くなり、rhythm, intonation の維持も出来るわけである。しかしあまり速くいう必要は全くないので、やはり normal speed を維持させるように留意することである。Reading をしている時は、声を出し易いように姿勢に注意を払うように普段から生徒を指導しておくようにしたい。机間巡視の際も、声をやたらに張り上げるもの（特に低学年に多い）、自分だけ先走って読んでいるもの等、細かく指導したい。そのためには、教師は教材を良く頭に入れて置くことが必要である。

このようにしてその日の教材の reading を終えたらば chorus で通して 2~3 回読む。今度は、文と文、paragraph と paragraph 等の関係をはっきりさせるように

指導する。Sequence signals (連続記号) にも注意し、teaching points を質問しながら、生徒から答えを引き出すようにする。また、場合によっては特に劣る生徒には、意味をはっきりさせるために、日本語で教えてやることも必要である。日本語で意味を教えてしまう事は、Oral Approach のような授業では、忌避する傾向があるのでないかと考えられるが、直読直解が出来ることは、最終目標であって、生徒が理解するのに有効な手段ならば、取り入れて行くべきである。そして最後に数名の生徒を指名して、一文ずつ読ませ、個人も読めるかどうか確かめてみるわけである。

この reading にかける時間は、50 分の普通授業の時は、7~8 分は必要であり、45 分授業の時でも、6~7 分はかけるのが良いと思う。さもないと、次の時間に行なう review の pattern-practice がうまくいかないことになる。また高校での reading 指導にもつながるものであるだけに、重要な指導だと思う。

3. Reading の後の指導

a. Check of understanding

Reading の指導が終ったら本時の教材全体の文脈を十分理解しているかを check する。生徒は教科書を閉じて、Q&A の要領で答えて行く。答えは全て chorus で行ない、個人に答えさせることは原則として行なわない。それはここでは drill が目的ではなく、内容理解に重点が置かれているからである。答え方は、先ず short answer を要求し、次に full answer をいわせる。質問の要領は、yes, no で答えられるものから wh-question へと進む。生徒の中には、答えが不完全なものがいるが、内容理解という点で正しければ良いこととする。また生徒から答えの引き出し方の方法として質問をとばして、次の質問を行ない再び元の質問を繰り返して、答えをいわせると、答えがスムーズにいえる事がある。

b. Consolidation

以上で reading 指導を終るわけだが、授業を通して、弱いと思われる所をもっと補強しておきたい。そこで英語学習では、暗誦が最大ポイントであるので、consolidation では、暗誦強化のための指導を実施した。はじめに教師がその日の教材を一文ずつ読み、生徒があとから発音するという single repetition の方法で行なう、勿論この練習の時は、教科書は閉じられている。次に 1 文につき 2 回ずついわせる double repetitions を行ない、最後は先生が指 3 本を出して、1 文を 3 回ずつ発音するように指示し、本時の教材の最後までいわせる。つまり triple repetitions である。

この方法は暗誦強化策として有効なもので、生徒の家

庭での暗誦に要する時間は、徐々に短縮され、暗誦が習慣化したようである。Consolidation という僅かの時間であるが、この凡そ 3 分足らずの時間の枠の中で如何に多くの事が出来るかという事がわかった。

B. Review の指導について

今まで述べてきた指導は、英語の学習指導の 3 本の柱のうち、わからせる指導、暗誦させる指導の部分をのべてきたが、応用練習の指導について記しておきたい。

前時の教材は全て暗誦し、書けるようになってくることが宿題として課せられており、授業を滑らかに進めて行く前提条件となっている。

a. Choral reading

前時の学習を思い出させ、次の pattern-practice の作業にそなえる。Speedy に本文を見ながら 2 回程読めば十分である。この時の読み方が、あまりそろって発音されていない場合は、前時の reading 指導に不徹底なところがあったものと思われるが、生徒の暗誦力がついてくると多少の不徹底さはそれによってカバーされる。

b. Pattern-practice

Choral reading が終ると、生徒は本を閉じて両手を後へ廻し、これから始まる応用練習にそなえて、姿勢をとのえる。これは、concentration と participation の面で非常に効果的であった。この指導は、生徒に徹底し、pattern-practice の時は自然と姿勢が出来ているようになり、習慣化した。

(1) Variation

基本文型に対して最少限の cue を与えただけで、生徒に同じ文型の別の文を作り出させるものであるが、構造上の gap はなるべく少なくして、練習をさせる必要がある。次にあげるのは関係代名詞の drill に使用したものであるが、このような練習は、なかなかむずかしい。

例：関係代名詞を使って 1 つの文にしなさい。

A woman discovered radium. Wasn't Marie Curie the woman?

→ Wasn't Marie Curie the woman who discovered radium?

Variation の練習は、教師が cue を出して個人（または chorus で）にいわせるわけだが、cue の与え方にはひと工夫する余地があり、大体一呼吸位の間をとって指名等を行なった方が生徒の方でもやりやすい。また生徒の response が正しければ、それを全体でくり返していく。先生がいい直しをしてからいわせる事は避けた方がよいと思う。なるべく生徒の答えを生かしてやりたい。多少発音上問題点はあったとしても encourage してやる方が効果は大きい。

(2) Selection

この練習は、特定の意味、又は場合を表わす英語を既習の英語の全領域から選んで発表することである。Situation は固定しており、その枠内で問答が行なわれる。Selection には、regular type のものと、controlled conversation type のものとがあるが、上級学年では主に controlled conversation type のものが中心である。Chorus を C、個人を I として、その練習方法を示せば、C-I-I-C という順序になり、45 分授業の時等は、全て chorus で行なう時もあり、また chorus を一部だけ使って行なう場合もある。私の実践では、C-I-I-C の型に十分なれた中 3 の 1 学期から、question の部分は chorus だけにし、答えをすぐに個人にいわせるようにしたが、授業全体がしまり、能率も上ってきた。高学年になると selection が多くなってくるが、variation と比較して、Selection の方が smooth に drill が流れて行く現象が見られた。

(3) Written test

Review の最後のしめくくりとして 5 分間で処理するテストである。これは Oral Approach のねらいである thorough learning の度合いを見る目的を持っているがテスト内容は、pattern practice で練習したものを含めて、前時の教材から出題する。その出題形式は種々な type のものが考えられるが、短時間で書かせるために問題の指示などが曖昧になったりする恐れもあり、日本語をいって英文を書かせる問題を主にして行なった。書きかえ問題のような生徒のあまり慣れていないものについては、1 課終わる毎に、work book 等を使用し、集中的に練習するようにした方が良い。

Review は 10 分～20 分で終了するようにしないと後の指導に影響を与え、その結果、尻切れとんぼの授業になる恐れがあるので注意しないといけない。

C. その他の指導

1. 文字指導と家庭学習（省略）

2. 高校での学習にそなえた移行措置

高校と中学との教え方には、根本的に異なるものがあるわけではないが、一般に高校では予習に、中学校では復習にそれぞれ重点を置くことになっているようだ。この Oral Approach では、中学校段階では復習中心となっているが、高校での学習を考慮に入れ、教科書以外の教材から抜粋し、それをプリントしたものを与え、辞書を使用し予習を前提とした授業を実施した。教科書以外の教材を使うという意味は、最近の教科書には、必ず語句の意味は説明してあり、敢えて他のテキストから教材を選んだわけである。当初の予定では、中 3 の第 1 学期

の中頃から実施したかったが、結局実施出来ず、第2学期と第3学期を通じ、合計3回程度しか行なえなかった。これは教科書の進度の問題も気になっていたためと思うが、やはり辞書指導という立場からも今少し早目に、回数も多く実施すべきではなかつたかと思う。

III. 指導上の問題点と反省点

どんな指導法といえども完全無欠なものというものはない。それぞれの場に合わせて、principleは尊重しながら工夫をこらして行くのが賢明な行き方ではないかと思う。

さてこの中学校の実践を通して、指導上気のついた点をいくつかとり上げてみたい。

(1) Oral introduction の方法について

Oral introduction は、defining sentences を通して行なわれるが、時にはこの導入が良く理解出来ない生徒が出てくる。Check of understanding の質問に対して、意味がはっきりしなくとも、yes, no の答えには答えられる。私が中2の1学期末に生徒にアンケート調査を行なったが、それによると、大部分の生徒は（およそ70%）理解が出来るが、他の生徒は時折わからないことがあると答えている。

この問題の対策としては、生徒の反応を見つつ、必要とあれば日本語を使用し意味を適確に生徒につかませる事が必要である。日本語を使用するといつても、grammar translation になってはならない。文法の規則も理解の助けとなるならば積極的に使用してよいと思うが、しかしねらいはあくまで英語でいった事を直解させることであって、日本語の訳ばかり与えていては、imageを二重にする恐れがある。説明過剰になってはいけないと思う。それよりも英文の構造分析をしっかりと教え込むことを忘れない事である。

(2) 文法事項の指導

従来の英語学習では、文法中心の教え方が多く、文法の規則を教える事が英語を教えた事というような錯覚さえあった。文法は英文を正しく運用出来るためのものであって、そのための学習は、高校段階で系統的に学習することになっているが、中学校でも、各課の終りとか、数課終ったところまでまとめるとかの方法を取った方がよい。

(3) Story 教材をどのように教えるか。

この問題は、中学校高学年から高校にかけての移行措置と関連するが、この実践では特にそのための指導法を変えた事はなく、同様な教え方を行なつた。しかし、将来の高校での readers の学習とも関係して、予習を前提

とした高校での授業形態を多少とり入れ paragraph 単位の読み方を教えた方が良いように思えた。

(4) 語彙力について

毎日 written test を課しているが、このことは、生徒の英語学習に対する考えが、文章を暗誦すること一辺倒になって、単語に対する注意が不足する傾向がある。語彙力を増加させるために、単語のテストを実施することも是非必要である。

(5) 中学校の学習指導がやや型にはまりすぎてはいなかったか。

この授業形態は、review をはじめとして、それぞれの学習指導の時間と手順は決っており、このことはoversize class を教えて行くには大変都合が良く、また効果的な方法であると思う。しかし全ての教室が理想的なものではないから、その実状にあったように、枠の中で臨機応変の指導法を考えなくてはならないと考える。

6) Pattern-practice について

Pattern-practice は drill の方法としては、練習量を確保出来るという点で、oversize class では有効な方法である。しかし pattern-practice は万能ではなく、これを行なつたら全ての英語学習が済んだというように考えてはまずい。その限界を心得て行なつてこそ効果が出るのではないかだろうか。

第二部 高等学校の実践

—Readers の指導を中心にして—

1. 授業形態

Fries によれば、Oral Approach は method ではなく、目的達成のための方法であって、結果的に有効なら、あらゆる方法をとり入れて行く事になっている。

高等学校では教科の区分が英語 A, B, 文法・作文というように分れているが、① Spoken language is primary. ② Language is a system. ③ Language is a set of habits. ④ Language is a means of communication という Oral Approach の principle に従って、readers や grammar & composition を具体的にどう教えていったらよいのだろうか。Reading ability を延ばすには readers の指導だけでよいのだろうか。Extensive reading や rapid reading の力を併せてつけて行く必要もあるのではないか、という事が問題になる。

Oral Approach では、日本の中学校の段階を 1st stage として、Fries は ‘On the Oral Approach’ の中で述べており、その学習目標が教材要綱で示されている。しかし 2nd stage、つまり高等学校段階での教材要

綱はない。従って中学校の場合と異なり、高校で Oral Approach に基づいた授業をやるためににはどのような text を使用するかが問題となる。現行の教科書にはそのような主旨で編纂されているものではなく、高校の教材は、recognition の教材 (readers) と、production の教材 (grammar & composition) が別々になっている。そして教材は、急速に複雑化しており、当然指導手順は中学校での方法よりも、もっと簡単なものにする必要があるだろう。

Readers の教材は、中学校の場合は、structures 中心に教えてきたけれども、高校ではその基本は全く同じであるが、paragraph を単位として教えて行く事に重点を置くようにする。そして extensive reading, rapid reading の力を一方ではつけて行く事も併せて考えて行かなければならない。

さて、高校の段階になっても言語学習の step そのものは変わらない。言語学習の 5 段階 (Recognition; Imitation, Repetition, Variation, Selection—Twaddell) のうち、readers の方は、主に selection exercises を中心に、grammar & composition は、variation 中心に drill を行なうようにして行くわけである。1 時間の授業の流れは次のようなものである。

Teaching procedure for English B

(A) Review

1. Choral reading
2. Review work (Selection) through controlled conversation
3. Written test, if necessary

(B) Presentation of the new material

1. Choral reading of one paragraph after the teacher
2. Individual reading of the paragraph to be followed by discussion of pronunciation points, especially those of patterns
3. Discussion of important structures and idioms of the above.
4. Choral reading of the paragraph after the teacher
5. The paragraphs following the above will be treated likewise

(C) Consolidation, if necessary

の選択が現状ではなかなか大変な事であるが、この実践では、旺文社版の *My English Readers* を採択して使用した。Grammar の教科書も同じ出版社のものにした。週当たりの時間数は、readers 3 時間、grammar 2 時間、速読指導 1 時間という割合で実施した。なお学級数は 5 クラスで、特別なクラス編成は行なっていない。ただし、高 3 では、文科系、理科系の進路別に編成変えを行なう。以下 readers の指導手順に従って述べて行きたい。

(A) Review

これは前時の教材の review work であるが、高校での review は、高校での学習が予習重点であるので、中学校の場合とは前提が異なる。中学校では原則として暗誦して書けるようになってくることになっているが、高校では教材によっては、recognition に止めておくものと、production にまでもってゆくもの等があるので、全文を暗誦することは要求せず、すらすら読めるようになってくるという程度に止める。そして controlled conversation の drill をしながら、生徒の答えを引き出すようにもって行くわけである。しかし全文を暗誦することは要求していないわけだが、中学校時代の学習習慣から前時の教材を全部暗誦してくる傾向があった。成績上位グループのものにとっては余り問題ではないが、下位グループにとっては、教材の分量と併せ、時間が予習と関連し長くかかっていたようだ。

1. Choral reading

前時の教材を思い出し、次の pattern-practice の作業にそなえるわけであるが、原則として 1 回で十分である。この reading が余り smooth に流れていなければ、生徒の復習に手ぬかりがあったものと思われる。

2. Controlled conversation

中学校の review work の中に既に行なってきているが、指導上の注意として、question を言う時には、普通 2 回繰り返し、よく生徒に聞かせることである。生徒は chorus でそれを繰り返し、次に個人が答えるわけである。まず short answer を要求することは、問い合わせの構造、特に修飾構造をはっきりと正確に理解しているかどうか、明確に check 出来るばかりでなく、full answer を要求することによって、それらの構造を正確に発表出来るかという事も check する事が出来る。質問の出し方は、原則として general question を先に、次に special question にもって行くが、場合によっては、いきなり wh-question をいわせることもある。Question の長さと数の問題は、あまり文が長いと speaking に支障を来たすので、高 1 では 13~14 syllables、高 2 では 15~16 syllables くらいが一つの文の長さとして適當ではないだ

II. Readers 指導の実際

A. 指導の手順

Oral Approach の指導を高校で行なうためには教科書

ろうか、あまりに長い文は、なるべく代名詞に置き換えるとかして簡単にするようにした方がよい。従って前時の教材全部を drill するのではなく、usage として大切であるとか、内容的に重要な部分であるとかいう見方から、教材の順を追って drill をしていくわけである。質問の数は、学年によって多少の変動はあるが、10~13くらいのところで押えた方が良い。私の実践では、高1や高2の初めの頃までは、だいぶ長い文をいわせたが、中学校からの積み上げが物をいってか、かなりこなしていたようだ。Review work は大切なものであるが、あまり時間をとりすぎると、肝心の新教材の導入が不十分になり、尻切れとんぼの授業になりかねない。従って review 全体で 20 分以内、高等学校 3 年くらいになると 15 分くらいが適当である。

中学校の場合と同様に、全員がそろってはっきりといえることが目標であるが、教材の問題もあり、あまりきびしく行なう事は出来ない点がある。また個人の生徒に指名する時に、あまり下位群の生徒にこだわりすぎると、全体にマイナスとなる事もあるので注意したい。Review work は、controlled conversation が主であるが、時には、variation の drill を加えてよいと思う。

3. Written test

毎時間実施することを原則としているが、出題は前時の教材から出し、時には応用問題もあり得るが、中学校の場合と同様に、日本語を与えて英語に直させる練習を多く行なった。出題数は平均して 2 題くらいが適当である。

(B) Presentation of the new materials

中学校では、生徒が全く知らないものとして導入が行なわれたが、高校では、予習を前提とした授業が行なわれる所以導入方法も当然異なってくる。中学校の場合は、新しい語彙や構造だけをさしている。高校では基本的には変わらないが、content も考えに入れていかねばならない。以下順を追って説明していく。

1. Choral reading of one paragraph after the teacher

高校では、paragraph 単位で授業を進めて行くが、まず先生のあとについて one paragraph の choral reading を行なう。この時何が書いてあるか直読直解のつもりで読む。Reading の仕方は、はじめ 1 文ずつ何度も繰り返しながらその paragraph の終りまで読む。発音上問題点のあるところは何度かくり返し smooth になるところまでもって行く。この reading の回数は、上級学年に行くに従って減ってくる。発音しにくいところを数度くり返す程度であとは 1 文につき 1 回くらいの割合で読み、もう一度 paragraph 全体を通して読む程度で十分である。

2. Individual reading of the paragraph to be followed by discussion of pronunciation points, especially those of covering patterns

次に個人読みに入るが、1人の生徒にあてて、one paragraph を通して、個々の発音、 juncture など注意しながら 1 度読ませる。45 分授業の時はこれを省略する。次に one sentence ずつ individual reading に入る。

3. Discussion of important structures and idioms of the above

1 文ずつ individual reading を行ないながら、その文の重要な構文とか、idioms の意味、sequence signals のもつ意味等を生徒から答えを引き出す方法で行なう。この場合、質問方法に technique を要するが、先ずわからせることに重点を置いて指導する。主語、動詞等あるいは目的語はどれかといった構造分析を行なう。いきなり語の品詞を聞いても構造が決らなければ品詞は解らない。構造と意味内容を結びつけて解らせるようにすることである。全てを訳すのではなく、どういう意味かを説明させるという方法をとる。訳す場合は直訳をさせる事が大切である。また必要に応じて paraphrase させる事をやってみる。Translation については、口と耳の訓練だけでは、motivation も十分でなくなってくるので、解釈を併用することは、口頭練習の効果にも影響があると思う。

4. Choral reading of the paragraph after the teacher

以上で paragraph についての導入が終る。今一度 chorus reading を行なう。読みながら意味を考えさせるように読ませ、問題点があつたら質問させる。

5. The paragraphs following the above will be treated likewise.

(次の paragraph へ進んで行く。)

Presentation については、35 分くらいは時間をかけた方がよいと思う。毎学年 3 学期末に行なった生徒のアンケートでは、細かいところが解らないという回答があり、教材の未消化のまま次の review に入った場合が時折あったためであろう。やはり語学は先をあせってはならないと思う。教科書が全部終わらなくとも良いと考えた方がよい。従って 1 時間に処理出来る長さは、1 頁の 2/3 くらい、およそ 2 paragraphs が適当である。

B. 復習と予習

中学校では、復習を中心として行ない、予習はあまり行なわなかった。このことは、全体としては高校段階での予習指導、辞書指導にややスタートの遅れを感じさせた。高校の教材は、中学校におけるものと異なり、その進度

は、急速度であり、生徒はそれに追いついて行くことはかなり抵抗を感じる。生徒のアンケートを見ると〈資料 No. 1〉、英語の予習に高校 1 年で 45 分以上で終るもの 30%，1 時間が 32.2% かかっている。その反面、1 時間に進む教材の分量は、中学に比べて多く、review に対して、高 1 で 30 分以内が 27.5%，45 分—27.5%，1 時間—28.5% となっており、個人個人によっても差がかなりあるようである。高 2 の場合も高 1 と比較して大差はない。ただ高 2 は予習の時間が幾分か長くなっている傾向がある。

ここで一つ問題点がある。中学の時に使った教科書 (*New Approach to English*) とちがって、教科書の英語が暗誦しにくい英語があることである。生徒のアンケートでは、課によってやりやすいところと、そうでないところがあって勉強しにくいといっている。

しかし、そうはいってもこの辺の問題は、教師が暗誦すべき項目を今少し指示すべきだったのかも知れない。予習と復習のかね合いは生徒にはなかなかむずかしい。その結果、中学校の段階では、余裕のあった英語学習は、あまりゆとりのあるものではなく、毎日の勉強が英語だけということになっているようである。ただ高 2 になると、英語の復習を時々やらないものが 42.5% と増えており、全体として、復習に時間が大変多くかかるという傾向はなくなってきた。以下生徒が学習上の問題点として出したものをいくつか記しておきたい。

〔高 1 の時〕 ○うまくやくせない。○単語力がない。
○予習に慣れてきた。○前にやったことを忘れる。○暗誦に時間がかかる。

〔高 2 の時〕 ○予習に時間がかかる。○進度が早い；範囲が長い。○予習には余り時間がかかるので復習にまわした。○英文解釈がわからない。等々である。

この両者は混同して使われることもある。しかし高校段階では、速読といつても、多読的な色彩が強く、精読よりもや早く読めるという程度のものと考えた方がよいと思う。以下私なりに readers の授業に附隨して、週 1 時間行なってきた速読指導について述べておきたい。

2. 教材

速読指導については、既にいろいろと実践研究が発表されているが、速読指導では text の問題が重要であり、個人によっても、text の難易度の点からも教材の選択を考えなくてはならない。

教材選択の条件として、既習の言語材料で書かれているもの、単語の意味が類推で判断出来るもので、現在の能力より 1 段か 2 段下の教材、つまり高 1 の場合には、中学校 2、3 年の教材から選ぶのがよい。このような考えに基づいて選択した教材は下記のようなものである。

1. Don Quixote (Oxford English Picture Readers)
2. Indian Stories (Kairyudo Easiest Series)
3. The Three Giants (Kairyudo Easiest Series)
4. Elementary Stories for Reproduction (Oxford Univ. Press)
5. Elementary Comprehension Pieces (Oxford Univ. Press)
6. Shakespeare 物語、英語速読直解シリーズ（竹村出版）
7. Eichosha Rapid Reading Series (英潮社)

3. 指導の手順と要点

(クラスの一斉授業の形で行なった。教材はその時間にはじめて読ませるという意味で、text は全て学校の職員室に保管し、授業の前に生徒に手渡す形をとった。

この指導は、高 1 の 1 学期からスタートしたわけであるが、1 つの story が 200 語から 300 語前後で出来ている教材をおよそ 1 分間 100 語の目標で読ませるという形で行なった。制限時間が近くなるに従って、教師は、10 秒毎に時刻を板書し、読み終えた生徒は、その終了時刻を既に与えられてある記録用紙（資料 No. 2）に記入しておく。制限時間内に読み終えなかったものは×印を所定の欄に記入する。なお 1 分間 100 語という数字は、何度も生徒に読ませて決めたものであるが、最初は 1 分間 65~70 語くらいから始めた。さて、読み終えた時点で reading time を記入したら、予めくばられてあった test 問題を行なう。Test の出題形式は、multiple choice か true or false の形をとったり、hearing test の形をとった。問題数は 5~10 題とした。Test が終ったらお互いに test 用紙を交換しておく。次に本時の教材を 1 回通して全体で読む。時間があれば個人読みもさせる。Choral

III. その他の指導

A. Rapid Reading

1. Rapid reading のねらい

Reading の指導には精読、多読、速読といった指導があるが、そのうち readers が受持っているのは、もっぱら精読の部分である。そこで日本語の訳が出来たとか、そこに書いてあるものが理解出来たとかいうようなことではなく、もっと積極的に読むことにより、知識、情報を吸収し何かの用に足そうという目的をもった reading の指導を考えたい。特に近年そういう要求はかなり増大している事は、英語教育の立場から見逃す事は出来ない。精読力は速読力の基礎となるものであるが、速読力にはならない。また速読と多読はうらはらの関係にあり

〈資料 No.2〉 速読用テスト記録用紙（高校のみで使用）

RAPID READING PROGRESS CHART

CL. _____ NO. _____ NAME _____

NO DATE	TITLE 教材名	WORDS 語 数	TIME LIMIT	TIME REQUIRED	W.P.M. 1 分間語数	COMPREHENSION 理 解 度
1						
2						
3						
4						
5						
11						
12						

reading をしながら正確な意味内容をとらせるように質問をしながら読む。内容が解ったところで test の解答を合わせる。点数は各自記録しておく。大体 50 分の授業では、その教材の長さにもよるが、20 分で 1 教材は終了するので、2 教材実施が可能である。

以上は、200~300 語程度から成る教材についてであるが、1 冊まとまった物を読んで行く場合にどうするかという問題がある。そこで手順に少し変更を加え、paragraph 単位で読むという事を取り入れた。1 時間の procedure は次のようなものである。

(1) Test 問題配布

問題用紙は机の上にあせておく。大体 1 時間に 3 paragraphs くらい進むのでその分量にあった問題を作っておくことが必要である。

(2) 本文の silent reading

Paragraph 単位で読む。制限時間は paragraph の語数によって決める。

(3) 制限時間が近くなったら、10 秒毎に時刻を板書する。読み終えた生徒は、黒板を見て記録用紙に記入する。

(4) Test

Test 時間は特に決めないが、生徒全体が終わった頃を見計らって止めさせる。

(5) 問題用紙を交換する。

(6) Chorus reading (1 回)

(7) Individual reading

個人に当てて、理解が不徹底な点はないか、sequence signals や他の point を check しながら行なう。

(8) 解答を合わせる。

Paragraph 全体の意味内容の把握がすんだら答え合

わせをし、採点の上、各自の記録用紙 〈資料 No. 3〉 得点欄に記入する。

(9) 次の paragraph に移る。

大体以上のような手順で行ない、50 分の授業では、教材にもよるが、3 paragraphs (竹村出版英語速読直解シリーズを使用した場合) が平均というところである。

Rapid reading においては、語彙力が大切であるが、未知の単語が出てきても類推によって意味を判断出来るように指導することが必要である。従って語彙力を test する問題も含める事がよいと思う。

テスト問題は、記憶力のテストに限定するのではなく、structure を理解しているかを調べる質問も考慮に入れなければならない。Memory だけの test ではなく、linguistic ability を test する問題であることが望ましい。テストの理解度は、70~80% くらいは欲しいが多くの生徒は一応出来ているようだ。英語の速読力をつけることは、日本語の文章を読むこととも関連しており、日本語の文章を読むことが速い生徒は、英語の場合でも同じ事がいえる。Rapid reading は silent reading で行なうが、そのため集中度はかなり高いものと思われ、ちょっとした騒音でも影響を受けて、速度が落ちるようだ。しかし生徒が本当にどこまで解って読んでいるかを調べる事はむずかしいが、速読の時間は、教材を生徒の好みに合ったものから選ぶせいもあってか、評判はなかなか良かった。

B. Grammar & Composition の指導

文法・作文の授業はどのように行なわれたかを述べたいが、頁数の関係もあり、teaching procedure だけを示しておきたい。

(A) Review

1. Choral reading
 2. Pattern-practice—Variation (Conversion)
 3. Written-test, if necessary
 4. Exercises
- (B) Presentation of the new material
1. Choral reading of the new material
 2. Individual reading of each sentence to be followed by discussion of teaching points
 3. Assignment of homework
 4. Consolidation

以上が授業形態であるが、pattern-practice は variation を中心に行なう。しかし教科書の中には、かなりむずかしい例文が入っており、pattern-practice には不向きのものがあって、教案作成が大変である。また文が複雑になって生徒の英語が smooth に流れないことがあり、review にかなり時間をとられ、肝心の new materials の導入が、時間不足となりがちであった。以下略

C. 受験指導（省略）

IV. 高校における指導のまとめ

1. 高校の指導が中学校の基礎の上にあることは当然の事だが、実際には大学入試という大きな問題は、どうしても強引な詰込み式授業を余儀なくさせてしまう。高校の英語教育は中学と大学の板ばさみの状態にあり、高校では、all round な力を持つことは不可能ではないかとさえ思われる。このような現状の中で従来にない授業方法をとることは、ひとつの賭にも似た気持であり、常にこれでいいのかという不安がつきまとった。

2. この実践では、中学校の教科書は Oral Approach の理論に基づいて作られたものであったが、高校ではそういう教科書はなく、指導上無理な点が出てくるのは止むを得ない。1頁に出てくる new words の数がやたらに多かったり、現在あまり使用しなくなっている英語があったり、日本人の英語教師には容易でない問題である。やはり現代英語で書かれた新しい教材を基に教科書を編集してもらいたいと思う。従ってこのような現状で、毎時間の教案作成を行なう際には、教材の取捨選択が必要でありまた教材の配列のまづきは、生徒の勉強方法にかなりの飛躍が要求されることになる。

3. 高校生の年令ともなると、生徒指導上からも意を用いなければならない。生活指導上問題があつたりすると、毎日の授業活動に影響を及ぼすことになり、毎時間の written test を長期間にわたって採点していると、生徒の日常生活が乱れているものは、答案面を通じて読みとることが出来る。従って授業以前の問題も十分考えな

ければならないということである。

4. Oral Approach の授業の批評の中に、生徒は1時間中緊張の連続であって、少し遊びの時間があつてもよいのではないかということがある。一理あることであるが実際の授業場面では、教師と生徒との written test 等を通じて出来た心の触れ合いがあり、緊張した中にもどこかゆとりはあるのである。要は授業の主役は生徒であって、その主役に十分活動させるために、なるべく多くの生徒が授業に参加し、授業に集中させるようするが脇役たる教師の務めである。生徒の participation と concentration のない授業は、授業として問題にならないと思う。

5. 英語の学習には review はつきものであるが、中学時代の復習の習慣化は、高校に入つても継続したが、別の見方をすれば、学習方法がマンネリ化して復習の仕方の粗雑なもの、ただ英語を覚えるだけという傾向があった。

私が実践してきたこの授業方法は、従来の高校英語教育の改善に少しでも役立たせようという試みであったが、他の全ての高校で直ちに実行出来るかというと、多少問題点が出ると思う。私は授業は型を作ることが必ず必要と考えるが、その型の中でそれぞれ現場に応じた処置をとって行けばよいと思う。

第三部 Test について

1. 中学校の Test

a. Written test

Written test の目的は 2 つある。① 生徒が暗誦し pattern-practice を通じて確立した英語を更に目と手を通して書くことにより一層確実なものとするよう補う動機づけにすること。② 更に毎時間の教材は完全学習を目指しているので、その達成度を測定し、今後の指導の評価資料とするということである。

(1) テストの内容は前時の教材及び pattern-practice で口頭練習したものから出題する。出題方法はいろいろな方法があるが、日本語を与えて英語の文を書かせる式のものが多かった。問題は各クラスほとんど同一問題であったが、問題がもれるという心配はあまりなく、むしろ互いに助け合うというような雰囲気が生まれ、下位の生徒が「A」をとった時などは、クラス全体で激励し、喜ぶといった様子が見られた。

(2) 採点方法は、誤り 0 を A, 1, 2, 3 の誤りを B, 3~4 の誤りを C, 5~6 の誤りを D, 7 以上を E という一応の目安を作り採点した。原則として次の時間まで

〈資料 No.3〉 Written Test の月別統計表

(単位: %)

中1 (昭和41年度)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
A	28.3	31.3	30.1	22.6		15.1	18.3	16.7	27.2	26.8	44.6	45.0
B	14.4	26.0	27.0	25.2		23.4	23.2	25.5	34.9	34.1	32.4	30.6
C	12.8	13.2	12.9	15.0	—	14.7	15.0	16.9	14.9	17.2	10.4	11.6
D	8.1	10.0	11.5	16.3		19.3	20.7	20.1	12.6	13.2	7.3	8.5
E	36.4	19.5	18.5	20.9		27.5	22.8	20.8	10.4	8.7	5.3	4.3
TEST回数	5	11	14	4	—	10	10	14	6	9	12	5

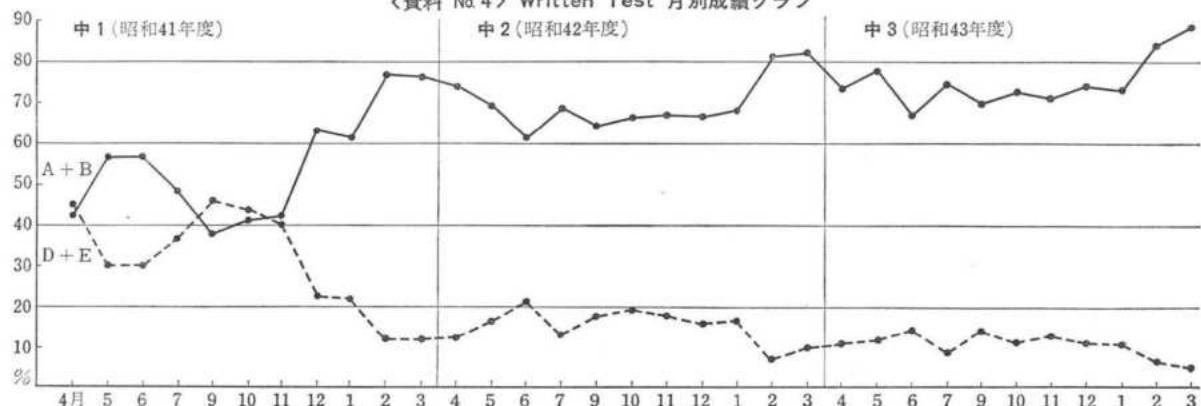
中2 (昭和42年度)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
A	37.4	37.7	28.0	33.0		30.3	28.1	32.2	24.0	31.4	45.8	47.6
B	36.5	31.0	33.3	36.3		33.6	37.4	34.9	42.5	37.0	35.3	33.9
C	13.1	13.7	18.1	17.4	—	18.0	14.6	15.1	17.4	15.4	11.7	8.6
D	8.6	9.4	10.1	9.1		11.6	11.0	9.5	9.4	0.8	4.5	4.7
E	4.4	8.2	9.8	4.2		6.5	8.9	8.3	6.7	6.4	2.7	5.2
TEST回数	10	12	16	4	—	10	13	11	5	7	11	3

中3 (昭和43年度)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
A	36.4	42.6	27.0	37.2		31.7	35.8	33.1	40.4	32.7	49.5	59.3
B	37.0	35.1	39.7	37.0		38.6	36.9	38.1	33.5	39.8	33.9	28.2
C	15.7	11.3	18.9	16.3	—	15.7	15.6	16.3	14.3	16.9	9.9	7.8
D	7.3	6.6	7.9	5.6		6.8	6.6	7.3	8.1	6.2	4.1	3.4
E	3.6	4.4	6.5	3.9		7.2	5.5	5.2	3.7	4.4	2.6	1.3
TEST回数	10	10	13	4	—	9	11	10	5	9	9	4

〈資料 No.4〉 Written Test 月別成績グラフ



には返却する事にした。

(3) 生徒に自分の学習目標を持たせるために毎日のテスト結果を記録用紙〈資料 No.3〉に記入させ、月末

には平均点を計算して提出させ、平常点とした。平常点は英語の成績評価のうち 30% を見た。

(4) 教科書本文と同じ問題には成績がよいが、一部

を変えたり、省略したりして出題すると、成績下位の中には教科書通りに書く傾向があった。これらの生徒に対しては、補習授業を行ない、理解の徹底をはかった。

(5) 生徒の冒す miss-spelling の原因は、writing の練習をしている過程で、まちがった spelling を練習していることがあり、ノートを時折点検してみる事が必要である。

(6) Written test の成績は、各学年とも成績が上の月と下る月がほぼ決っており、2月が最も上の月である。

(7) 中1の時の成績は、生徒も教師も慣れていないため、2度も A, B 線と D, E 線が入れ代るという現象が見られた。また中2の段階では、毎日の授業が暗中模索的なところがあり、生徒共々一喜一憂の連続であった。Pattern-practice には時間がかかり、E をとる生徒がそろそろ固定化の現象が見られた。中3になると、生徒も学習手順になれてきた事もあって、授業の流れも smooth になり、生徒にゆとりが出てきた。中2までの昏迷状態から脱し、軌道に乗っているという感じであり chorus reading の時には、harmony の状態を作り出し choral work が個人の指導もしているという事が感じられた。

(8) 学習効果の上の授業は、教師と生徒の息がぴたりとあった時にこそいえると思う。Oral Approach の授業は誰が行なつてもある到達点には達するはずである。問題は各場面に応じてどのように指導して行くかという事である。

c. その他のテスト

Written test だけでは、忘却度が大きく、それを補う意味で時折 review test が必要である。中間、期末といった考査も review test になるわけだが、出題方法が総合的な形式であるためか、思った程良い成績ではなかった。特に下位グループに対しての対策をどうするかが問題であった。Review test は一課の終り毎に行なうのが良いと思うが、実際は進度の関係もあり、採点の問題とも関連し実施した回数はあまり多くなかった。

II. 高等学校のテスト (Readers のテストを中心に)

(1) 高校でも中学校と同様に written test を実施したが、出題内容は前時の教材をもとに、controlled conversation を通して練習したものも含めて出題するたて前とした。問題型式は日本語をいって英文を書かせるものが大部分を占めたが、問題数は、2題くらいが適当であると思う。

(2) 採点方法は中学校の場合と同様に、ABCDE の5段階で採点し、次の時間までに返却する事にしたが、

生徒のテスト結果は、各自に渡してある記録用紙（中学校の場合と同様のもの）に記入させ、平常点として扱った。平常点は 30% として期末評点に入れた。

(3) 高1の場合、高校での学習が予習中心に移った事もあり、復習とのかねあいという点で問題点があった。その結果 written test にも影響が現れていると思う。高2になると生徒もどうやら高校での予習中心の学習方法に慣れをみせ始めたようであり、高1の時に見られたような極端なカーブの描き方はしていない。しかし D・E の%は中学時代に比べて、やや多く、その人数も固定化の現象が見られた。これら下位群の生徒にはノート点検、補習などの対策を打ったが、それだけでは解決し難い英語学習以前の問題があり、指導しなければならなかつた。しかし第3学期になると AB 線と DE 線の間は、中学校の場合と同じように開いてきた。生徒の学習態度もかなり真剣なものが見られ、高3になると大学受験の問題もからみ、今迄とは生徒の様子も違ってきた。Written test の回数は、高校3年間でおよそ 170 回であるが、高3になってからのカーブの描き方は高2に比べてやや AB 線は上昇の傾向が見られた。

(4) 本校では、高3になると、クラスはコース別（文科系、理科系）にわかれれるが、理科系に高2までの各組の上位者が集まる傾向がある。従って授業の面でも各組の差がはっきりと出てくる。上位者の多いクラスでの授業は、力強く、speedy に流れて行った。しかし文科系のクラスでも、次第にまとまりを示し出したが、これは、過去の積み上げがあったから出来たのではないかと思う。しかし何といっても授業効果を上げるためにには、全体の discipline が出来ていることが必要である。

(5) Written test 以外のテストについては、中学校の場合と同様に中間、期末に実施するものと、学校の入試対策として行なう模擬試験とがある。期末試験や、中間試験の平均点は、およそ 55~63 点くらいの所であった。模擬試験については、大学入試と同程度のものを行なうものであつて、特にいう事はない。その他 review test として単語のテストを時折行なつたが、やや回数が不足勝ちであった。

(6) 高3の1学期に1クラスを選び、昭和43年度に実施した全英連の標準学力診断テストの第3学年用（研究社発行）を使いテストを行なつたが、結果は次のようなものであった。

全国平均=35.2、都平均=37.3、本校平均=38.14

あとがき

わが国の外国語教育、特に英語教育の効率の悪さを説

〈資料 No. 5〉 Written Test の月別統計表

(単位: %)

高1 (昭和44年度)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
A	22.1	17.6	21.9	22.6		24.7	19.4	17.8	7.2	10.5	14.9	14.9
B	38.7	32.1	35.1	29.4		37.2	31.6	34.9	29.6	29.5	32.2	37.1
C	24.0	23.4	22.3	19.1	—	20.7	22.0	24.2	30.7	30.0	26.3	30.9
D	9.7	14.9	13.2	15.5		10.0	16.5	12.5	21.2	19.1	15.4	12.7
E	5.5	12.0	7.5	13.4		7.4	10.5	10.6	11.3	10.9	11.2	4.4
TEST回数	8	8	8	4	—	7	4	6	3	7	6	3

高2 (昭和45年度)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
A	21.1	23.5	21.8	23.4		31.1	16.7	16.1	13.7	16.9	24.7	24.7
B	35.1	38.3	32.6	34.0		28.2	35.5	34.5	34.3	36.2	39.2	45.1
C	26.5	20.0	25.7	23.2	—	19.2	24.7	28.5	31.3	25.3	21.5	19.4
D	9.4	9.3	11.0	8.6		8.6	10.7	12.0	11.8	10.5	7.9	7.3
E	7.9	8.9	8.9	10.8		12.9	12.4	8.9	8.9	11.1	6.7	3.5
TEST回数	7	5	9	3	—	6	5	7	6	6	6	4

高3 (昭和46年度)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
A	21.2	15.8	24.0	20.1		24.0	27.6	31.1	27.7			
B	42.2	44.8	35.8	43.8		42.7	36.2	39.8	42.7			
C	25.3	24.8	21.5	22.8	—	22.6	24.0	21.5	19.6	—	—	—
D	6.6	8.4	7.7	6.8		5.3	6.1	3.3	5.4			
E	4.7	6.2	11.0	6.5		5.4	6.1	4.3	4.6			
TEST回数	6	5	10	4	—	7	7	6	4	—	—	—

〈資料 No. 6〉 Written Test 月別成績グラフ



く議論は今でも後をたたない。このような状勢の中で、Oral Approach はいろいろな面で英語教育に影響を与えてきた。例えば pattern-practice の方法等は、全国どこ

の現場でも実践されたものの一つである。しかし私がこの実践を始めた6年前と今日では、Oral Approach そのものも変化してきているという事を伝えたい。当初 Oral

Approach に対する懸念や批判があった。それらは、現場にはすぐ適応出来ないというようなものであったが、事実一つの理想の型を追求した結果から出たのだろうと思う。しかしいくつかの不備な点は、徐々に改められ、少なくとも中学校の場合は、各現場に適応出来るように幅をもったものに改められてきており、従来の指導法のもつ良さも積極的に吸収して行くという大変 flexibility を持ったものになってきている。また Oral Approach の授業は、教師の個性が減却されているという意見もある。しかしある一つの教案に従って、その通りにやったとしても、同じ授業が誰にも出来るとは言えない。100人の教師がいれば、100通りのやり方が生まれるだろう。一定の枠はあっても、それぞれの現場に合わせて、指導上工夫がなされるのは当然であろう。私はこの6年間の授業を通して感じたことは、既に述べたように、授業はまず型を作ることだと思う。型という言葉は、現代では何か拘束されたものという意識が強い。しかし oversize class では、型から入るのが指導上大変効果的であると思う。そしてその中で工夫をして行くのである。

Oral Approach の実践報告は、中学校段階のものは多いが、高校段階のものはあまりない。従って私の実践は、

暗中摸索的な所が多く、試行錯誤の繰り返しであったかも知れない。私の実践研究の中には、rapid reading の指導がある。これは現代の変化の多い時代に生きる者にとっては当然考慮に入れなければならない事であるし、今後も積極的に取組んで行かねばならないもの一つだと考えている。しかし高校段階では、速読というよりも多読させるための能力をつけさせる事が大事であろう。英語の学習目標もやはり、本当に読めるようになるにはどうするかという事になるのではなかろうか。

以上 Oral Approach の授業、特に高校での実践はまだかけ出しのところであり、欠点は欠点として認め、今後改善の方向へ持っていかねばならないと思う。6年間の実践は、過ぎてしまえば短いとも思えるが、今少し何かの方法がとれなかったかという反省も出てくるが、指導法としてはやはりすぐれていると思う。我が国の英語教育の改善に少しでも役に立てば幸いである。

参考資料 山家保著『新しい英語教育』

山家保著『オーラル・アプローチシリーズ No.2.
No.3, No.4』

Robert Lado 著 : *Language Teaching*
ELEC Bulletin No.15 他

◆ 英語教育関係者必読の書！

<4月刊>

英語の測定と評価

Testing English as a Second Language

A5判 上製 ¥950

ジョージタウン大学教授 D. P. ハリス著
ELEC 研修部 次長 大友賢二 訳注

外国語としての英語教育は、言語学、心理学、教育工学などの関連諸科学と深く関り合って激動を続けていますが、その中にあって、英語教授法の理論の検証は勿論のこと学習者の能力・学力検査に関する知識はますます必要になってきています。TOEFL の project director の経験を持つ著者の豊かな経験と Robert Lado, Rebecca M. Valette, John B. Carroll, Alan Davies などのさまざまな言語テスト観とを見ごとに総合した英語教育関係者必読の書であります。

■ 内容

- 第1章 言語テストの目的と方法／
- 第2章 すぐれたテストの特性／
- 第3章 文法構造のテスト／第4章 聴取識別理解のテスト／第5章 語いのテスト／第6章 読解のテスト／
- 第7章 書くことのテスト／第8章 口頭発表力のテスト／第9章 テストの作成／第10章 テストの実施等。

英語教育協議会

東京都千代田区神田神保町3の8

主語と述語

NAKAJIMA, FUMIO
中島文雄

論理学では命題 (proposition) を主辞 (subject) と賓辭 (predicate) とにわけるが、学校文法でも平叙文を主語と述語とにわける。変形生成文法も、最初 Noam Chomsky¹⁾ は

$$\text{Sentence} \rightarrow \text{NP} + \text{VP}$$

$$\text{VP} \rightarrow \text{Verb} + \text{NP}$$

$$\text{Verb} \rightarrow \text{Aux} + \text{V}$$

$$\text{Aux} \rightarrow \text{C} (\text{M}) (\text{have+en}) (\text{be+ing})$$

としている。文を NP と VP にわけたところは、学校文法の Subject と Predicate に相当するが、Verb を Aux + V としたところは劃期的な分析である。たとえば

I have been reading the book (for two hours).
の VP は

[([Pres+have+en+be+ing] [read]) [the book]] と分析される。伝統文法でも構造言語学でも have been reading の分析は、have のあとで切るのか have been のあとで切るのか、極め手がなかったのである。

Aux を V から切り離した点はよいが、VP を have been reading と the book とにわけることが妥当であるかどうか。Chomsky の *Aspects*²⁾ はこの点を改めている。すなわち

$$\text{S} \rightarrow \text{NP} \wedge \text{Predicate-Phrase}$$

$$\text{Predicate-Phrase} \rightarrow \text{Aux} \wedge \text{VP} (\text{Place}) (\text{Time})$$

$$\text{VP} \rightarrow \left\{ \begin{array}{l} \text{Copula} \wedge \text{Predicate} \\ \quad \left\{ \begin{array}{l} (\text{NP}) (\text{Prep-Phrase}) (\text{Prep-Phrase}) \\ \quad \quad \quad | \\ \quad \quad \quad (\text{Manner}) \end{array} \right\} \\ \text{V} \left\{ \begin{array}{l} \text{S}' \\ \text{Predicate} \end{array} \right\} \end{array} \right\}$$

という規則を立てる。これによると Aux と [read the book] というわけ方になり、後者を VP としている。そこで以前の VP を今度は Predicate-Phrase とよんでいる。S を NP と Predicate-Phrase にわけることは学校文法と同じである。この規則は、しかしながら、後の学者にあまり用いられず、

(1) $\text{S} \rightarrow \text{NP} \text{ Aux } \text{VP}$

とすることが一般に行なわれている。ここでは S を 2 分法によらず 3 構成素に分析している点が問題になりうるが、この分析の方が実際の文の樹枝図をかくときなど便利である。私も本誌にのせた拙稿においては、この式を用いてきたが、再考を要すると思うようになった。

それは埋めこみ文を扱うとき、Aux はしばしば問題にならず、NP \wedge VP だけで足りることがあるからである。たとえば

I want you to come.

において want の目的である NP は S で、その S は NP \wedge VP (*you come*) で、これが (*for*) *you to come* に変形したと説明されるが、このときの come は原形であって Aux を必要としない。そこで私は S をただ NP VP と書き直す場合には、S₀ という記号を用い、

(2) $\text{S}_0 \rightarrow \text{NP } \text{VP}$

として (1) と区別してきた。要するに S₀ は Aux によって肉づけされ実際の文になる核をなすものであるから、これを文核 (sentence nucleus) とよぶことができる。

文核を一つの構成素とすると、(1) は

(3) $\text{S} \rightarrow \text{S}_0 \text{ Aux}$

と書き改められる。ここで思い出されるのは Charles Fillmore の格文法である。彼によると第1の規則は、

(4) $\text{S} \rightarrow \text{Modality} + \text{Proposition}$

となる。M(odality) なる構成素は negation, tense, mood, aspect のような文全体の modalities を含み、P(roposition) は M から離された “a tenseless set of relationships involving verbs and nouns (and embedded sentences, if there are any)”³⁾ である。この規則は (3) と共に多くの点多いが、私の考えでは (3) はまだ訂正を要するし、また (3) の S₀ と (4) の P とは同じではない。まず Aux から検討して行く。

Aux の書き直し規則は

3) “The Case for Case”, *Universals in Linguistic Theory*, ed. by Bach and Harms (1968), pp. 23, 24.

1) *Syntactic Structures* (1957), p. 111.

2) *Aspects of the Theory of Syntax* (1965), p. 106 f.

$\text{Aux} \rightarrow \text{Tns (M) } (\text{have+en}) \text{ (be+ing)}$

が普通であるが、これを

$\text{Aux} \rightarrow \text{Aux}_1 \text{ (Aux}_2)$

$\text{Aux}_1 \rightarrow \text{Tns (M)}$

$\text{Aux}_2 \rightarrow (\text{have+en}) \text{ (be+ing)}$

のように Aux_1 と Aux_2 とに別ける考え方もある。この別け方には意味論上の根拠もあるし、統語論上の根拠もある。意味論的には Aux_1 の Tense と Modal auxiliary は意識の様相の表現であり、 Aux_2 は動作の様相である。⁴⁾ 統語論上も、これから述べるように Aux_1 と Aux_2 とを区別した方が妥当である。そこで私は Aux_1 と Aux_2 とを区別する立場をとり、(3) の Aux は Aux_1 のみとし、 Aux_2 は VP の拡充的構成素と考えたい。そして Aux という名称を Aux_2 にかぎり、 Aux_1 は Mod(ality) とよぶことにする。すなわち

(5) $S \rightarrow S_0 \text{ Mod}$

(2) $S_0 \rightarrow \text{NP VP}$

(6) $\text{VP} \rightarrow (\text{Aux}) \text{ MV}$

そして Tense と Modal Auxiliary の表わす意識の様相とは別の次元に属するし、*would*, *should*, *might*, *could* などが *will*, *shall*, *may*, *can* の過去時制であるというのも正しくないので、従来の Tns (M) という書き方を改めて、

(7) $\text{Mod} \rightarrow \begin{cases} \text{Tns} \\ \text{M} \end{cases}$

したい。そして、Tns はさらに

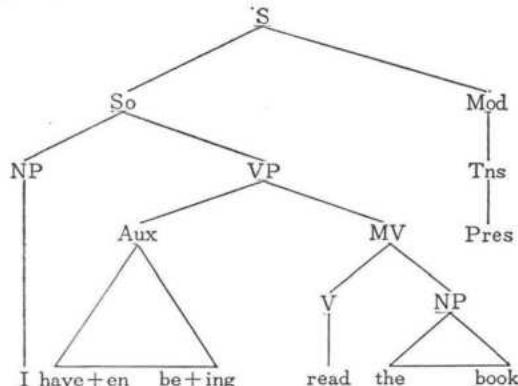
(8) $\text{Tns} \rightarrow \begin{cases} \text{Pres} \\ \text{Past} \end{cases}$

となるが M の方は直ちに Lexicon から法の助動詞を入れることになる。

こう考えると

I have been reading the book.

[1図]

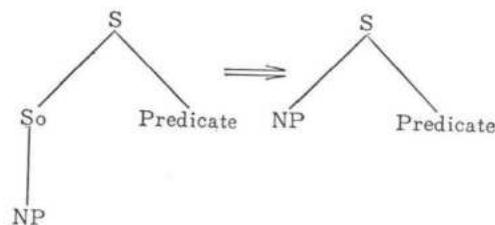


4) 指著「文法の原理」(1949) pp. 188—224.

なる文の構造は [1図] のようになる——

これが深層構造で、これが変形によって現実の文になる。Affix transformation で VP が have been reading the book となり、これが pres のあとに移されて現在形となる。この場合 VP が pres のあとに移されることによって、はじめて Predicate Phraseができる。これを述語変形 (Predicate transformation) とよぶこととする。 S_0 の VP がこの変形によって S_0 から出てしまうと、あとは NP だけになる。そこでこの NP が S_0 の直接支配から S の直接支配に移るという [2図] のような変形がおこる。

[2図]



この変形によってはじめて、述語 (Predicate) に対する主語 (Subject) が出来る。文の表面構造が主語も述語にわけられるのは、これらの変形をへてからのことである。 S_0 に直接支配される NP も動詞の意味する行為の主体 (subject) ではあるが、主語ではない。主体も主語も subject といえるので、この語はあいまいである。上の例文中の I は S_0 の中においては *read* という行為の主体ではあるが、主語ではない。Predicate に対してはじめて主語になるのである。

上の分析では NP と VP をわけ、さらに

$\text{MV} \rightarrow \text{V NP}$

とした。この NP は V の客体 (object) ということになる。格文法では V を中心に、その主体を表わす NP も、客体を表わす NP も同じ資格で、ただ格 (case) または役割 (role) をことにするだけで、並列される。Langendoen⁵⁾ のやり方によれば、上の *read* を中心とする “role structure” は

read: Agent, Patient

ということになる。これから変形によって表面構造の主語や目的語ができるとするのであるが、もし格文法家の考えが、普遍的な “role structure” から、各個別言語の表面構造が導き出せるというのなら、少し飛躍しきつていて、すでに格や “role” の認め方に、各言語の動詞の

5) Terence Langendoen: *Essentials of English Grammar* (1970).

特性が反映していると思われるし、かりにこれが普遍性をもつとしても、各言語の固有の表現方法が、どういう必然性をもってそこから派生するのか、その変形の仕方を納得できるように説明することは困難であろう。各言語に特有の表現方法があるとすれば、動詞の用法の特性を VP の構造型として捉える必要がある。またそうしてこそ各言語特有の統語法が説明されると考えられる。そこで私は MV の書きかえの規則は、標準的な

$$(9) \text{ MV} \rightarrow \left\{ \begin{array}{l} \text{V Pred} \\ \text{V (NP) (Cmp)} \end{array} \right\}$$

としておく。(以上の諸規則からは副詞的な構成素がわざと省いてある。)

以上、平叙文の能動態否定の場合を扱ってきたが、平叙文には受動態もあり否定のこともある。まず受動文から見て行くと、これは能動文の文核が受動変形 (Passive transformation) をうけることによって生じたと説明できる。受動態には Psv (=Passivizer) という構成素が含まれるが、これは文核の要素である。すなわち、次のような規則が立てられる――

$$(10) S_0 \rightarrow Psv \text{ NP VP}$$

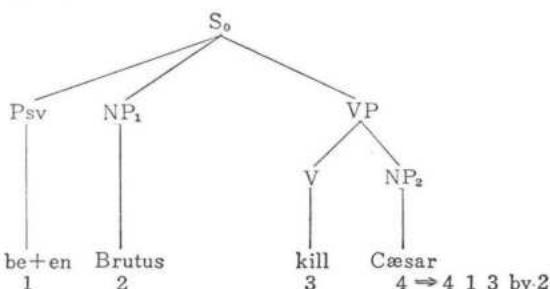
$$Psv \rightarrow be + en$$

たとえば

(11) Cæsar was killed by Brutus.

という文は、Brutus killed Cæsar. から派生したものと考えられるが、その深層構造と変形とは〔3図〕のようなものである――

〔3図〕



すなわち S_0 が受動変形によって $Cæsar$ be killed by Brutus. となり、それから Predicate transformation で was killed by Brutus ができる、Cæsar がその主語になると説明される。Cæsar は kill という行為の客体 (object) ではあるが Predicate に対しては Subject であり、Brutus は行為の主体 (subject) ではあるが、Predicate の一構成素になっている (by Brutus なる Prepositional Phrase の機能は Complement と考えられる)。

上に見たように、受動変形は文核 S_0 のなかで行なわ

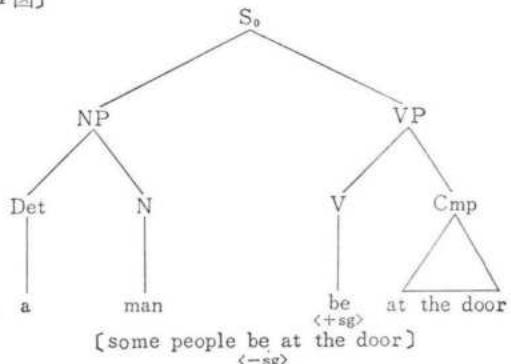
れるが、それと同じように存在を表わす *there is* 構文も S_0 における変形から生じたと説明される。形式語 *there* ではじまる存在文において、存在の主体を表わす NP は *be* 動詞のあとにくるが、この NP が単数ならば動詞も *is/was* となり、複数ならば *are/were* となる。たとえば、

(12) There is a man at the door.

(13) There are some people at the door.

これらの深層構造の文核は〔4図〕のようであると考えられる――

〔4図〕



そしてこの a man/some people が聞き手にとって未知のものであるため、これを先頭に立てる唐突さをさけて、場所を表わす at the door を先頭に複写 (copy) しそれとともに NP be の順序を逆にして、

at the door be a man [be some people] at the door
 <+sg> <-sg>

のように変形し、さらに最初の at the door を形式語 *there* に変形することによって、

there be a man [be some people] at the door
 <+sg> <-sg>

ができる。さらにこれが Predicate transformation によって be 以下が、それぞれ

is a man [are some people] at the door

となり、*there* が主語の位置について (12)(13) の文が生まれたと解される。*There* は主語の位置にあるため、疑問文や付加疑問において

(14) Is there a library in this town?

(15) There were many people in the park, weren't there?

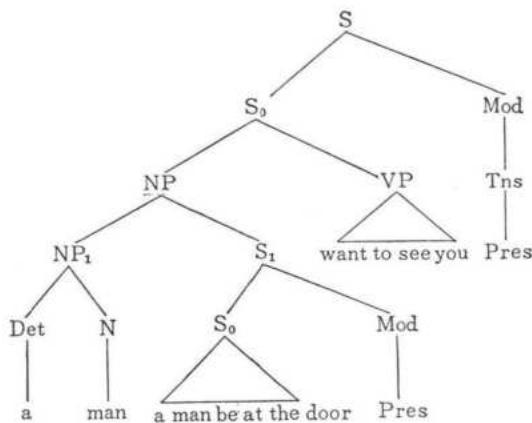
のように、主語と同じ扱いをうけている。それにもかかわらず動詞の数が、あとの NP の数と一致するのは、深層構造を見れば理解されることである。

ついでながら

(16) There's a man at the door wants to see you.

の生成を考えてみたい。この深層構造は〔5図〕のようなものであろう――

〔5図〕



複雑な図に見えるが、要するに $S_0 \rightarrow NP\ VP$ の NP が $NP_1 \cup S_1$ と拡充された場合である。上述の変形により S_1 は *there is a man at the door* となり、 NP_1 の *a man* が消去され、 NP としては S_1 の文だけが残り、これに *wants to see you* という Predicate がついて出来たのか(16)の文ということになる。普通 *wants* の前に主格の関係代名詞が略されていると説明するが、ここに関係節は認められない。上のように解釈すべきであると思う。

(14)(15)に疑問文の例をあげたが、疑問変形(Question transformation)は、S そのものの変形であって S_0 内の変形ではない。換言すれば、疑問変形は述語変形がすんでから行なわれるものである。すなわち Q という構成素は直接 S に支配される。疑問文は

(17) $S \rightarrow Q\ NP\ Mod\ VP$

として表わされる。そして疑問変形の規則は、

$$Q\ NP \left[\begin{array}{c} Mod \\ Tns \left[\begin{array}{c} have \\ be \end{array} \right] \end{array} \right] X$$

$$1 \quad 2 \qquad 3 \qquad 4 \Rightarrow 3 \quad 2 \quad 4$$

すなわち 3 で Q を置き換えることによって助動詞や be が主語の前に出ることになる。主語の前に出るのが Tns だけのときは、

$$\# Tns \# \rightarrow do + Tns$$

となる。また疑問詞 [+WH] があるときは、これが文頭に出る。その規則は

$$X - [+WH] - Y \Rightarrow [+WH] - X - Y$$

疑問変形は大体以上のように説明される。間接疑問は別の機会にゆずる。

否定文

否定文には Neg という構成素を認めなければならぬが、この Neg が VP を否定するときと、S を否定するときと、二通りの場合が考えられる。すなわち

- (18) 1. $VP \rightarrow Neg\ (Aux)\ MV$
- 2. $S \rightarrow Neg\ S_0\ Mod$
(Neg \rightarrow not)

たとえば

(19) Antony didn't kill Cæsar.

という否定文の深層構造は、1.の規則によると VP が

[not [kill Cæsar]_{MV}]_{VP}

となり、これが Predicate transformation をうけると
[Antony] [Past] [not kill Cæsar]

となる。それからさらに Past not \Rightarrow did not (縮約変形で didn't) の変形をへて (19) の文ができたと説明される。最後の変形は

Tns not \Rightarrow do + Tns not

と規則化できるが、動詞が完了形や進行形のときは

Tns not [have]_{be} \Rightarrow Tns [have]_{be} not

という規則で、否定詞を後に移さなければならない。はじめから Neg を Aux のあと、MV の直前におけるべば、この変形規則はいらなくなるように思われるが、分詞構文の場合 not が have や be の前に出て、not having/not being... のようになるので、やはり上のように規則化しなければならない。

(19)の文は VP-negation として説明されるが、S-negation と解することもできる。その場合は (Predicate transformation のあとで)

[Neg [Antony killed Cæsar]]_S

という構造になる。この構造の意味は、「アントニーがシーザーを殺した」ということではない、すなわち

That Antony killed Cæsar is not the case.

ということである。この場合 Neg は全文、すなわち NP と VP の結合を否定しているのである。もしどれかの要素に重点をおけば 3 つの否定文ができる。――

- (20) 1. Not Antony (but Brutus) kill Cæsar.
- 2. Antony killed not Caesar (but Brutus).
- 3. Antony didn't kill Cæsar.

1. と 2. の文を次のような分裂文にすれば、意味がはつきりする。

It was not Antony that killed Cæsar.

It was not Caesar that Antony killed.

3. は VP-negation のことである。普通の否定文はこれであるが、これは主語や目的語が Antony や Caesar のような definite なものを指す語の場合に見られることで、数量詞 (Quantifier) を含む文においては、それが definite なものを指すのか、indefinite なものをさすのかによって否定文の意味がちがってくる。

Indefinite な主語や目的語を含む文の否定について Langendoen (*op. cit.* pp. 164—168) から例を借りて考えてみると、

(21) John saw *someone*.

この目的語 *someone* は unspecified ではあるが、(a) definite にある人を考えているともとれれば、(b) indefinite に誰でもよいある人をさしているともとれる。そこで (21) を否定した場合、二通りの否定文ができるが、(a) なら VP-negation, (b) なら S-negation ということになる。すなわち、

(a) John past [not see *someone*] ⇒

John didn't see *someone*.

(b) Neg [John Past see *someone*] ⇒

(i) John Past *not* see *anyone* ⇒

John didn't see *anyone*.

(ii) John Past see *not anyone* ⇒

John saw *no one*.

(a) の場合は、definite なある人に会わなかつたのであるから、*someone* はそのまま残り、(b) においては誰にも会わなかつことになるので *anyone* に変えられる。そして(b)では(i)と(ii)の2文が可能である。(ii)においては *not* が *any* の直前におかれたので *not any* ⇒ *no* なる変形が義務的に行なわれている。

次に *someone* が主語になっている場合を見ると、

(22) *Someone* saw John.

(a) Someone Past [not see John] ⇒

Someone didn't see John.

(b) Neg [*someone* Past see John] ⇒

(i) **Anyone* didn't see John. (これは非文)

(ii) *Not anyone* Past see John ⇒

No one saw John.

次に数量詞が目的語に現われる場合を見ると、

(23) John knows some of his classmates.

(a) John do esn't know some of his classmates.

(b) (i) John do esn't know any of his classmates.

(ii) John knows none of his classmates.

(a) では *some of his classmates* が特定のグループを指す場合で、VP-negation, (b) は不定の *some* であるか

ら *any* に変えられる。そして(ii)では *not any* ⇒ *none* なる変形が行なわれている。次の文は *some* の代りに *many* が用いられている例である——

(24) John knows many of his classmates.

(a) John doesn't know many of his classmates.

(b) (i) John doesn't know many of his classmates.

(ii) John knows not many of his classmates.

ここで注意すべきは、不定の *many* が否定されても *some* ⇒ *any* のような変形が行なわれないので、(a) と (b) (i) とは表面構造が同じになってしまふということである。(a) は特定の多数を知らないのであり、(b) は多くの級友を知っているわけではない、の意味であるから、(a) と (b) (i) の文はあいまいである。(b) (ii) ならば明瞭である。

次は *all* の場合である——

(25) John knows all of his classmates.

(a) ? John doesn't know all of his classmates.

(b) (i) John doesn't know all of his classmates.

(ii) John knows not all of his classmates.

ここでも(a)と(b)(i)は同形になるが、(a)の意味ならば

(a) John knows none of his classmates.

とした方が明瞭である。これは(23)の(b)(ii)と同形である。(b) なら「全部を知っているわけではない、全部は知らない」となる。

次に *some, many, all* が主語の場合を考えてみると——

(26) Some of his classmates know John.

(a) Some of his classmates don't know John.

(b) Neg [some of his classmates Pres know John] ⇒

(i) *Not any* of his classmates Pres know

John ⇒

None of his classmates know John.

(ii) **Any* of his classmates don't know John.

この(ii)は(22)(b)(i)と同じように非文になるので(26)(b)は(i)の *None of...* だけになる。

(27) Many of his classmates know John.

(a) Many of his classmates don't know John.

(b) (i) *Not many* of his classmates know John.

(ii) Many of his classmates don't know

John.

この(ii)は(a)と同形になり、あいまいである。(i)ならば明瞭である。

- (28) All of his classmates know John.
- ? All of his classmates don't know John.
 - (i) Not all of his classmates know John.
 - (ii) ? All of his classmates don't know John.

ここでも(a)と(b)(ii)とは同形になる。Langendoenによると、この文は多くの人が grammatical というが、あやしいという人もおり ungrammatical だと断言する人もある。そして grammatical だという人のなかには、これを(b)(i)の Not all... の意味にとる人と、(26)(b)(i)の None of his classmates know John. の意味にとる人がある。“I have no explanation for this.”と Langendoen いっている。私の考えでは、All of his classmates don't know John. なる文は (a) VP-negation からも、(b) S-negation からも派生しうるから、二通りの理解が行なわれると説明できる。学校文法でいう全面否定 (complete negation) は(a)の場合、部分否定 (partial negation) は(b)の場合に相当する。(27) の many についても同じことが言えるが、この場合は many が definite であるか indefinite であるかのちがいである。ところが all の場合は、いつも definite なものを指しているので、かえって混乱が大きい。

- (29) All of us went.

これを否定文にする場合、(a) VP-negation ならば、全部が行かなかったのであるから、

- None of us went.
- とすれば明瞭である。また (b) S-negation なら
- (b) Not all of us went.

とすれば誤解はおこらない。ところが実際には、

- (30) All the perfumes of Arabia will not sweeten this little hand. (*Macbeth*)

で (a) No perfumes of Arabia will sweeten this little hand. を意味し、

- (31) All is not gold that glitters.

で (b) Not all is gold that glitters. を意味しているので、意味の面から全面否定が部分否定かを判断しなければならない。そうすると、

- (32) All men are not wise.

は部分否定ということになると思うが、全面否定かも知れない。

(津田塾大学教授)

(p.5 よりつづき)

万億輪の代金を請求するなどということはない。

しかし、日本の美意識では花一輪は百千万億輪にまさる。なぜなら、そのばあい「はたらき」は、「気」はこれから展開するキザシを見せてるだけだから。

利休が朝顔の花一輪を茶室においたという故事はあまりにも有名である。

最近でも故志賀直哉氏の告別式（昭和 46 年 10 月）式場には白バラ一輪だけおいて、そのほかの花はいっさい置かなかった。

また、同年 11 月、横綱玉の海が急逝した時、11 月 28 日九州場所の千秋楽は玉の海の 49 日に当たって追悼式が福岡建設会館で行なわれた。その時、横綱北の富士は遺影に菊の花を一輪ささげて手を合わせたという。

(東京学芸大学教授)

(p.15 よりつづき)

ら進んで次から次へと予定された行事を果たしていかれた。それからいま一つは、お天気が非常によくて、18 日間雨に一晩も会わずにすんだ。夜中に降ったことはありますけれども、行事に当たっている時間は完全に雨がない。したがって予定された屋外行事が全部そのとおり屋外ができる。したがって、ご出発前にきめた日程を全然変える必要がなかった。日程が変わることになるとまた大騒ぎしなければならない。それがなかったものですから、その点ではご旅行が始まってからあと私のほうは非常に気楽だった。ですから、よく、たいへんだったろうとか、気苦労だったろうとか言われるのですが、たいへんだったし、また気苦労だったのはむしろご出発前のことなんで、ご旅行期間中は、私のほうのことに関する部面では心配になっこたとはなかったようなわけです。

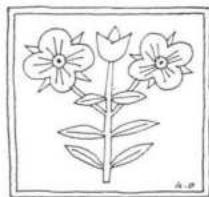
(宮内庁式部官長)

Solution to the Crossword Puzzle on page 60

C	A	M	E	R	A	A	S
M		L	N	O	R	T	H
R	E	C	E	N	T	T	I
R	A	C	E	A			R
F	I	R	A	C	C	E	P
C	E	N	T	T	L		
C	A	L		S	G	A	
A	E	L	E	P	H	A	N
L	O	S	E	O	L	A	
L	S	T	A	T	E	U	N

オーストラリア、ニュー・ジーランド

英語について



KUKI, HIROSHI

九鬼博

6年ぶりの一時帰国を機会に日本では比較的知られていない過去2年半程を過したオーストラリア及びニュー・ジーランドの英語について概略的に紹介を試みる。鉄鉱、その他の日本への輸出がここ数年来急激に増加した関係上、来日する英語諸国民も、アメリカ人についてオーストラリア人が多くなっている。日本語学科（日本文学を含む）も、オーストラリア、ニュー・ジーランド共に、過去5、6年の間に各地で開設された関係上、上記2国と日本の間での高校生の交換、大学で日本語を専攻後、日本語・日本文学の研究に文部省の奨学金その他で来日する若いオーストラリア人、ニュー・ジーランド人の数も急激に増加の一途を辿っている。

逆に、ここ5年間程の日米関係・国際情勢を反映してアメリカでの日本語、日本文学研究は下火になり、その良い例はカリフォルニア州モントレーの米軍情報士官訓練学校における日本語科の10年近くも前になる完全撤廃、また、反面、ワシントン、その他における最近のベトナム語、中国語教育の隆盛であろう。

「オーストラリア英語は例の有名なロンドンのコクニー（Cockney）と同じでしょう？」——と町の人はおろか、先日、国際基督教大学で4年ぶりに再開された夏季言語研究会で、ハワイ大学大学院時代の同窓生・同大学日本語科助手時代の旧上司・同僚に問われたのが動機で専門の大西洋言語学を離れ、故国日本の英語学徒の皆様に御参考迄に、と見聞した範囲内でごく紹介的に本小論を試みる決意をした。

まず、上述のロンドンのコクニー（Cockney）イコール・オーストラリア英語という generalization が間違ってはいないが、実はアメリカ、カナダと比して、昨年入植二百年祭のあったオーストラリアと、たった入植後百年だけの、これ又最も新しい新開地ニュー・ジーランドでも、もう概にかなりの方言差が生じていることを第一に指摘したい。第二点としては、地域的方言のほか、他

国語同様、職業的方言、及び本国英國からの入植の地域・方法・時代による方言差の著しいこと。これら2点は著者のオーストラレシア（Australasia、オーストラリアとニュー・ジーランドの総称）滞在が長びくにつれ、耳につく。人口1,000万余の東京で、現在ほとんど日本各地の方言が聞かれるのと同様、オーストラレシア、特に面積もより広く、人口もより多いオーストラリアで、英國各地の方言が聞かれる様子、その多様性は正に目を見張るものがある。その反面、これも他国におけると同様に、特にオーストラリアではテレビ、ラジオによる均一化がやはり同時に徐々に併行して進行中で、オーストラリア英語の正確な実体を皆様にお伝えすることは至難を極めている。

オーストラリアは過去20年間に移民勧誘により、人口を2倍にし、現在その人口は全国で1,200万程である。この勧誘移民はオーストラリアでニュー・オーストラリアンズ（New Australians）と呼ばれ、英國はおろか移民制限をかなり拡げ、オランダ等西欧諸国、イタリー・ギリシア等の南欧諸国はおろか、ポーランド・ユーゴスラビアを主とする東欧諸国の人々を多く含んでいる。オーストラリアでは人口最大の都市シドニーは今やアメリカ人に50年前のニューヨークを想い出させるそうである。1970年1月、2月と濠洲国立大学にエクスピボ娘たちの日本語集中講座のため、客員講師としてニュー・ジーランド国立大より招待され、タスマン海峡を越えてまず上陸したシドニー（人口250万程）の中心街で、知人を訪問するため道を尋ねたところ、1人目の人が英語のできないギリシア人、2人目の人がやはり英語のできない老年のオランダ人で“Me speak Holand. Me speak no English.”といわれさっぱり駄目。3人目のポーランド人に大部錯付いたロシア語で道順を教えてもらい、どうにか目的地に辿りついた記憶は著者の脳裡に新しい。シドニーのタクシーの運転手は新來のギリシア系が多く、

現在では彼等の一部分より私の方があるいはシドニー街路に詳しいかもしない。私の現在の本拠地、オーストラリアの首府キャンベラ（人口 10 万程）でも、コーヒー屋、レストランの経営者はほとんど 100% イタリー系及びギリシア系である。各国の大天使館もあり、濠洲国立大学の学部の学生が休暇中、キャンベラのレストラン、コーヒー屋にアルバイトに出掛けても、少なくとも 6 カ国語位、英語の他に主要諸外国語が出来ないとオーダーが取れない、と泣いて帰ってくる。

閑話休題、本題のオーストラリア英語、ニュー・ジーランド英語に話を戻そう。

先ず、話しの簡単なニュー・ジーランド英語から始めさせて頂くことにする。ニュー・ジーランドは日本の面積の 4 分の 3 の小国で、人口も 250 万程度。入植の歴史も百年程で南島と北島の主要 2 島より成り、アメリカ、オーストラリア、カナダと異なり各州に分かれている訳ではない。首府の小都市ウェリントンは言わばアメリカのワシントン格で、人口は北島中部のオークランドが最大であるが、それでも 60 万程度である。

ニュー・ジーランドの入植は先ず南島から始まった。入植者は主にスコットランド系で、アメリカ英語の大部分の方言、英語でもロンドン郊外の貧農等の間で聞かれる /r/ が聞かれるのが特徴である。それも早大英文科時代に五十嵐新次郎先生、その他にお教え頂いた派手なシェークスピア劇上演の際に、英國その他で使用される trilled /r/ ではなく、かなり「おとなしい」アメリカ英語に近い /r/ である。ニュー・ジーランドは英連邦自治領だから /r/ はないであろう、という旅行者の予備知識で、ニュー・ジーランドへ行かれたらまずびっくりされるのが、このニュー・ジーランド南島系の /r/ であろう。この /r/ は一応 phonemic と見て良ろしからうと推察する。このニュー・ジーランド南島系の /r/ は日本語科及び言語学科の専任講師を 2 年程勤めた国立オークランド大学の学生の間でも聞かれた。日本的でも伝統的に、例えば東京出身者の多い慶應に比べ、地方出身者の多い早稲田で、日本中各地の諸方言が聞かれるのと同様、一応現在ニュー・ジーランドの東大格で、ニュー・ジーランド各地からの秀才の「集まり散じる」オークランド大学での 2 年間程の学生との接觸はこの意味で非常に面白かった。

ただし、オークランド大学英文科における方言研究が 1969 年から ロンドン大学の音声学での博士号をお持ちのスコット教授 (Professor Scott) により、つい最近始めたばかりのことは非常に遺憾である。同教授は 1969 年に平生の講義その他で御多忙中に Phonetic Ma-

trix をニュー・ジーランド方言研究のためにお作りになり、オークランド大学の学生を世論調査的に任意注出され、その研究結果を我々のニュー・ジーランド言語学会、オークランド部会で、1969 年末に研究発表なされたが、1970 年に Sabbatical Leave で英国に御帰国になり、その時点で現在一応、御研究が立消えになっているのは、やはり遺憾である。ニュー・ジーランド英語の語彙・文法の段階に到っては、組織的研究はまだ皆無である。他の英語圏における、他の人文・自然科学両分野におけると同様、概略的に述べて、英国外を一見して、アメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュー・ジーランドの順で、この方面的研究も悲しい後れをみせているが、これはたった百年程の極度に短い入植史、全国人口 250 万といった諸事情からいって致し方あるまい。方言研究はまた、英語学はおろか、純粹言語理論研究の立場からいえば、どちらかというと、末梢的分野である。

オーストラリアにおけると同じく、ニュー・ジーランドにおいてもその入植史と、諸方言との間の関係は微妙に入り混じっている。ニュー・ジーランド英語方言学に入る前に、国立オークランド大学歴史科学科長シンクレア教授 (Professor Keith Sinclair) の手になる Penguin Books 中に収められている *History of New Zealand* は必読書と申し上げて差支えあるまい。ニュー・ジーランド入植史（3 世代程）で面白いのは、

- (1) 現存 10 万程のポリネシア系の原住民マオリ族諸族との武器による戦い。その後の英語とマオリ語の人種的・言語的混血。
- (2) まず南島に入植後の、入植者による、より温かい北島への移動——これは現在も進行中。
- (3) 首府オークランドの南島居住者の苦情、懇願による、ニュー・ジーランド北島と南島の中間地点、北島の南端のウェリントンへの移動。
- (4) アメリカ、カリフォルニア州でのゴールド・ラッシュ (Gold Rush) 後、引継いで起ったオーストラリア中西部、ニュー・ジーランド南島でのゴールド・ラッシュ。それに伴う白人人口の移動、及び一部の広東系中国人の移動。

等々であろう。小生のハワイ大学言語学科大学院時代の同窓生、オークランド大学卒のリチャード・ペントン氏 (Mr. Richard Benton, 現ハワイ大学) の祖父ウィリアム・ペントン氏 (Mr. William Benton)——オークランド時代の本稿著者の実質上の「父親代り」——は例えば、アメリカはサン・フランシスコ生まれのアイルランド人である。

ニュー・ジーランド土語のマオリ語 (Maori) も、樟

太のアイヌ語以上に方言を持つ。その詳細はチェコ人、現モスクワ大学講師ビクター・クルーパ氏 (Dr. Victor Krupa) の手になる、モスクワ大学発行の『マオリ語の形態論』(Morphology) の前半に詳しい。このボリネシア語族の代表選手 (東ボリネシア語系), マオリ語の地域的諸方言とニュー・ジーランド英語との言語的及び人種的混血の複雑性は、概略的ニュー・ジーランド英語の紹介をほとんど不可能ならしめている。

例えば、オークランド大学時代の同僚 Miss Anne Thorpe (現 Anne Salmond 夫人) は金髪蒼眼の風貌にもかかわらず、北島のマオリ部落に生れ、第一言語として幼時にマオリ語を習得し、その後、小学校入学後、両親の話す英語を覚え、オークランド大学卒後、1968 年末にアメリカはベンシルバニア大学に留学。時と場合により幼児時代習得した純粋なマオリ語とマオリ語がかつた英語を話し、オークランド大学で言語学の講義をする時には、かなりアメリカ英語化したニュー・ジーランド英語を話し、日常は現在やはり標準的北島系のニュー・ジーランド英語を話し、客観的に見て、英語に関する限り言語的精神分裂症状を呈している。逆に純血のマオリ人、言語学助教授のパトリック・W・ホヘバ博士 (Dr. Patrick W. Hohepa) は英語で育ち、後にマオリ語を習得、アメリカはインディアナ大学からの博士号を持ち、1969 年をマサチューセッツ工科大学 (M.I.T.) の言語学助教授として客員の資格で過されオークランド大学に帰朝された。

ニュー・ジーランド英語とマオリ語の混血は優に十指に余る、ハワイの Hawaiian Pidgin に劣るとは言え、タヒチ、ニュー・カレドニア等、南太平洋の諸島領における French Creoles の数に近い。ただし、ニュー・ジーランドにおけるその短い入植期間、ニュー・ジーランドのその必然的「後進国性」、他の「新世界」各地における同様の話者の移動性等の関係から、何十何百冊とある Hawaiian Pidgin, French Creoles の文献に比し、ニュー・ジーランドの方言研究はまだ始まったばかりである。

アメリカ西部 (特にカリフォルニア), オーストラリア中西部、継いで発生したニュー・ジーランド南島でのゴールド・ラッシュ (Gold Rush) の時に移動した白人人口に伴って移動した人種に、今や全世界に定住した広東系中国人がニュー・ジーランドにも 1 万人程が南島と北島に定住している。小生がニュー・ジーランドでの専任講師時代に、特に興味深く観察した事実は、これら広東系の二世・三世の中国系ニュー・ジーランド人学生の話す、白人のニュー・ジーランド学生以上に強烈なニュー・

ジーランド・アクセントのある英語である。徹底的ニュー・ジーランド英語の研究には、おそらくこのニュー・ジーランド生まれの二世・三世の広東・中国系ニュー・ジーランド人がインフォーマント (informants) として、白人のニュー・ジーランド人に接するより、より適格であろう。

ニュー・ジーランド英語の精神分裂的傾向は、マオリ人のオークランド中心部貧民街へのニュー・ジーランド (特に北島北部)、及び近隣のニュー・ジーランド領、英領——例えば、クック諸島 (the Cook Islands), ニウエ (Niue), 西サモア (Western Samoa) 等——からの、他のボリネシア諸族の移住により増化の一途を辿っている。オークランドの代表的貧民窟、ポンソンビー (Ponsonby) ではボリネシア諸語 (30 程) の半分程と英語、時としてはフランス語迄聞かれる。前述の通り、近隣のニュー・ジーランド領、英領の他、仏領ボリネシア (タヒチ) からの親族を頼っての移住が多いからである。

タスマン海峡を渡って、次にオーストラリア英語に移ろう。二百年の入植を誇るオーストラリア英語の方言差は、百年の入植史を持つニュー・ジーランドより必然的に更に複雑なことは本小論の冒頭に述べた通りである。衆知の如く、オーストラリアは英国の流刑地として発生した。これもある意味において花々しい誤解である。流刑の理由も、奉公人が主人の「靴みがき」を一夜忘れ、流刑になったと言った「慢画話」の方が多い。佐渡が島、八丈島への流刑より、客観的に見て罪が軽い場合が多かった。

オーストラリアの場合、入植の中心地はシドニーを中心とするニュー・サウス・ウェールズ州 (New South Wales) とメルボルンを中心とするビクトリア州 (Victoria) である。ニュー・ジーランドと同じく、後に首府争いが起り、中間地点にキャンベラ (Canberra) というブラジルのブラジリア (Brazilia) に似た人工的首都をアメリカのワシントンに似せて、アメリカ人の設計により今世紀の初めに作成したことが、現代オーストラリア史である。確かに、下層階級のシドニー英語は、ロンドンのコクニー (Cockney) に酷似している。オーストラリアの場合、地域的方言差より教育的レベルの方言差の方がより顕著である。

旧シドニー大学副総長、現在シドニー郊外にある新しい大学、マッコリー (MacQuarie) 大学総長のミッチャエル教授 (Professor C. A. Mitchel)、及び旧シドニー大学英文科助教授、現在マッコリー大学英文科学部長のデルブリッジ教授 (Professor A. Delbridge) による共著 *Spoken English* (シドニー大学出版局発行) は、シド

ニー大学、マッコリー大学はおろか、オーストラリア各地で各大学学部下級生の英語学の教科書として既に永く使用されている。両教授はニュー・ジーランドの国立オークランド大学のスコット教授と同じく、ロンドン大学の博士号を持たれ、オーストラリア英語を地域的方言差より、オーストラリア英語話者の教育的レベルという規準により、Educated Australian, General Australian 及び Broad Australian の3種に音声部門で分類されたことで有名である。この3者の内、オーストラリアで最もやはり頻繁に聞かれる Broad Australian が、ロンドンのコクニー (Cockney) に近く、地域的にはシドニーで最も頻繁に聞かれる。オーストラリアでの人口第2の都市ビクトリア州の首府メルボルンはどちらかというと英國中産階級的で生活も英語もニュー・ジーランドに近く、保守的であることが、新鋭の気分に満ちたシドニーと対照的である。これは著者の体験である。

概略的に述べ、オーストラリア英語中この最下位の Broad Australian がロンドンのコクニーに近い——というより、旧日本植民地の台湾、韓國の中年層の方々の話される日本語に近い、と申し上げた方が現状にピッタリという感じである。オーストラリアの場合、原住民のアボリジニー (Aborigines) がほとんど死滅してしまった現在、日本でいえば北海道と同じく、現地語の影響が地名にだけ残っている程度、というのが、又、概略的に述べて、ニュー・ジーランド英語、特に、ハワイの Hawaiian Pidgin、南太平洋その他世界各地で行なわれている French Creoles に比較した場合の顕著な特徴であろう。

南オーストラリア州の首府アドレー (Adelaide) 及びその近辺では、英國中産階級的英語が目立つ。その他アドレーには南ドイツ系の移民が多く、主にブドー栽培に従事しておりその影響も当地のオーストラリア英語に及んでいる。同州産のブドー酒はニュー・ジーランドはおろか、日本にも現在進出中である。

現在、シドニー大学及びシドニー郊外の新設のマッコリー大学において、英文科系、言語学科系の大学院生により、理論言語学的観点から見てかなり水準の高いオーストラリア英語の語彙及び文法の地方的諸方言の研究が進行中である。

北東オーストラリア、クイーンズランド州 (Queensland) の首府ブリスベン (Brisbane) にあるクイーンズランド大学英文科のコクラン博士 (Dr. Cochrane) はより精密なオーストラリア英語の分析を、現代アメリカ言語学的手法により行ない、その結果を *Word* 等の国際的言語学会誌に発表している。又、同博士は同大学の日本出

身の日本語科の助手をインフォーマント (informants) としてお使いになり、日本語とオーストラリア英語の比較研究をここ数年来なされている。ただし日本人、アメリカ人の言語学者の手になる日米語の比較研究に比べ、開拓時代的「音韻論」の段階で未だ終始されているのも遺憾である。

新聞地のアメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュー・ジーランド4国之内、後者2者において各々各二百年、百年の短い歴史ながら、英國本国からの植民のパターン、及び地域的・職業的に相違のある英國系英語の諸方言のオーストラレシアへの定着の概略を読者の皆様に大体、御理解いただけ、また今後の読者の皆様の御研究の基石にしていただければ、本望とするところである。

(濱洲国立大学高等研究所言語学科研究員)

(p. 74 よりつづき)

うな「変換ルール」を設けることは全く無内容である。このように、本来重ね合わせて比較することができない2方言の音素体系を比較することができると前提するよりは、いくつかの方言をあたかも1方言であるかのように扱う「総合型」の分析に進む方がよい。また方言間にみられる、語の対応する部分の音声的違いをできるだけ詳細に調べて、それを方言異音 diaphones として提示する方言地理学の行き方の方がはるかに内容豊富といわねばならない。

(横浜国立大学教授)

(p. 76 よりつづき)

で位置は強調や律調のために移動することもあるとして Oh, give it me—Give me it, please. とあるだけだが、これも強勢記号を活用すべきであろう。

その他、アメリカ英語の記述が少ないと、書きことば、特に文学作品に重点が置かれて、口語、特にぐだけた口語の資料が少ないと、など望むべきことはまだある。しかし、日本人の書いた文法書としては、論理・心理の両面から、これほどがっちりと体系的に記述されたものは少ない。広く推賞したい。

(神戸市外国语大学教授)





Teacher for the Timid

Wilbur G. Isaacs

Speechless is defined in the Pocket Oxford Dictionary of Current English as "unable to speak for rage or joy or other overpowering emotion." It is from the words "or other overpowering emotion" that I would like to extract a few points and make a few observations pertinent especially to the situation of language study in Japan.

Most Japanese students of English, or of any other foreign language, have at least one shock in store for them when they leave high schools and enter universities and language schools where "native speaker" instructors now abound. These students, in most cases, have been inculcated with a rigid, formal, ultra-grammatical English that is at loggerheads with any purposeful communication. With the exception of exceedingly clever and perceptive students who have ears that hear and minds that sort out that hearing, most students are bogged down in misconceptions, misinformation and misgivings.

It is, however, with these gifted students, or even the ones with a good ear for language, provided they have determination, that I am concerned. Much is said and written about the general student, the ordinary or the underprivileged one, the common denominator of language pupil—and this is all to the good. But the unusual student (unusual for reasons of either intellect or good hearing ability) also needs great attention. Supposing that this unusual student is blessed with ambition as well as talent, he it is who will furnish some big company, or a national or an international organization with someone well-equipped to translate and interpret instantly, with a full idiomatic command of English. It will not

be on the drudge—the attentive, well-meaning, earnest and ungifted pupil, this one who is so legion, whom we know so well and who never learns beyond the classroom—it will not be on him that the laurel is placed. It will be on a bright, adept person who will lend prestige and power to the organization and to himself. It is on him that more time should be spent, to him that more care should be devoted. A larger number of teachers should apportion more of their time to the ambitious and the astute amongst the language progeny of their classes, being careful to sift out the merely ambitious who can express but not explain, recite but not remember.

The elite among language students should possess these qualities: an excellent ear, a superior intelligence and a powerful desire for achievement, in just about that order. Perhaps a fourth quality should be added to those, bringing me to the crux of this little essay. This quality would be a certain aggressiveness, expressed more clearly in the negative—a lack of timidity. It is this "no"-quality, this absence of enthusiasm and straightforwardness that besets so many Japanese students, the gifted and the untalented alike. They flounder in a sea-weed sea of diffidence and self-pity.

We must help the Japanese student of English to conquer an over-weaning reliance on age-old virtues which are no longer virtues in the international sense and which hamper any real progress in any field of study. I note especially the traditional and esteemed quality of shyness, of an exaggerated modesty which ill-becomes a member of any modern society. I stress "exaggerated", since modesty is also a virtue in the Western world

(though one is often at a loss to find it). The "hazukashii" attitude in class, by both boys and girls, men and women, is the bane of all foreign teachers in Japan. It is a deterrent to good teaching. It is certainly a deterrent to good learning. To overcome this feeling and attitude is surely one of the greatest problems and challenges we face.

In order to effect any remarkable change, much depends, of course, on the character and personality of the individual teacher. Nobody can surmount the formidable barrier of hesitation that we find in the classroom if he has a hesitant, over-refined, cautious manner himself. I believe many teachers are often unconsciously (or consciously?) afraid of their students, not physically, but stunned, even repelled, by the awful silence, the speechlessness, to a point of antipathy and consequent fear. We must, as sincere teachers, endeavor to jump these hurdles, admittedly high; to do that requires, first of all, a self-confidence, a strong will and a pleasant, open manner designed to gain the confidence of those on the other side. They are waiting for us on the other side of that hurdle, that startling barrier which is thick and tough, sometimes because of language, sometimes because of age, but always because of differences in background and tradition. We have got to know the differences. We have got to leap over them. The sooner we imbue ourselves with a really comprehensive understanding of the reasons for the, to us, strange classroom habits in these islands, the sooner our teaching will begin to take root, and not be scattered on the other side of that wall like seeds in a sunless desert.

Reading books on Japan can help. There are a myriad volumes available, written by the cognoscenti, by the emotionally biased (pro or con), by tourists, by teachers and by dabblers. By scanning this increasingly large library it does not take us long to sort out the dross and find some gems of perception and knowledge. I wish it were within the scope of this article to go into more detail about all the excellent material available. This can help us immeasurably to

understand and appreciate a people so alien to our thinking and our emotions. To mention only a few of the names that have contributed distinguished books which can help us: Richard Halloran, Oliver Statler, the redoubtable Ruth Benedict, Fosco Maraini and Chie Nakane.

Undoubtedly the greatest component of our understanding would be direct and personal communication with a student. Since I am considering here the gifted pupil, it is usually not so much of a problem as of a potential pleasure to communicate with him. Ambitious students are often as interested as we are to bridge the culture gaps and will try to aid us in communicating, despite their innate shyness. Nonetheless, there will be a timorous and unenterprising reticence to cope with in 95% of our encounters. We must be as natural as possible with these students, without shocking them inordinately with Western brashness—harsh tones of voice, rude vocabulary and expansive gestures. I find that a polite and kind approach, even to irascible students, is the only way to gain any confidence and respect. To counteract shyness, we need not resort to effusiveness. A truer antonym, as well as antidote, for bashfulness, may be enthusiasm—an enthusiasm without the insincerity of forced humor or the self-gratifying explosions of our knowledge.

With gentleness and consideration, above all with tact, we should point out to our brighter and more zealous students the necessity of putting in the background, at least periodically, some of the old "virtues". Excessive shyness is not compatible with any true intercourse with Westerners and it is with Westerners that they must eventually deal, as they use English more and more.

We must help them to cultivate directness. In our psychology, directness is the means to obtain confidence from another. As soon as we hedge or act like ostriches we are immediately either shunned or criticized. We must encourage the use of *negatives* and make them see that there is a real need for them in our language. Many other purely linguistic problems will be obvious to the individual teacher. Most of all, perhaps, we can

CROSSWORD PUZZLE



ACROSS

1. You take pictures with it
7. Antonym of SOUTH
8. Adjective form of RECENTLY
11. Running contest
13. Kind of tree
14. To receive willingly
16. American coin of small value
17. Abbreviation for CALIFORNIA
19. Abbreviation for GEORGIA

20. Largest land animal
23. Synonym for MISLAY
24. Hawaii is the 50 th one
25. Abbreviation for UNITED NATIONS

DOWN

2. Another name for United States
3. Abbreviation for the publisher of this bulletin
4. Small insect
5. Painting, and music can be called this
6. Men usually wear one
9. Antonym of CAREFUL
10. Orderly and clean
12. An actor can do this
15. You need this to build a house
17. Synonym for the verb TELEPHONE
18. Small mark
19. Abbreviation for GALLON
21. Synonym for ALLOW
22. Light brown color

The solution to this puzzle may be found on page 53.

and should exhibit to them, by our examples, ways of relaxing with others, in a Western fashion, doing away with the sitting on the edges of chairs, hands folded "properly" in the lap, like a figure in an ancient daguerreotype, the face immobile, the voice less than vocal.

Let us treat our students as human beings and not as automatons, which they sometimes seem to be. We must remember that it is exceedingly difficult for them to divorce themselves from tradition, especially in their relationships with foreigners. They have a host of preconceived notions about us, many of them erroneous. We should help disabuse them of these notions, to gain respect and even, praise God, admiration.

Let's get to the core of their problems, forgetting our own. At least, let's attempt to get

there. Erich Fromm says, in his book *The Art of Loving*, "If I perceive in another person mainly the surface, I perceive mainly the differences, that which separates us. If I penetrate to the core, I perceive our identity...." If we can somehow identify ourselves with our students (and there may be no more difficult task than identifying with a Japanese student!) we have achieved most of the goal. The rest is mere detail and technique.

The gifted student needs our attention, not our castigations. Under our kind and informed ministrations he will find himself not speechless, not overcome with emotions of fear and trepidation, but confident and able. He needs our help and our love.

"The End"

(Instructor, ELEC Institute)



HŌJŌKI

方丈記

KUSAJIMA, TOKISUKE

草 島 時 介

What is the "Hōjōki"

— Bibliography —

It is believed that the "Hōjōki" was written by Kamo-no-Chōmei. His life is not so well known as his work has been. It is said that he was the son of a shrine-manager, Chōkei, at Kamo, and was very good at various arts, such as composition of verses and music of tubes and strings. He also desired to become a shrine-manager only in vain, and made up his mind to become a priest, giving up this secular world below.

It can be concluded without serious mistakes that Kamo-no-Chōmei finished with his work, "Hōjōki" in the second year of the Kenreki, 1872, when he was sixty-five years of age.

The "Hōjōki" has been generally called an essay. Its contents, however, are anything but an essay, but a documentary description of his own life. In the former parts, the author describes the various kinds of troubles in life, events and disasters, such as earthquakes, conflagrations, storms, famine and pestilence, which he experienced himself. Next comes the conjunctive part, which combines the former part with the latter. In this part he dwells upon the motive why he became a priest and came to seclude himself in the depth of Hinoyama. In the latter part, however, the author describes the condition of the hut, the scene of Hinoyama, the state of his secluded life there, and further the reason why he lead his life of seclusion.

In the end of the work, he describes some sentences, pretending as if he were a saint, and would warn himself.

The "Hōjōki" was written in fluent and beautiful sentences—in the combined style of Japanese and Chinese styles. Its styles are recognized as the very first of those of the works in this period. The sentences are rhythmical and wonderfully beautiful, which indicates that the author was blessed with wonderful techniques in composition. But it is grievously felt that, this merit in the beautiful style of sentences proved the devoid of vigour and freshness in thought. The author seems a querulous person and rather concerned with outward appearance, and could not entirely give up the world. He expressed discontent, complained of things, and muttered at various troubles of the world. In Kamo-no-Chōmei's personality, we can hardly find such free and easy, unworldly mindedness, as we can find in Kenkō, the author of the "Tsurezuregusa", who has much of the Bohemian. And yet Chōmei was bestowed with the talent for techniques to compose beautiful sentences. It is believed that, in the older age he wrote the "Hōjōki" at a stretch, enjoying the pleasant state of secluded life.

The brook glides on continuously, but its water is ever-changing. Bubbles break here, while they form there. They never remain the same. The same fate is shared by men in the world, and by the houses of men. Indeed, one might think that the abodes of high and low, constructed into a magnificent city, would outlive the generations, but few of them, if well observed, resist the destruction of time. Some were brought to ruin last year and have now been rebuilt; other splendid mansions have been reduced to small dwellings. As it is with the houses, so it is with the owners. No doubt the abodes and people are really the same in place and number; I can, however, see only one out of ten people I used to know in the days before. Some die in the morning; others are born in the evening—bubbles in the brook form and break.

Ignorant are we whence we come into this world and whither we return. And we know not what it is that troubles us in this unreal world, and what affords us delight in the temporary show of things. As the master and his house in the flickering world of change, so is the dew-pearled morning glory. Some outlive the vanishing dew only to wither in the first sunshine, some droop even while the dew remains, but none lives to see the evening. It is more than forty years since I first knew the heart of things. During that time I have observed many wonderful events.

The 28th of April in the third year of Angen¹⁾ (1177) was a day of great winds; the night was wild and boisterous. At about eight o'clock a fire broke out in the south-eastern part of the city, and spread north-west, as far as the Suzakumon,²⁾ the Daigokuden,³⁾ the Daigakuryō,⁴⁾ and the

1) 1837, the third year in the reign of the Emperor Takakura.

2) Entrance gate to the Imperial Palace on the Suzaku-street.

3) Principal building of the Imperial Palace. In it the Emperor takes charge of administration of the state, and various national ceremonies are held.

4) Building where students are trained in culture.

ゆく河のながれはたえずして、しかももとの水にあらず。よどみにうかぶうたかたはかつきえかつむすびて、ひさしくとどまる事なし。世中にある、人と栖と又かくのごとし。たましきのみやこのうちに棟をならべ、いらかをあらそへるたかきいやしき人のすまひは世々をへてつきせぬ物なれども、是をまことかと尋ねれば、昔もありし家はまれなり。或はこそやけてことしは作り、或は大家ほろびて小家となる。すむ人も是に同じ。ところもかはらず、人もおほかれど、いにしへ見し人は二三十人が中にわざかにひとりふたりなり。朝に死に、夕に生るならひ、ただ水の泡にぞ似りける。

不知、うまれ死ぬる人いづかたよりきたり、いづかたへか去る。又不知、かりのやどり、たが為にか心をなやまし、なによりてか目をよろこぼしむる。そのあるじとすみかと無常をあらそふさま、いはばあさがほの露にことならず。或は露おちて花のこれり。のこるといへどもあさ日にかれぬ。或は花しほみて露なほきえず。きえずといへども、夕をまつ事なし。乎ものの心をしれりしよりこのかたよそじあまりの春秋をおくれるあひだに、世の不思議を見る事ややたびたびになりぬ。

去ぬる安元三年四月廿八日かとよ。風はげしくふきて、しづかならざりし夜、いぬの時許みやこの東南より火いできて西北にいたる。はてには朱雀門、大極殿、大學れう、民部省などまでうつりて、一夜のうちに塵灰となりにき。ほもとは樋口富の小路とかや、病人をやどせるかりやよりいできたりけるとなん。ふきまよふ風にとかくうつりゆくほどに扇をひろげたるがごとくすゑひろになりぬ。とほき家は煙にむせび、ちかきあたりはひたすら焰を地にふきつけたり。そらには灰をふきたてれば、火のひかりにえいじて、あまねくくれなゐなる中に、風にたへず、ふききられたるほのほ飛が如くして、一二町をこえつつうつりゆく。其中の人うつし心あらむや。

Mimbushō.⁵⁾ During that night they were all reduced to ashes. It was said that the starting point of the holocaust was a temporary dwelling at Higuchi-Tomino Kōji,⁶⁾ where a sick man was dwelling. Harried by the wind, the fire spread from there in the shape of an open fan. The distant houses were enveloped in smoke, while the nearer ground licked by tongues of fire. Sparks soared aloft, reflecting in the night sky, made a brilliant display. And flames cut off and blown by the wind, flew over a space of one or two cho away and found new quarters there. The dwellers, of course, were panic-stricken and at their wit's end.

Some fell choked with smoke; others were seared to death by flame. Those fortunate ones who were saved from death nevertheless lost all their treasures. Everything was reduced to ashes, so that it was quite impossible even to compute the amount of loss. In this fire, sixteen mansions belonging to those of the highest position were burnt to the ground, as well as innumerable others. One third of the city was a ruin. Thousands of men and women, as well as an immense number of cattle, fell victim to the flames. Thinking over all human endeavours undertaken in vain, it would seem that the worst is that undertaken by those people, who took so much pain, trouble, and expense to reside in so dangerous a city.

5) Bureau where population is surveyed and various other domestic affairs are administered.

6) Proper name of a place.

或は煙にむせびてたふれふし、或はほのほにまぐれてたちまちに死ぬ。或は身ひとつからうじてのがるるも資財を取出るに及ばず。七珍萬寶さながら灰燼となりにき。その費えいくばくぞ。其のたひ公卿の家十六やけたり。ましてそのほかはかぞへしるにおよばず。惣てみやこのうち三分が一に及べりとぞ。男女しぬるもの數十人、馬牛のたぐひ邊際を不知。人のいとなみ皆おろかなるなかに、さしもあやふき京中の家をつくるとて、たからを費し、こころをなやます事はすぐれて、あぢきなくぞ待る。

● カセットテープ新発売!!

ご要望により下記テキストのカセット・テープを発売いたしましたので、ご利用下さい。

Our English Songs 1, 2

Unabridged 版 (1) — 全 10 卷, (2) — 全 11 卷 各巻 ¥ 1,600

Introducing Controlled Conversation

Unabridged 版 全 4 卷, ダイジェスト版 全 1 卷 各巻 ¥ 1,500

English Pronunciation and Intonation Drills

Unabridged 版 全 4 卷 各巻 ¥ 1,500



To Express or Not to Express

—On Keene's *20 Plays of the Nō Theatre*¹⁾—

Keiichi Hirano

In the Noh play *Higaki* ("Cypress Fence")²⁾, which features an old woman, the ghost of the woman has to draw water from a well. Usually this is stylized in a gesture of lifting a bucket from the well three times. Sakurama Michio, a grand master of Noh who recently performed this play for the first time in decades, at least as concerns the Komparu school of Noh, makes this gesture only once. His reason is that if one can express the same thing by moving less—once instead of three times—so much the better as a Noh performance. Sakurama states that his ultimate aim on the Noh stage is to achieve a performance that moves the audience while he himself hardly moves, or in other words: to move people more by moving less. One can call it nonsense, Zen, symbolism, or whatever one likes, but Sakurama's approach to Noh performance embodies the essential spirit and genius of the genre, which is to express something by *not* expressing it. An actor may well be able to express deep emotions through elaborate and realistic facial motions, but if he can communicate the same feeling without having to rely upon such expressions—by lifting his hand slowly

1) Donald Keene, editor, with the assistance of Royall Tyler, *Twenty Plays of the Nō Theatre* (New York: Columbia University Press, 1970), \$15.00. The present review is an expanded version, or to be more exact, the original of the writer's "Translating the No" formerly published in *The University of Denver Quarterly* (vol. 6, no. 2, Summer 1971) (© Keiichi Hirano). For the convenience of readers, footnotes mostly in Japanese have been newly added. The writer owes the botanical information to Professor R.P. Tripp, Jr., University of Denver, a botanist in his own right.

2) Unfortunately not included in Keene's edition. An English version ("The Woman within the Cypress Fence") may be found in Makoto Ueda's *The Old Pine Tree and Other Noh Plays* (Lincoln: University of Nebraska Press, 1962). *Higaki*: 檜垣.

to his masked and expressionless face, for example —how much the better, at least from the standpoint of Noh. The tip of the iceberg suffices to express the whole iceberg. An art form that has to show more in order to express less, such as the more realistic Kabuki, necessarily belongs to a lower level of symbolic performance.

The Japanese language itself is deeply interrelated with this basic character of Noh. In Japanese the subject of a sentence is often understood without being expressed. Thus one might say that the language itself has a Noh-like quality—expressing without expressing. When one tries, therefore, to translate from Japanese into English, the one major problem confronting the translator is the fact of having to express in English what is merely understood in the original. Sometimes the translation may turn out to be an improvement upon the original in its vividness and greater explicitness. But in many cases there is a danger that the translation, especially of Noh plays, may become too explanatory, adding what was not even understood.

One example. In "The Priest and the Willow", a Noh play based upon a poem by Saigyō the great wandering priest-poet of the late twelfth century, we find a passage which is here translated as follows:

By the side of a road
Where a clear stream flowed
In a willow's shade
I thought I would pause a moment,
*But stood rooted to the spot.*³⁾
(p. 226, italics mine for all quotes)

This is not a *mistranslation*, but I find the last line somewhat too explanatory. The poet says

3) 「道のべに、清水流るる柳蔭、清水流るる柳蔭、暫(しばし)とてこそ立ち留まり…」(『遊行柳(ゆぎようやなぎ)』). 西行のもと歌は「道の辺に清水流るゝ柳蔭(かげ)しばしとてこそ立ちどまりつれ」(新古今、夏).

only that he "had stopped (intending it to be) for a while." Admittedly, one might well infer from the original that the poet did rest in the shade longer than he had intended, but there is nothing in the poem that states explicitly that he "stood rooted to the spot." The implication of the English version, of surprise or of fear, is clearly out of place. This may, however, appear to be an overly nice distinction.

In "The Reed Cutter," a wife finds her former husband selling reeds at a market place. She is translated as saying:

I guess that was why you hid.
But how can one know another's heart?
I wondered if, after you left me,
Like the dew vanishing with the dawn,
You took another wife...⁴⁾

(p. 158)

Beautiful poetry, one might say. The second line, however, seems to be uncalled for. It is not in the original, and even as an explanatory addition sounds too heavy-handed and explicit. If for some reason a need for a line was felt here, something like "But still..." would have served the purpose and have remained much closer to the original (*moshiwa mata*). This, it should be noted, is but one of the numerous instances where a line or a phrase has been added by inserting into the text the explanations and marginal notes found in the scholarly Japanese editions of the Noh plays. (Japanese scholars are traditionally long-winded in their paraphrasings—a trait Western translators should be well aware of.)

In the same play, the reed cutter muses on the course of his own life:

Even if in the round of fate
By chance we obtain human form,
A rare gift, seldom given,
How can we know its value?
Except in a house of wealth and fame?⁵⁾

(p. 153)

Here again, the italicized lines do not seem justified by the original. Such a materialistic statement does

4) 「かくは思へどもしほまた、起き別かれにしきぬぎぬの、妻や重(かさ)ねし難波人(なにわびと)…」(「芦刈」)

5) 「げに受け難き人界(にんがい)を、たまたま受くる身なりせば、栄華(えいか)の家(いえ)には住みもせて、かかる貧家に生(シ)まるること、前(さき)の世の戒行(かいぎよお)こそ拙(つたな)けれ」(「芦刈」)

not harmonize with the reed cutter's stoic acceptance of his life. The original text runs:

Instead of living in a house of prosperity
The fact that I was born to such a poor family—
(It must have been due to my sloth
In serving the Buddha in my former life.)

Roughly, this is what he says, no more, no less. The rhetorical question put in the mouth of the reed cutter ("How can we know...?") seems to be a misplacing of the meaning in a new emphasis. Giving expression to things unexpressed (thus changing subtly the symbolic effect) and in the process altering nuances inevitably misleads the reader to some extent. Still, such faults are of minor significance when compared with the over-Westernizing tendency which is frequently seen in English translations from Japanese.

It goes without saying that a translation should be readable (why go to the trouble if no one can follow the result?) and sometimes fidelity to the original must be sacrificed for clarity. No editor would want a text cluttered with overscholarly footnotes, however semantically faithful and accurate the net result may prove to be. In this respect, the translations we have here are free from cumbersome footnotes and generally quite readable. The overall competence and frequent ingenuity shown by the translators in rendering the abstruse language of the original texts into smooth and sometimes flowing English is indeed striking. And when one observes that a great part of the almost innumerable allusions in the original have been conscientiously, and in most cases successfully, incorporated into the translation, one cannot but feel that this volume is a veritable tour de force. The high level achieved should become immediately evident to anyone who takes the trouble to compare, for example, Eileen Kato's careful translation of *Kayoi Komachi* ("Komachi and the Hundred Nights") included in this volume with Ezra Pound's rather sloppy version of more than half a century ago.

However, by heeding (too much, I would say) the tastes of Western readers, the translators have occasionally created a strange mixture of images

that do not mix well. The Japanese *susuki* (*Miscanthus cinensis*), for example, is rendered as "pampas grass" (*Cortaderia argentea*) in the two plays "Komachi at Sekidera" and "Komachi and the Hundred Nights." The botanical fact that *susuki* and "pampas grass" belong to two different plant genera is not in itself that important. The point is that *susuki* with its autumnal associations—ghosts, the moon, and so on—is totally different in its effects upon the reader's mind from "pampas grass" with its associations of gauchos, poncho, the pampas, and even W.H. Hudson! "Pampas grass pearly with dew"⁶⁾ (p. 69) is not, to my Japanese mind, part of our native scenery. *Susuki* sounds much better (Ezra Pound to his credit retains it) and even if it does call for a footnote, it surely deserves the trouble.

To give another example. Chinese and Japanese poetry frequently compare the shortness of life or prosperity to the *mukuge* (or *kinka*) flower, which is said to blossom for only a day. Botanically again, the *kinka* is said to belong to the genus *Hibiscus*, akin to the rose mallow. But botany aside, for the general Japanese reader it symbolizes the ephemeral. In "Komachi at Sekidera", though, the translation runs:

Old Woman: My life is over, and now I see
Chorus: It was like a *rose of Sharon* that
knows
Only a single day of glory.⁷⁾
(p. 73)

Now this sounds too Biblical (*cf.* "I am the rose of Sharon, and the lily of the valley.") to fit comfortably into the Noh landscape. Even if the *kinka* flower were identical with the flowering shrub now called the "rose of Sharon"⁸⁾ by Western horticulturalists, the Hebrew rose was a rose and the Biblical name Sharon ill fits a ninth century Japanese court poet. I am by no means a "botanical" purist, but I do feel that even in its

6) 「織るや錦の旗薄(はたずすき), 花をも添へて秋草の, 露の玉琴(たまごと)搔き鳴らす…」(『関寺小町』)の訳文より。

7) シテ「生命(せいめい)すでに限(かぎ)りとなつて」地「ただ槿花一日(いちじつ)の栄(えい)に同じ」(『関寺小町』)。

8) *cf.* "The rose of Sharon is in fact a hybridized, double variety of *Hibiscus syriacus*, whose blossoms do last but a single day, so that mechanically as it were the metaphor would fit" (R.P. Tripp, Jr.)

English version the Noh world should exclude words with strong Old Testament overtones.

In "The Sought-for Grave" (*Motomezuka*) which is probably the gloomiest play in this collection, the voice of the ghost of Maiden Una⁹⁾ is heard from within her tomb:

Men seldom find their way
To this wide and desolate plain.
Except for my grave, there is nothing here,
Only wild beasts roaming about
*And quarrelling over my bones.*¹⁰⁾ (p. 46)

No one can deny that this is a telling and moving passage. To a Western student this passage would probably have a special appeal, possibly reminding him of the *Battle of Brunanburg* where the English leave the battlefield to the traditional beasts of battle—"The warhawk greedy gorging on carrion..." The passage (outside of a slight ambiguity) translated here evokes associations alien to the Noh world. The problem, however, may lie as much in the original as in the translation, for it seems that the translator followed the minority reading (that is, of the *Hōshō* and *Kita* schools) of the original text.¹¹⁾ Specifically, he should have followed the more widely accepted reading, which has *mōshū*, "longing for this world," for *mōjū*, "wild beasts," and *arawasu*, "make an appearance," for *arasou*, "fight over." This would have given the translation:

The longing to appear again in this world
Is something that dies hard.

This, I think, makes much better sense, and in any case wild beasts do not roam about quarrelling over bones in the Noh world.

Not infrequently the praiseworthy attempt on the part of the translators to render "illogical" Japanese into modern "logical" English seems to backfire. Towards the end of "The Sought-for Grave," the English version goes:

And, last, the Bottomless Fire,
Where she hurtles head over heels.
To suffer unending torment
For three years and three months.¹²⁾ (p. 49)

9) 茜名日処女(うないおとめ)。

10) 「曠野(こおや)人稀(ひとまれ)なり, わが古墳(こふん)ならでまた何ものぞ, 骸(かっぽね)を現(あら)はす妄執(もおシウ)は去(は)ってまた残る」(『求塚』)。

11) 「骸を現わす妄執は」を「骸を争う猛獸は」と読む。

The original of the italicized words is "sokujō-zuge," literally, "feet up, head down." Why couldn't the translator make use of the uncorrupted(?) form of the phrase, "heels over head," a phrase used by such worthies as Wordsworth and Tennyson?¹³⁾ It would have been much closer to the original, and after all isn't "heels over head" more logical when one is being hurtled headlong into the Bottomless Fire?

Readers introduced to Noh for the first time through this collection (with its succinctly written introductory essay, "The conventions of the Noh drama") may be surprised to find that Noh closely resembles ancient Greek drama—the characters are few, the actors wear masks, dances are performed, and above all the chorus seems to play an equally important part in both. There is not space enough here to elaborate on the differences between the chorus in the Noh play (called *ji*) and that of a Greek play (*choros*), but it must be noted that the success of a Noh translation depends largely upon how this important feature is interpreted and translated.

As I have mentioned, the Japanese sentence can do without an explicit subject; and the Noh chorus makes ample use of the expressive subtleties this freedom allows. Towards the end of "Komachi and the Hundred Nights," for example, Shōshō, who plays the principal (the *shitē*), goes over his unrequited love:

Thus did I waste
And exhaust my heart.¹⁴⁾ (p. 61)

His utterance is immediately taken up by the chorus and, according to the present translation, repeated verbatim: "Thus did I waste / And exhaust my heart." But in the original there is no subject. The "I" and "my" here have both been supplied by the translator. As far as the original language is concerned, the speech of the

12) 「炎熱酷熱(ごくねつ) 無間(むけん) の底(そこ)に、足上頭下(そくじよおずげ) と落つる間(あいだ)は、三年三月(みとせみつき)の苦しみ果てて…」〔求塚〕。

13) cf. Wordsworth *The Excursion*, viii. 387 "They... An uncouthfeat exhibit, and are gone Heels over head.;" Tennyson *Locksley Hall Sixty Years After*, 135 "Tumble Nature heel o'er head."

14) シテ「かやうに心を、尽(つ)くし尽くして」地「かやうに心を尽くし尽くして…」〔通小町〕。Shōshō: 四位の少将。

chorus could have with equal impunity been translated:

Thus did he waste
And exhaust his heart.

It all depends on how the translator interprets the utterances of the chorus. On the whole I disagree with the way the chorus has been handled in most of the plays of this collection. Even though the chorus sometimes seems to be emphasizing a particular utterance through an almost mechanical repetition, a slight change is always taking place. A shade of objectivity or, shall we say, of distance, is being added. To give another example, Shōshō is hurrying to see his love, and the chorus asks: *Sugata wa ikani?* A literal translation would be: "How the appearance?" and a fuller translation would be something like: "How will he attire himself?" But the translator here has the chorus asking:

How shall I attire myself? (p. 61)

A difficult and delicate point indeed, and I am afraid that both the editor and the translator may find it hard to come to terms with this reviewer's point of view. Perhaps there is no need to come to an agreement, but I would like to add that I find a close relative—in mood and spirit—of the Noh chorus in the refrains of Rossetti's *Sister Helen*: "O Mother, Mary Mother..."

I have so far restricted myself to some of the general problems a translator of Noh has to cope with, such as the tendency (or sometimes necessity) to give expression to the unexpressed, thus risking a misleading shift of emphasis, the tendency to over-Westernization through the use of language and images totally alien to the Noh world, and finally the difficulties with respect to the interpretation of the Noh chorus. A few more points remain to be made.

In the Preface, the editor claims that "it has been attempted throughout to incorporate every allusion and wordplay" (italics mine)—a praiseworthy and even heroic attempt, one should say. No doubt the attempt has been made, and more than once I have been literally dazzled by the superb performance shown by the translators. How-

ever, in fairness to the reader, the editor should also have mentioned that in not a few cases sentences in the original texts have been truncated or omitted altogether and that some difficulties have been skipped over. Omissions when made—as on p. 288 (part of the chorus), p. 76 (after line 8), p. 260 (part of the chorus), and in other places—should have been duly mentioned. I am well aware that Noh texts differ from school to school—there are five schools in all—but some of the omissions made seem supported by none of the five existing schools.

Another related point. Although not exactly in the same category as an omission, the lines sung together and then separately by the two fisher girls, Matsukaze and Murasame, in "Matsukaze," the first play of this collection, are not clearly assigned as they should have been. One of the charms of this beautiful and moving play is the way the single voice of the girl Matsukaze alternates with the double voice of both girls (See pp. 22–23). The translator fails to indicate this alternation. The same holds true for other passages (throughout this volume) where the chanting of the chorus alternates with that of the actor and a kind of give-and-take goes on. Apparently, the translators sometimes did not bother to keep track of this subtle process (See pp. 153, 161, 202, 232, 233, 245, 286, *et passim*).

No matter how easy the original may seem, it is almost impossible to translate from one language into another without committing some mistakes. The rendition of these abstruse Noh plays into English with so few mistranslations, relatively speaking, is to be highly commended. The translators in general seem to have made conscientious use of commentaries provided by Japanese scholars. There are, however, many passages and phrases in the original which have not been fully elucidated or explained by native scholars, especially in cases where the meaning or implication seemed to be all too obvious, at least to native readers. Unfortunately it is these unexplained and apparently self-evident parts where the translators most often seem to go astray. Moreover, it must be remembered that

Japanese commentators can also make mistakes, in addition to being too long-winded in places.

Lack of space prevents me from mentioning more than a few obvious mistranslations. Part of an imaginary corrigenda for this book might be:

For "we have gathered all the shoots," p. 44, read "we have failed to gather all the shoots."¹⁵⁾

For "The storm winds blow," p. 201, read "The storm winds abate."¹⁶⁾

For "sprigs of fern," p. 291, read "fern shoots." (How can one eat "sprigs of fern"?)¹⁷⁾

For "sleet," p. 43, read "remaining snow" or "thin layer of spring snow."¹⁸⁾

A complete list of course would be much longer. I would like, however, to add just one more case which is somewhat amusing.

This interesting case turns up in the play "Shōkun." Ōbo, mother of Shōkun who has been forced to marry a barbarian king, is shocked by the unexpected appearance of her weird-looking son-in-law:

Oh I am afraid! It is a demon!

Its body is covered with bristling hairs!¹⁹⁾

(p. 174)

So goes the translation. Now a creature covered with bristling hairs surely must be a rarity in Noh plays. Ōbo here is just saying that she is so afraid that she shivers all over. Even in modern Japanese we say, when we are frightened, that "our body hair stands on end": *minoké mo yodatsu*. Ōbo is referring to her own "body hair," not to that of the supposed demon. Further on, this demon is erroneously translated as saying: "hair like a tangle of thorns / Grows thickly over my body"²⁰⁾ (p. 175). The original meaning is that his "hair is bristling and stands on end." It seems that the translator could not get away from his image of a hirsute demon. There are not too many of such "amusing" cases, but I cannot help feeling that the whole collection would have been considerably

15) 「摘み残して帰らん, 若菜摘み残し帰らん」(『求塚』)の訳文中。

16) 「雨降り風落ち…」(『鉄輪(かなわ)』)の訳文中。

17) 原文は「蕨(わらび)」(『大原御幸』)。

18) 「消え残る雪ながら摘まうよ, 淡雪ながら摘まうよ」(『求塚』)の訳文中。

19) 「恐ろしや鬼とや言はん面影の, 身の毛もよだつばかりなり」(『昭君』)。 Ōbo : 王母。

20) 地「棘(おどろ)を載(いただ)く髪筋は」シテ「主(ぬし)を離れて, 空(そら)に立ち…」(『昭君』)。

improved if the translations had been gone over carefully by an outsider whose native tongue is Japanese.

Notes are amply given, in welcome contrast to most previous English translations. Many abstruse expressions, however, as still left with no explanations at all. "The Feast of the Winding Stream"²¹⁾ (p. 262), for example, certainly calls for some explanation. The same can be said for the "Yellow Emperor"²²⁾ (p. 231). The translator could at least have referred the reader to the "Three Kings and the Five Emperors"²³⁾ (p. 257), though this expression is also left unexplained.

An index would have helped the reader a good deal, especially with respect to place names which occur frequently in different plays, e.g., "Tada-

su"²⁴⁾ (pp. 135 and 198).

To sum up, I may have given the impression of showing too much zeal in finding fault, but nothing could be farther from the truth. This collection of twenty translations is, in my view, an astonishing piece of scholarly work and exhibits a high level of performance of a group working in cooperation. For the reader unfamiliar with the Japanese Noh play this collection should serve as a real eye opener. I myself have learned a good deal by going over the translations, and in some respects I have gained more through reading this volume than from long years spent in chanting the *utaibon* (singing texts) under the guidance of my Noh master. In spite of the unavoidable defects and shortcomings, I can say confidently of this book that "here is God's plenty."

(Professor of English, University of Tokyo)

21) 曲水の宴(『西王母』).
22) 黄帝(『遊行柳』).
23) 三皇五帝(『西王母』).
24) (京都の) 紅(ただす)(『班女』, 「鉄輪」など).

■ ELEC が自信をもっておすすめする――

OUR ENGLISH SONGS 1, 2

教師用書:ELEC 著 中島文雄監修 B5 判 各巻 ¥1,600

英語の背景的知識を歌を通して、主として中学・高校生に与えることを目的として、先に *Our English Songs* 全 2巻(生徒用テキスト、各 ¥ 430)を発売したところ、予想以上の好評を得ることができましたので、同書を有効に活用し、より楽しい授業をするためのよき assistant として、特に以下の諸点に配慮と工夫をこらして教師用書(Teacher's Edition)を作成いたしました。

- ① 生徒用テキストにのせた歌のメロディーのほかに伴奏楽譜がつけ加えられている。
- ② Background Information には作者の略歴、時代の背景がのべられている。
- ③ Teaching Suggestion、歌唱指導の手引付。

■ 録音テープ オープン・カセット共 各巻 ¥ 1,600

Unabridged 版 (1)―全 10巻, (2)―全 11巻

ダイジェスト版 (1)―全 3巻, (2)―全 4巻

『音韻論 II』

(英語学大系 第2巻)

寛寿雄・今井邦彦著 大修館書店

xvii+528 pp., ₩1,800

OE, SABURO

大江三郎

I. 内容紹介

本書の前半は、寛寿雄「アメリカ構造言語学における音素論」、後半は、今井邦彦「生成文法の音韻論」である。(以下引用する際は、それぞれ「音素論」「生成音韻論」と略す。)これら2つの論が一巻に収められたのは、ただ単にこれらの理論がアメリカにおいて発展したという地理的な理由だけからではない。このことは本書を通読すれば明らかであるし、またこの批評紹介でもいくぶん明らかにされるであろう。また「生成音韻論」が「音素論」の約3倍半の紙数を用いているが、これは扱われる内容を考えれば決して不当なわりありではない。これは、ある意味では下から上へのレベルのきびしい区別を主張する構造言語学とそのようなものを認めない生成文法の立場の違いを反映するともいえる。

(A) 音素論

1「序論」のあと、2「音素の定義」で、Sapirの「心理的实在」としての音素、Bloomfieldの「物理的实在」としての音素、Twaddellの「虚構」としての音素説が紹介される。このようにこの章では音素概念とそれの設定のための手順が真に確立されるに至った新ブルームフィールド学派に至るまでの、いわば形成期における音素概念の発達が歴史的にあとづけられている。3「音素設定の手順で、筆者は主として新ブルームフィールド学派の中のBlochの方法に従って、分布に重点をおいた音素設定の手順を示す。この学派が Bloomfield の考えを徹底させ、科学的方法を確立した、あるいは少なくとも科学的方法を確立しようと努めたことがよく説明されている。4、5、6 章では具体的な General American の音素分析が示される。原則として新ブルームフィールド学派の立場をとり、所々に筆者自身の考えを織り込みながら、分節音素、かぶせ音素、音素配列の順に記述をすすめる。その中で有名な Trager-Smith の総合型の提示と批判が示される。そして本論の総括、または反省ともいいうべき 7「音素論再考」で、Chomsky が「分類的音素

論」と呼ぶ構造主義音素論が、特にどのような点で生成音韻論の攻撃を受けるのかが概説される。

アメリカ構造言語学の創始者ともいるべき偉大な2人の学者 Sapir と Bloomfield によって音素がかなり違った实在として把握されており、そのうち Bloomfield の考えが新ブルームフィールド学派によって明確化され、特に Bloch の後期の立場において徹底した形態をとるに至った。これに対して、Sapir の mentalistic な考えは、明確には述べられてはいないが、明らかに今日の生成音韻論の中に生きている。具体的な英語の音素分析を提示されることが有意義であることはもちろんだが、このような歴史的発展をはっきりとあとづけ認識することはそれに劣らず有意義なことである。その意味で本論の 2、3、7 章は特に興味深いし、またこれが「生成音韻論」と1巻にまとめられた意義を認めるのである。

(B) 生成音韻論

この論はまず大きく3部に分れる。第I部で生成文法の基本的理念の解説、およびそのような基本的理念に支えられている生成文法の中で音韻部門がどのような位置を占め、どのようなしくみを有しているかが概説される。第II部は、この音韻部門およびそこで適用される規則、音韻規則が、具体的に英語のそれで提示される。これは大きく、強勢配分規則と非循環規則に分けてなされる。前者のうち、主強勢規則、交替強勢規則、複合語規則、中核強勢規則は循環規則であり副次強勢規則と補助弱化規則とは非循環規則である。この第II部で強勢配分規則に非常に大きなスペースがさかれていて、これは、従来英語の強勢配分には規則なしとみられていたのに、その奥底には大きな規則性が見出されるということを明確化したことで、英語の音韻部門の中で最も興味深い部分であることを考えれば当然である。第III部では、I、II 部で示された音韻部門の存在理由およびそれがとる諸形式の詳細が再検討され修正の可能な方向が示唆される。

概して「生成音韻論」は Chomsky-Halle, *The Sound Pattern of English* の考え方を受継ぐものであるが、必ずしも単なる紹介解説に終るものではなく、これを補足修正し独自の考えを出そうとの努力が見られる。特に著者もいうように第IV部での議論は、国内的規模を越えて、今日の音韻研究に影響を与えることになろう。

本書は現代言語学に关心を有する人々にとって非常に有益な手引書になるであろう。本書末尾にあげてある参考文献は重要なものばかりであるが、それを読む前にまず本書を精読し基本的な知識を得た上で、特に关心をもった項目について参考文献に向うというのも正しい行き方だと思う。ただ、生成音韻論は、何といっても日本では研究者が少なく、啓蒙的な議論も統語論の部門に比べれば、あまりなされていない。それで本書の「生成音韻論」といきなり取組むと非常な当惑を感じる読者も多いであろう。そこで私は、この読者は N. Chomsky, *Aspects of the Theory of Syntax* に述べられていることを理解できる程度の背景を有することが望ましいと思う。そこで扱われるのは統語理論だが、生成文法はレベルを分離せず、音韻規則のインプットになるのは統語的表層構造である。また次の簡略化した図式が示すように、音韻部門のしくみは *Aspects* に述べられる統語部門のしくみとパラレルである。



そして *Aspects* の第1章は本書「生成音韻論」の第I部2章、3章と併読すれば非常に有意義であることはいうまでもない。

次に、注意しなければならないことは、本書に収められている2つの理論は本質的に違うということである。実は、私は「違う」ということばをここで使いたくない。「違い」は必ず他方における「類似」の存在を示唆するからである。生成音韻論の音韻表示は一部の構造主義学派のいう形態音素 morphophoneme や原音素 archiphoneme に似るといわれる。しかしこの「類似」は單にひゆ的にいわれる類似であるように私には思われる。生成音韻論の音韻レベルも、いかなる中間レベルも音素レベルとは一致しないということを読者は銘記すべきである。そうすると、本書「生成音韻論」に頻出する /k/ のような表記にもはや迷わされることはないであろう。これはたまたま本書「音素論」における音素 /k/ と外見は同じだが中味は全く違う。「生成音韻論」での /k/ は

[−voc, +cons, −cont, +back] という素性からなる分節素の簡略表記である。「簡略」は「おりたたみ」などにみられる「簡潔」とは異り、スペースを節約するために vocalic を voc と縮める類のものである。

II. 批判的分析

ここでは「生成音韻論」から始める、「音素論」を論ずる際、時に「生成音韻論」に立ち帰る必要があるからである。

(A) 生成音韻論

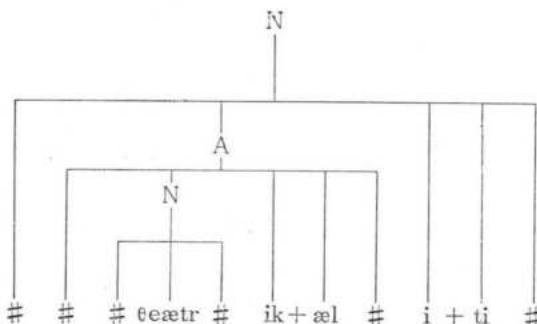
1. 境界表示

は語の画定に際して、つまり非循環規則適用に関して、特に重要な役割を演じ、+ は規則適用における環境指定に関する重要な約束 (5. 61) に現われる (pp. 168—169)。つまり、ある境界が # か + かは重要な意味をもつが、本論では境界表示がすべての場合に明示的であるとはいえない。例えば (5. 67) である。その結果 They are English teachers. における「語」が they と are English と teachers の3つであるとされる。are English が語であるということは、明らかに成分構造に関する直観と反する。語への分析が成分構造と矛盾することがあってよいのであろうか。特に、上の文で、are English を語としないと音韻規則の適用に不都合が生ずるのかもしれないが、その場合考えなおさねばならないのは音韻規則の方だと思われる。上の文で are と English がそれぞれ語であるとするためには、They like easy questions. における like 同様、are が V という「語彙範疇」によって支配されるというふうに表層構造を考えればよい。

次に、(5. 53) は theatricality が

$[N[A[N[\theta eætr]N + ik + æl]A + i + ti]N]$

のような音韻表示をもつという。(原文では i + kæl となっているがこれは ik + æl の誤りであろう。)これをみておそらく読者が不思議に思うのは、# がどうなったかということである。# が個別言語の文法とは独立に一般的



約束によって「大範疇」に与えられる (p.132) ものである以上, *theatricality* は前図のような音韻表示をもっているはずである。多分, 再調整規則がなんらかの *ad hoc* なしかたで # を + に変えるのであろうが, このようなことは一般読者には必ずしも容易に判断はできない。次に, 上の名標付きかっこをもう一度示すが, ○で囲んだ + がどこから来たのかはっきりしない。

[N [A [N θeætr] N \oplus ik + æl] A \oplus i + ti] N

これらは本書での表示法を踏襲すれば左側の] の内側(左側)に位置するのではないか。また本来は [N # [A (#) [N #] θeætr..... であったはずだが, ○で囲んだ # もまた + になるのであろうか, それとも再調整規則はこの種の # を消去してしまうのであろうか。(5. 61) の約束 「X YZ という形式で示される記号列に適用する可能な規則は同時に X+Y+Z, XY+Z, X+YZ という記号列にも適用可能である」の逆は許されないし, またこの中の + に # をおきかえることもできない。循環規則の (8. 133) i/y 規則, 非循環規則の (8. 27), (8. 39) 弛緩化規則, (8. 151) 摩擦音化規則などは環境指定に + が必要であるから, + か # かそれとも何もないかは, 音韻規則適用に関して重要な意味をもつ。

2. 規則の循環的適用

これは上の 1 に述べたことと関係がある。著者は, 語を超える段階での循環的適用は問題なく, 語段階に到達するまでのそれが問題であるとし, 修正の方向を色々検討している (pp. 414—425)。著者が文法のしくみを記述するのにはほぼ踏襲しているのは *Aspects* の記述であるが, Chomsky は「屈折」のプロセスに比べ「派生」のプロセスの記述が非常にむずかしいとして, 当を得た解決はほとんど与えていない (*Aspects* 4 章, § 2.3)。おそらくここにもこの事実の反映がみられると思う。しかしそれにしても語になんらかの内部構造は認めねばならない。著者のいうように, 語の内部構造が「いわれのないもの」ではなく, 語形成過程が「単に想像されているだけのもの」ではないと思う。これは「理想的な話し手・聞き手」の知識, 能力の一部と考えられる。

事実, 著者は語の内部に階層的な構造は認めなくとも, 平面的な構造上の「区切り」は認めているように思われる。これは, 語の内部における + の存在によってはっきり示される。著者の修正案においても + を除くことはできない。(例えば修正された規則 (14. 83))しかし語になんらかの内部構造を認めないと + の設定が可能だとは思えない。

著者のいうように, 循環的規則を語を超えたレベルの適用に限り, 語のレベル (あるいは語に至るレベル——

実際には内部構造を否定すれば語に至るレベルはなくなる) での規則はすべて非循環的とする方が, ある見地からは「よりよい」ことかもしれない。しかし, ある個別言語の文法が, その言語の使い手の知識, 能力を正しく記述したものである時, その文法が記述的に妥当であるといわれる (p.115) とすると, 語に内部構造を認める立場の方が記述的妥当性を有すると思われる。また, これを否定する行き方には, 「簡潔性」の尺度を, 「簡潔なものはそれゆえに妥当である」と解釈する誤り (pp. 449—450) に対する筆者自身の批判が当てはまらないであろうか。

3. 非音声的環境に起る変化

名詞の単数, 複数, 動詞の現在, 過去のような屈折は, goose—geese, find—found のような不規則変化だけでなく, boy—boys, play—played のような規則変化も, 統語的素性構造を環境とする。つまり非音声的環境に起る変化として, 再調整規則の一部をなすとされる (§ 8.3.6)。(なお, ここでひとこと注意しておかねばならないが, ここで [+past] [+plural] という統語的素性と考えられているものが, 本論のはじめ, 例えば p.133 では constituent として表示されており, 不必要な当惑を読者に与えかねない。) どのような屈折によって複数形や過去形を作るかということは, 個々の語彙項目の性質であって一般的に予知できないから, 「規則素性」として各語彙項目について語彙目録表示に含まれることになる。(§ 12.2.1)。

ここでは 2 つのことを問題にしたい。まず, 本論では, {/-id/, /-d/, /-t/} および {-iz/, /-z/, /-s/} をそれぞれ一気に与える再調整規則があるかのように考えられている (p.337)。しかし, まずそれぞれ /-id/, /-iz/ (/ed/, /ez/?) が与えられ, 環境に応じてその母音の脱落および更に「順向同化」の規則を設定することが可能であるように思われる。それはより一般的な処理であり (おりたたみ可能), また歴史的事実にもよりよく一致するとみられる。もちろん, 環境の指定には統語素性を用いねばならないからこれはすべて再調整規則であろう。再調整規則も, 少なくとも部分的に線形順序をなすと思われる。

次に, 屈折における「不規則形」と関連して, 次的一般的な文法解釈規定をどう扱うかの問題である。

(12. 27) 形式素を構成するすべての分節素は, すべての規則素性に関してプラス指定を受ける。

(12. 28) 形式素を構成するすべての分節素は, その形式素自体に指定されているすべての [αK] についてそれと同じ指定を受ける。

規則変化をする名詞や動詞、例えば cry や cow が find → found, mouse → mice の変化に従わないことを示すために、これらの変化規則にマイナスの指定を受けねばならないとする、語彙目録表示における規則素性は規則的、非例外的な変化をする語によってかえって著しく複雑にされてしまう。この不都合をなくすために著者がとった方法は (12. 27) を (12. 30) のように改訂することである。

(12. 30) 形式素を構成するすべての分節素は、すべての非例外項目用規則の規則素性についてプラス指定を受け、すべての例外項目用規則の規則素性に関してマイナス指定を受ける。

しかしこの処理には問題がある。まず、あるグループの規則を「例外的」と「非例外的」なものに分けることはいかにして行なわれるか。このようなことがあらゆる場合に首尾一貫的にできるものではない。第 2 に、(12. 27) (12. 28) は、屈折変化だけでなく、sincere—sincerity, obese—obesity のような派生上の問題も統一的に処理するための規定であった。もし (12. 27) を (12. 30) に修正してしまうならば、このような、屈折上の問題と派生上の問題とをそれぞれ無関係に扱わねばならなくなる。これは明らかなマイナスである。そこでこのようなことを防ぐために私は余剰規則による処理を提案する。例えば過去形に /-id/ を与える、いわゆる非例外的な規則を Rule A とすれば、語彙項目の規則素性に関する、次の 2 つの余剰規則が存在する。

① $[\alpha \text{ Rule A}] \rightarrow [-\text{Rule Z}]$

unless α is + and the formative is explicitly specified as [+Rule Z].

② $[+\text{Rule Z}] \rightarrow [-\text{Rule A}]$

($\alpha = +$ or $-$)

(Rule Z is of the form: $X \rightarrow Y / [+ \text{past}]$.)

かくして、規則変化をするものは、不規則変化の規則素性に対して明示されていない場合は常にマイナスの指定をもち、また、不規則変化をするものは、規則変化の規則素性に対して明示されていない場合は常にマイナスの指定をもつということが分る。複数形の場合も同様に扱える。①で α が - の場合というのは、put, set などいわゆる無変化過去を有する動詞の場合である。この方法は、始めから「例外的」「非例外的」を区別してかかる行き方と表面的には似ているかもしれないが、これとは本質的に異なる。

(B) 音 素 論

1. 音素設定の原則と手順

a. 分類的音素論の備えるべき 4 つの条件

生成文法の立場から音素論——いわゆる分数的音素論——の備えるべき条件は (i) 線条性、(ii) 不変性、(iii) 双方向唯一性、(iv) 部分決定性の 4 つである (p. 100)。これらについての生成文法からの批判が当っているか否かをみよう。

(i) 線条性 著者は、この条件は生成文法家が作り出した架空のものだという。確かに音素解釈には同時的特徴の継時的特徴としての分析に依存しているものがある。しかしそれだけでは線条性を否定することにはならない。ひとたび同時的特徴が継時的特徴に——そしてその結果音素連続に——分析されると、そのような継時的特徴または音素連続は線条性をもたねばならないからである。しかしこのことは必ずしも言語の事実に即さない。著者自身が引用するものの中によい例がある。painting, hunting, winter などにおいて、V—V の環境で弾音的鼻音 [n'] が起こるが、これを /nt/ と分析する (p. 70)。鼻音性を /n/ に弾音性を /t/ に割り当てるわけだが、弾音性は決して /t/ の示差的特徴ではない。Betty などで歯茎弾音 [f] が /t/ の異音とされることがあるが、それは弾音性のゆえではない。

(ii) 不変性 これは (i) で述べたこととも関係がある。ある方言では、歯茎弾音 [f] が Betty, Kitty などでは /t/ の、three, gathering などでは /r/ の異音とされる。これは部分的重複である (pp. 36—37)。これは明らかにこの条件に反する。著者は「構造言語学者の中には部分的重複を認める人は多く、本論もそうした見解をとっている（から批判は当らない？）」といっている (p. 101) が、これは正に立場の不徹底を示すもので、構造言語学の立場をおしえすれば、不变性を支持し、あらゆる重複を認めないことになるのではないか。著者はまた、「現在においては、分布が音声的類似に先行するものであり、音声的類似は postulate の地位から operating procedure の地位に格下げされた」という Hill の言葉を引用しているが、部分的重複が、この重要視される分布概念を危くすることは、部分的重複と相補分布の概念が相いれないという Chomsky の批判が正しいことからも明らかである。著者は上の場合について、V—V, /θ/ or /ð/ — と、「環境が全く違うから混乱のおそれはない」というが、これは音素設定の厳密な手順を表わす言葉だとは思われない。著者を含め、[f] を（また (i) における [n'] を）上のように音素解釈する人たちは、スペリングや形態を考慮に入れていくと考えざるを得ない。これが必ずしも悪いとは思わないが、そのためには原則をはっきりさせる必要がある。「本論は一応新ブルームフィールド学派の『下から上』の研究方向をとり、時に

応じて形態論や統語論上の考慮も加える」（本書「まえがき」）という言葉は原則を立てにくいことを感じさせる。

(iii) 双方向唯一性と部分決定性 音声と環境が与えられると音素が、音素と環境が示されると音声が決定されるというこの条件を否定するのに好都合な例が本論の中にある。writer [raɪfə] : rider [raɪfə] — [f] は歯茎弾音——を /rajtər/ : /rajdər/ とそれぞれ分析した場合、母音の長さという音声表示における相違が、音素表示では /t/, /d/ という子音の違いによって示されているという、線条性を否定するために提出された例である (p. 101)。母音の長さが余剰的で、環境が(いうまでもなく音素的に)同一なのだから、同一音声 [f] が与えられて、それから異なる音素 /t/, /d/ を与えることはできないし、逆に異なる音素 /t/, /d/ を同一音声 [f] に戻すことはできない。

以上のこととはすべて、著者が一応上記 4 条件とは分けて論じている「音素レベルを設定することの不当さ」に帰結すると思われる。

b. 中和

本論を含めて今日の音素論では分布を音声的類似に優先させる。そして音声的類似にはっきりした原則がないともいえる。だからこそ部分的重複を認めたり、pray, tree, cry などにおける摩擦音 [f] を、流音性と相いれない摩擦性を有しているのに、それを「非示差的」として /r/ に属させるということになる。示差的、非示差的特徴の区別は音声的類似を考える場合重要な基準となるべきだと思うが、実際には音素設定に際しあまり役立たず、むしろ音素が設定されたあとでつけたり的説明として用いられるきらいがある。いずれにせよ、音素論で音素を最小の discrete な単位として考える音素優先の態度は動かせない。ところで「中和」は実際には音素の中和というよりはある示差的特徴の中和なのだが、音素論者はどうしてもこれを音素の中和と受取ろうとする。そうすると原音素は音素 /x/ であって同時に (/x/ でない) /y/ でもある単位ということになり、これは賛同しがたいと感ずることになる。従って「中和」は音素論になじまない。

本論で中和が問題にされるのは spill, still, skill などでの /s/ のあとの無声軟音をめぐってである。私はこの場合も中和として解決したいのだが、ここでは「同型性」による分析で処理している。それでよいと思う。ところで英語の鼻音は特殊な分布を示す。特に [ŋ] の場合 V- \emptyset , V-V 以外で [m], [n] と対立しなくとも、これらの環境での対立によってすべての場合に 3 つの鼻音音

素を立ててよいと思う。しかし著によれば、東南部の方言で [-ng-] が保存されているものがあり、singer, finger は頭位の /s/, /f/ 以外は同音語になるという (p. 69)。著者はこの方言では /ŋ/ が欠け、[ŋ] は /g/ の前の /n/ の異音と解されるというが、語末での [ŋ] と [m, n] の対立を示す rim-ring, sin-sing のようなペアがある以上、これはおかしい。(語末の [ŋ] を継時に /ng/ と分析しようという提案なのかもしれないが。) この対立を生かしてすべての場合に 3 つの鼻音音素を立ててよい。また [ŋ] を /n/ の (/m/ のでなく) 異音であるとする論拠も全く見出せない。それよりは V-C の環境で鼻音の調音点に関する示差的特徴が中和されるとする方がよい。生成音韻論が鼻音をいかに扱うか、特に (8. 53) の規則とそれをめぐる記述 (pp. 252—253) は、関連的に参照すると興味深い。いうまでもなく、生成音韻論において、[ŋ] は音声レベルにおいてのみ現われる子音である (p. 238)。

2. 方言変換ルール

「音素論」では方言変換ルールが時々口にされるが、具体的なものは /Vr/ と /V \emptyset / の間のそれぐらいである (p. 52)。そもそも、母音の前の /h/ と区別するためには、複合核音の音節副音としてしか現われない特殊な音素 / \emptyset / を設けるのは大きすぎる代償のように思われる。しかしそれはさておき、この変換ルールは問題がある。peer, pair, pore, poor などをめぐる変換はいいとしても、court のような語にもこのルールはあてはまるであろうか。著者が /V \emptyset / をもつと考える方言でも、この語は caught と同音語で、中むきのわたりというよりは母音のひきのばしを有するとみられるから、この場合にも /V \emptyset / をあてはめれば / \emptyset / は長さを異音としてもち、非示差的な母音の長さが音素表記を受けることにならないか。しかし、何よりも重要なのは、音素論の立場でこのような方言変換ルールというものがそもそも可能かという疑問である。いうまでもなく、生成音韻論では、ある種の方言間の違いは規則の適用順序その他の違いによって説明される (pp. 390—398)。ところがここでの変換ルールはどうか。/Vr/ をもつ方言と /V \emptyset / をもつ方言とそれぞれに独自の音素体系が確立されるのだから、/Vr/ ⇌ /V \emptyset / という場合上に指摘したような問題が起こる。また同じく V と書いてあっても 2 方言の V は簡単には比較できない。今、hot, cot, pot などを極めて規則的にそれぞれ [hɒt]..., [hət]... のように発音する 2 方言があり、それぞれの音素体系の中で /hɒt/..., /hət/... のように音素解釈されるとしても、単純に /ɔ/ ⇌ /ə/ のよ

(p. 57 へづく)

『新英文法概論』

山口秀夫著 篠崎書林刊
iv+411 pp., ¥ 1,800

KONISHI, TOMOSHICHI

小西友七

これは本格的な英語の文法書である。昭和 23 年、本書の旧版は斎藤静著『英文法概論』となっている。戦後の荒廃した最中に、よくぞこれだけの独創的な「概論」をと賞賛する声が高かった。筆者などは学校を卒業するとすぐ戦場へということで、長いあいだにすっかり英語を忘れてしまって、英文法をこれによって取り戻そうとした時代のあったことをよく覚えている。今この本の書評を求められ、その当時ひもじい思いをしながら引いた赤線を懐しむ気持で一杯である。特に、序説の

——言語研究の対象は「話す人間」である。「話す人間」の物理的・精神的活動の総体を言語活動と呼ぶ。この活動にあずかるのは言語主体であって、その手段はいわゆる言語 (language) である。……から始まって、言語とはどういうものかを説き下すあたり、いまだに脳裏に深く刻みつけられている。この書物が、いま、B6 版から A5 版へと、紙質も印刷も、この 20 数年間の歴史を反映して、文字どおり装いを新たにして出版されたことを心から喜びたい。

本書を手にして、最初ちょっと驚いたことは、著者が斎藤静氏から山口秀夫氏に変わっていることであった。しかし、はしがきを読んでいるうちに、あれは実は山口教授の筆になるものであったか、ということを知ってまたびっくりした。しかし、山口教授といえば故斎藤教授の秘蔵弟子とも、いな分身ともいうべき方と聞いていたから、あり得ることだ、そしてかえって、筆者は幽明境を異にした師弟の絆の強さと美しさに打たれただいである。山口教授と言えば『英語意味論』(1969) の著者として海外でも令名の高い学者であることは、私から紹介するまでもなかろう。

さて、『英文法概論』が出てからすでに 20 数年を経た。この間、日本の英語学界は構造言語学を経て、今や変形文法の時代に移りつつある。こうした背景を踏まえて、伝統主義に立つとはいえ、本書も改訂の必要に迫られていたわけである。『新英文法概論』の内容目次を一

覧すると、

序説、〈言語〉〈英語〉〈文法範疇〉、本論、文の構造、叙述、節 (1), 節 (2), 句、動詞、名詞、形容詞、副詞、代名詞、前置詞、語順の 12 章に分かれ、旧版より句の 1 章が増えている。旧版の並列、従属の 2 章は節 (1), 節 (2) と整理されている。

まず、「序説」から見てみよう。「序説」は最も改訂の目立つ部分で、アメリカの新言語学だけでなく、p.12 に語論 (Lexis), 傾斜 (Cline) という用語から察せられるようにイギリスのロンドン学派の影響も看取される。p.1 で、さきに引用した部分から続いて「言語の現われ方はそれぞれの国語によりその慣習が異なっている。意志・感情・判断力を備えた個人はこのような精神的・物理的な全言語活動に参加する。話し手は言語主体と呼ばれる。話し手はいつも聞き手を予定するばかりでなく、ある情況におかれてその影響を受けるものである……」とある。あの部分はスピーチ・レベル (Speech level) に言及したものと考えられ、話し手が聞き手によって、また話す内容、言語的・社会的環境などによってその言語活動に当然影響を受けるわけで、これは旧版になかったものであるが、適切な追加である。その他、改訂増補され updating になった箇所が多い。特に、「文法範疇」(pp.11—19) の部分は全面改訂に近い。旧版には、文法手段として、形式 (Form) と機能 (Function) の 2 つをあげてあったが、新版では、形式と意味 (Meaning) としてあることも意味深い。

ただ、「……英語の進化の姿はその生きたことばとしての実際によく映されている。通俗語 (Colloquial Speech) はそのような生きたことばである。文語 (Literary Language) はいっそ伝統的な類型に拘束されていて、自然な姿から遠ざかっている。文語も通俗語の要素を取り入れることによって絶えずその生命を新たにすることができる。話し手の働きが常に言語の新しい生命の創り手である。その意味で口語 (Spoken Language) は

生きている人間の思想・感情、したがって人格を端的に表わすものである」とある。内容についてはともかく、通俗語 (Colloquial Speech) というのが旧版のときから気になっていたが、今も依然として抵抗を覚える。「通俗語」と「口語」と p.19 に出てくる「話すことば」の三つはどういう関係にあるのだろうか。colloquial は literary に対し、spoken は written に対するのが常識だと思うのが、私の読み方が浅いのであろうか。また、p.11 に言及されているアメリカ英語についてはイギリス英語にくらべて簡略にすまされているが、現代英語や日本のおかれた立場からはもっとくわしい記述が必要であり、オーストラリア、カナダなどの英語についても一言あってしかるべきであろう。p.12 から p.13 にかけて傾斜 (Cline) の例をあげての説明も始めての人にはわかりにくい。

しかし、以上のことはあるが、伝統文法書として類書に見られないこの「序説」は、やはり魅力ある序章である。

「本論」においては、旧版と同じように、従来の文法書が多くとっているように名詞、代名詞、形容詞…から入るのではなく、文の構造から始めていることはすでに見てきたとおりであるが、これは C. T. Onions にすでに見られ、近くは R. B. Long の *The Sentence and Its Parts* (1961) や *The System of English Grammar* (1971) もこの行き方をとっている。また体系は異なるにせよ変形文法も L. Hjelmslev の言理学 (Glossematics) も大きな単位から出発しているといえよう。これは我々の発話 (Utterance) の単位が文であるということを考えれば、文から始めて小さな単位に及ぼしていくほうが自然であり、かつわかりやすいと思う。

こういう取り扱いの中で内容を見てゆくと、ほとんどすみからすみまで改訂のあとが目にとまる。たとえば、I am forgetting (うっかりしていました) (p.221) のように、旧版になかった訳 (しかも適訳) が施されているのは、特に学習者にはありがたいことだろう。こうした多くの改訂の中で、一きわ目にとまったのは、p.217 以下の Aspect の項である。旧版では「進行形」などのもとに一応「相」を認めていたが、副次的なものであった。今回はこれが前面に押し出され、たとえば「進行形

(延語形式) はある一定時に関連して用いられ、その動作を表わす行為または状態を、行為者の側より内面的に体験的に表現する形式である。このような表現相 (Aspect) を未完了相 (Imperfective) という。従って、一定時における他のでき事と対照してこの形式はしばしば、印象的・直観的・鮮明な叙述に用いられる。またこれは感情強調にも用いられ、種々の意味上の陰影を伴う

ことがある。未完了相はいわば線的 (—) な表現相で、単純形式の表わす点的 (•) な完了相 (Perfective) と対照的である。単純形式はでき事または状態を、観察者の側より外面的に、概念的に表現する形式である。ここに形式上の対立がある。」というふうに整理され、明確な解説が行なわれている。そして、

What can the child be crying for? (何を欲しがって泣いているの?)

He felt that the chieftain was being a martyr for his benefit.—S. Lewis Mantrap (隊長は自分勝手に苦しんでいるのだと思った)など、その他たくさん用例があげられていて理解の助けになる。旧版ではこのようにはっきりとした説明はなく、用例もまた不十分であった。

以上はおもに本改訂版の紹介であるが、書評らしくするため、一、二気のついたことを述べておこう。

第一に本書は副題に *Outlines of the Present-Day English Syntax* とあることでも明らかなように、現代英語の文法書である。そうすると、歴史的な説明はともかくとして、現代英語の記述に忠実であって欲しい。それが、ちょっと見ても、あげられている用例が Shakespeare, Milton から Dickens, Kingsley などというふうに現代作家でない人からのものが目立つ。これでは、述べられた説明なり規則なりが、果たして現代英語に適用できるか、はなはだ心もとなく思われる。たとえば、p.60 で Ethical Dative (情感的与格) を説明し、「今は古用で、現代英語ではまれである。」として、次ページで 2 例をあげておられるが、H. Cain (p.62 で Hall Cainとなっていて不統一) と Shakespeare からで 2 例とも古い用例のみである。我々としては、むしろ「まれ」であるという現代英語の用例をこそ欲しいので、これが、今日どのような人がどのような文脈や場面で用いているかということにこそ関心があるのである。それとともに用例のあげ方が実に不統一で、あるときは出典がなかったり、あるときはあっても作者名だけであったりして、作者名も作品名もちゃんとあげてあるのはむしろ少ないのである。

第二に音声面も、今日の文法書ではなくてはならない面であろう。本書はこの点でかなり注意を払ってはいるものの、まだ十分とは言えない。たとえば p.23 He a poet! (あの人が詩人だなんて) とか p.296 English teachers の 2 意など、強勢をちょっと示してやるだけで学習者にはどれだけ助けになろう。p.61 の二重目的語

(p.57 へづく)

展望通信

◆'72年 ELEC 海外英語研修

ELEC では今夏「ミシガン州立大学英語研修旅行」を下記の通り実施する。

1. 旅行期間 7月31日(月)～8月29日(火)
2. 英語研修 ミシガン州立大学英語研修センターで
8月2日から21日までの3週間。
3. 旅行経費 ¥ 455,000
4. 募集人員 40名
5. 申込締切 6月20日(火).ただし、定員になり次第締め切ります。
6. 申込書 「募集要項」および「申込書」は、東京都新宿区角筈1-1カワノビル内日本交通公社海外旅行新宿営業所あて請求する。

◆ELEC 理事・評議員の改選

2月24日に国際文化会館で開催されたELEC 評議員会・理事会において下記の通り ELEC の新役員が選ばれた。

【理事(兼評議員)】

<理事長>

竹内俊一 三菱石油株式会社相談役

<専務理事>

高橋源次 明治学院大学名誉教授

<常務理事>

武藤義雄 元日本ユネスコ国内委員会事務総長

<理事>

安西正夫 昭和電工株式会社会長

土光敏夫 東京芝浦電気株式会社社長

原純夫 東京銀行頭取

服部四郎 東京大学名誉教授

砂野仁 川崎重工株式会社

上代タノ 日本女子大学名誉教授

柏谷よし 津田塾大学名誉教授

川又克二 日産自動車株式会社社長

木川田一隆 東京電力株式会社社長

駒井健一郎 株式会社日立製作所社長

黒田巍 東京教育大学名誉教授

前田陽一 東京大学教授

松本重治 国際文化会館理事長

水上達三 三井物産株式会社代表取締役会長

森戸辰男	日本育英会長・元文部大臣
永野重雄	新日本製鉄株式会社会長
中島文雄	東京大学名誉教授
中山素平	日本興業銀行相談役
成田成寿	東京教育大学名誉教授
太田朗	東京教育大学教授
酒井杏之助	第一銀行相談役
清水謙	国際基督教大学教授
朱牟田夏雄	東京大学名誉教授
高木八尺	東京大学名誉教授・日本学士院会員
辻直四郎	東京大学名誉教授・日本学士院会員
植村甲午郎	経済団体連合会会长
【監事(兼評議員)】	
鹿住菊太郎	千代田工業株式会社常務取締役
難波勝二	東洋大学名誉教授
【評議員】	
足立正	日本商工会議所名誉会頭
愛知揆一	衆議院議員・元文部大臣
天城勲	元文部事務次官
日高第四郎	前学習院女子短期大学長
堀江董雄	貿易研修センター理事長
堀田庄三	住友銀行会長
井上五郎	中部電力株式会社相談役
石橋正二郎	石橋財團理事長
石坂泰三	経済団体連合会名誉会長
岩村忍	京都大学名誉教授
岩佐凱実	富士銀行会長
兼重寛九郎	東京大学名誉教授
川北楨一	日本興業銀行相談役
茅誠司	元東京大学総長
木内信胤	世界経済調査会理事長
前田義徳	日本放送協会会長
松田竹千代	衆議院議員・元文部大臣
松方三郎	電波管理審議会会长
宮沢喜一	衆議院議員
水野成夫	サンケイ新聞社相談役
灘尾弘吉	衆議院議員・元文部大臣
内藤誉三郎	参議院議員・元文部事務次官
野沢登美男	全日本中学校長会長
緒方信一	日本育英会理事長
大浜信泉	元早稲田大学総長
奥田東	前京都大学総長
斎藤勇	東京大学名誉教授・日本学士院会員
坂西志保	国家公安委員
佐藤喜一郎	三井銀行取締役相談役

武見太郎 日本医師会長
田中義男 前東京都教育委員会委員長
田付景一 海外技術協力事業団理事長
豊田実 九州大学名誉教授
宇佐美洵 前日本銀行総裁
山際正道 元日本銀行総裁
矢野一郎 第一生命保険相互会社相談役

【顧問】

斎藤勇 東京大学名誉教授
豊田実 九州大学名誉教授

◆ELEC 新刊図書

<3月1日発行>

『英語の発想と表現演習』

長谷川潔・木塚晴夫 共著 ￥350

本書は、英語の発想内容を心理学的・意味論的アプローチによって分類し、日本語と英語の共通した点、違った点をはっきりと対比し、それを意識して英語を書けるように工夫した英作文のテキストです。高校上級および大学一般教養課程用。なお、本書には教師のみに頒布する『教授用資料』￥100が別に用意されています。

<4月10日発行>

『実践英語教育』 山家保著 ￥1,800

英語教育実践の第一人者である著者が、過去20年間にわたって進めてきた実践研究の成果をまとめたもので、英語教育関係者の必読の書であります。

<4月20日発行>

『英語の測定と評価』

D.P.ハリス著・大友賢二訳注 ￥950

本書は、D.P. Harris の *Testing English as a Second Language* を翻訳したもので、外国語としての英語テストはいかにあるべきかを論じており、英語教育現場の先生方の必読書であります。

◆ELEC 英語学特別講座

ELEC では下記により英語学特別講座を開催します。
聴講は無料です。

題：「アメリカ英語の婉曲語法」

講師：國弘正雄（NHK 中級英語会話講師）

期日：1972年3月26日(日) 10:00—4:00

会場：ELEC 会館（千代田区神田神保町3-8）

◆ELEC 月例研究会

ELEC 会館を会場としてつぎの通り研究会が開催されます。入場無料。

第55回 4月22日(土) 2:30—4:30

「英語教育の諸問題」

東京電機大学教授 納谷友一氏
第56回 5月27日(土) 2:30—4:30

“English Education in Japan Today

—An Outsider's View”

日本研究センター所長 Dr. Kenneth D. Butler
第57回 6月24日(土) 2:30—4:30

“Linguistics, Psycholinguistics, and the Teaching of English”

ELEC 英語研修所講師 Mr. Richard D. Moores

◆English Teaching Forum の配布

USIA 発行の英語教育専門誌 English Teaching Forum (隔月刊) は ELEC が配布を行なっております。講読料は年額1,000円(含送料)。

なお最新刊号(3月—4月号)はつぎのとおりです。
Harry Edelman, “Reality”

Mary Finocchiaro, “Myth and Reality: A Plea for a Broader View”

J. Edgar Lowe, “Are You Fair in Your Grading?”
John A. Upshur, “Objective Evaluation of Oral Proficiency”

Alun L. W. Rees, “Get Them to Rate Your Techniques”

L. Raig, “A ‘Living’ Language”

Robert T. Hayward, “A Critique of the ETF”

Gretchen Weed, “Using Games in Teaching Children”

C. V. Taylor, “Sex, No-Sex, and Gender”

◆原稿募集

『英語展望』では読者からの原稿を募集しております。内容・分量とも制限がありません。ただし未発表のものに限りません。掲載分には規定の稿料をお贈りいたします。

◆ELEC 賞研究論文・実践記録の募集

ELEC では、わが国の英語教育の水準向上、あるいは英語教授法の改善に直接役立つ実践研究を奨励する目的で、「研究論文」または「実践記録」を広く一般に募集しています。締切毎年9月末日。

英語展望(ELEC Bulletin) 第37号
定価300円(送料85円)

昭和47年4月1日 発行

◎編集人 中島文雄

发行人 竹内俊一

印刷所 大日本印刷株式会社

東京都新宿区市谷加賀町1の12

電話(269)1111(大代表)

発行所 ELEC (財団法人英語教育協議会)

東京都千代田区神田神保町3の8

電話(265)8911~8916

振替・東京 11798

ELEC

THE ENGLISH LANGUAGE EDUCATION COUNCIL, INC